

特 261

466



始



佛
教
大
系

正法眼藏第七

(下)

特261
466

正法眼藏徧參

徧參

【義雲頌著】 第卅七徧參 雲駛月運、

雲倚山矣水歸海、鳥下離空魚泳潭、達磨不_レ來_レ東土、二祖未_レ曾_レ往_レ竺乾、

【面山述贊】 第三十七徧參 述云、常啼東請、善財南詢、參師訪道、是乃最初也、

若亦回光于此、則大千沙界、不離方寸、不來不往者、其奇蹤也、贊言 未_レ著草鞋、

先_レ足跡徧大千、光明幡世界、何讓目健連、萬年卽一念、十方亦眼前、門內及門

外、總是艸芊芊、出_レ之與不出、亦須見方便、

【聞解】 正法眼藏徧參卷聞解 徧參述贊に大意を明す、常啼は東請して般若を聞き、善財は南詢して法界を究む、是只抱腰して彼此の叢林を廻るを徧參とせず、一念返照すれば大千界も自己方寸を不離、こゝを知るを行脚の眼とす。

佛祖の大道は、究竟參徹なり、足下無絲去なり、足下雲生なり、しかもかくのごとくなりといへども、華開世界起なり、吾常於此切なり、このゆるぎに甜瓜徹帶甜なり、苦瓠連根苦なり、甜甜徹帶甜なり、かくのごとく參學しきたれり

△辨、絲下割
云、異本作私
△辨、那、り下
割云、洞山語
△辨、那、な
り下云、出達
磨傳神力ノ

義無碍ノ用處ナリ
 宋吾本無しも以下十六字起作現無吾常以下十二字辨、も下割云、已上十六字異本無之有亦爲好
 △辨、那、リ下割云、般若多羅付法ノ偶△那、なり下割云、洞山語△辨、苦なり下割云、更無異味△那、割云、同上、此處甜瓜微帶甜なり苦瓠連根苦なりノ語アル本多シ有無共ニ不妨別意ナシ
 甜甜以下二十字作甜甜微帶甜の參もあ

【聞解】 佛祖の大道……佛門には無上道と云ひ祖門に大道と云ふ、徧參は其の大道の究竟參徹のばにゆき届かねばならぬ、これは外に有るもので無い、人々今日踏で居る足下のこと、其參するについては、洞山に如何是鳥道と問へば足下無絲に去と答られた如く、念々つながれば有無のあと無、一歩々々鳥の空を行く如くなり、又足下雲生して一歩々々雲上を踏み鳥道にして一切處に迹無し、是れが參徹の様子なり、足下雲生は出達磨大師傳、大師印土にて外道を降伏せりし時、足下より雲生し其の雲に乗りて行き玉ふなり○しかも……かうなれども何にも替つたことは無し、理が有れば事があり、初發心の花が開けば、究竟參徹の世界起る道理なり○吾常……洞山の言の如く、徧參の道理は、吾れも常に大切に守ると云ふこと喫茶喫飯常に功なり、只往來する許りが徧參では無い、こゝについて甜瓜の順に甘い方にも徧參し逆に苦について徧參す、順逆愈細に徧參して甘いも苦いも根についてつらなり、徹して究竟參徹するなり○或師説に息災な時は甘い物を甘いとい知る、病の時は甘い物を苦い様に覺ふ、迷はぬ無病とさへ參徹すれば苦いものは昔より苦い。

【私記】 とは 究竟參徹は、のころところなきをいふ「徧參の脚足にさはりなきを無絲去といふ」歩々踏著なるがゆるるに雲生といふ、雲生これ足下なり」この親切を花開世界起、吾常於此切といふ」純一無雜の宗をきこゑて、微帶甜、連根苦といふ」甜甜苦苦とは、上の意味をつよきこゆるのみなり」甜瓜のあまき、苦瓠のにがき、純一の徧參なるがゆるるにかくの如くの參學もあるべしと結するなり」
 【御抄】 先遍參と云事、佛法を參學するに付て、諸方尋師訪道す、是を遍參と思習はしたり、東西南北に師を尋て、參學せむ參、尤遍の理に相叶へし、但今の祖門に所談の遍參非爾なり佛祖の大道は、究竟參徹也と文、此心は祖門の參學、多少にかはらず、一師の下にも遍參なり、一句の内にも遍參也、

るべし
 △辨、那、甜々以下ノ七字ナシ



一偈一句皆是究竟參徹ならずと云事、不可有、以之先佛祖の遍參の道理とすべし、遍の字をば師にかうぶらしめ、參の詞をば弟子に付て心得、今の義非爾也、究竟參徹の理を以て、遍參と談する上は、師弟に仰て、非可談道理なり、又足下無絲去と云へば、すくなく、足下雲生と云へば多やうにきこゆ、只同道理也、其ゆへに此足の字、遍參の參の詞に付て、いできたるか、しかれども、打任たる、人の上の非手足盡界足下なる理を以て、無絲去とは可云歟、足下雲生とは、是も此足下の理の下にいくらも其詞あるべし、是を足下雲生とは可云歟、多少あるに似たれども、無其義、たとへば佛性の上に、狗子あり、蚯蚓あり、乃至莫妄想、有佛性、無佛性と云詞もありき、是ぞ足下雲生にあたるべき、あまたの詞有に似たれども、更非多少、只佛性を説道理許也、非狗子非蚯蚓、只佛性は佛性也と談する筋もあるべし、是を足下無絲去に當べき、此道理只一也、多少淺深の義にあらず、又華開世界起、是は常詞也、春は總にて、花は別の物にて、開なむとは不可心得、華開を世界起と談也、又吾常於此切の詞、古き詞也、此吾は只佛祖を指て、吾と可云歟、吾亦如是の吾なるべし、此吾常の當體をやがて於此切とは可談也、吾常の外の於此切あるべからざるゆへに。

是は佛法の理を示す詞也、あまきうりは、ほぞをとをしてあまし、にがきひさは、ねをつらねてにがしと云也、今の遍參の理究竟參徹の姿如此なるべき也、佛法究盡の理一法を通ずる所のこる所なく、その一理ならぬ交物なき道理に此詞を被引出也、是は文殊の御詞也、於五臺縣無遮の大會を行し時、文殊來現して貧女と成て受施行事ありき、知事此貧女にあいて、爲胎内子惜施き、種々に耻しめたる事ありき、其時現文殊形、入雲給へしとき、此詞の瓜と云詞も猶よせつけず、甜々微帶甜とあれば、只あまき理の外には又不可交也。

【辨註】 辨曰、雖曰究竟參徹足下無絲足下雲生等、更無別事、華開則世界起、理あれば事あり、吾常於此親切なるのみ。

【那一寶】 徧參 那一寶曰、參徹這什麼、橋流水不流、足下無絲去、步步踏著、綠水青山足下雲生、到得歸來無別事、春來華開華開世界起、則理あれば事あり、吾常於此親切なり、吾亦汝亦、左旋右轉、常に不離當處、如是法親密なり、無誰邊○此篇徒衆の暗記散在する故か、文言前後彼此一同ならざる多し、今就古本考正す。

玄沙山宗一大師、因雪峰召師曰、備頭陀何不徧參去、師云、達磨不來東土、二祖不往西天、雪峰淡然之、いはゆる徧參底の道理は、翻巾斗參學なり、聖諦の亦不爲なり、何階級之有なり

【聞解】 翻巾斗……雪峰の云ふ徧參は筋斗を翻じ、もんどりうつて今まで有と見たを無とかへし、無いと見たらば有……もんどかへして一切處に不滞在、久遠に居るものは今時に身を翻じ、今時に居る者は久遠に身を轉じて參するなり、それゆゑに○聖諦すら不爲、何にもなさぬ筋斗翻の堺なり。

【私記】 とは 翻巾斗は、向のものが、こちへひくりかへるをいふ、一切法のとりもなほさず徧參なるを翻巾斗參といふなり。この不動著を聖諦不爲といふ、ただ聖諦のみにして、よのことなきを亦不爲といへり、たとひ階級あるも、なんの階級のみなり、參本いはく、亦不爲是聖諦不染汚也、と

【御抄】 雪峰玄沙の問答見于文、備頭陀何不遍參と云詞は、なと遍參して、諸方に法を不訪と云ふやうに聞れども、非爾也、備頭陀の當體遍參なるべし、又遍參の上には、不遍參の道理もあるべき也、

△那、玄沙山以下之有なりニ至ル文ヲ(四三七頁本文四行)すなはち徧參なりノ次行ニ排ス

番ハ觀乎

福本、給下無古佛二字、次下古佛作曹巖、宋音本、を徧參する以下廿四字作の一著子なるを徧參すること終始八年なり末上に徧參するとき

又達磨不來東土の詞不審也、正く東土へ來給て、此祖門の佛法をば弘め給しがゆへに、祖師西來意と云詞もいでく、但達磨の皮肉ならぬ所あるべからず、然者何の所に東西を立て、來不來の詞に可滯乎、二祖は又一定西天へ不往なれば、有謂と聞ゆ、但是も前の義ならば、今の不往の詞も、如此心得は、首尾不可相應、不來東土も、不往西天も、只同理也、達磨與二祖、皮肉骨髓更不可有差別、是則今の遍參の道理なるべし、西天へは不往なれば、ゆかずと云ぞなむと心得むば凡見なるべし、不用不用雪峰然之すとは印可の詞也、又番巾斗とは、打返と云詞也、たとへば日來の迷妄をあらためて、得道すなむと云はむ程の詞なるべし、解脱の詞に仕也、聖諦亦不爲と云詞、強聖諦第一義と云てもせむなし、聖諦またなすと云道理あるべし、聖諦と云ても要なしと云心地歎、又何階級之有と云は、佛法に階級を不立、ゆへに、何階級之有の道理なるべし、是等皆古き詞を引よせ被書出なり。

南嶽大慧禪師、はじめて曹谿古佛に參するに、古佛いはく、是甚麼物恁麼來、この泥彈子を徧參すること、始終八年なり、末上に徧參する一著子を、古佛に白してまうさく、懷讓會得當初來時、和尚接懷讓是甚麼物恁麼來、ちなみに曹谿古佛道、徧作麼生會、ときに大慧まうさく、説似一物即不中、これ徧參現成なり、八年現成なり、曹谿古佛とふ、還假修證否、大慧まうさく、修證不無、染汗即不得、すなはち曹谿いはく、吾亦如是、汝亦如是、乃至西天諸佛諸祖亦如是、これよりさらに八載徧參す、頭正尾正かぞふるに、十

五白の徧參なり

【聞解】末上……一致仕舞のほとりにと云ふこと○一著子……一と手を打様に活きかへりて、古佛に白す○説似一物即不中と甚麼物什麼來と同意、佛と云ふても祖と云ふても中らぬ、甚麼物なる故に、この即不中が徧參現成なり、八年の工夫現成なり○已下諸佛諸祖亦如是まで前度々々出づ○十五白の白の字を一年の義に取るは、天竺の法度に、年中のことを天文官之者、歳末に天子へ白し上げて、來歳の運氣を考へる爲にする、故にもうすのこゝろで白字を年の義に取る、又一説に夏安居の事を白夏と云ふて出家では一夏が一年なり、故に白を歳の義に取る、白夏の貌、清淨の義なり、この義先にも出たり、故に出處を引ことを略す。

【私記】とは この泥彈子とは、是甚麼物恁麼來の語をさす」末上は、最初なり」梨子も一物なり、柿も一物なり」いへば、かたれば、一物なればあたらざるなり、全一物なることしるべし、徧參現成なるがゆるに即不中なり、八年は、徧參の年月なり、これを南嶽十五年の徧參といふ」

【御抄】是はあまりに諸方口遊し、めずらしからぬ詞也、如文、泥彈子とは、是甚麼物恁麼來の詞を指也、八箇年此詞を南嶽功夫せし所を遍參する事始終八箇年也とは云なり、實にも是に過たる遍參あるべからず、一著子とは此前の詞を又指也、八箇年功夫ののち説似一物即不中と心得たりと被示なり。

是は南嶽を印可せらるゝ御詞也、還假修證否の詞、不審の詞ときこゆ、不可有爾、修證をかるゝあるべし、又からずと云義もあるべし、又修證不無、染汚即不得、この詞修證はあり、然而世間に思習はしたる修證にはあらず、今有と云ふ修證は、不染汚の修證なるべしと答へられたるやうに文の面は聞えたりしかば、不可心得、修證も不無も、染汚も即不得も、只各々の詞、皆同だけの詞なるべし、各々に獨立の詞なるべしと可心得なり。

南嶽印可の後さしをく事なく、又八載遍參す、是甚麼物恁麼來の詞を、八箇年遍參し、又印可の後八箇年遍參すれば、前後共に十五白也、一年を二箇度に計ふるゆへに、十五年に當り、白の字は五天竺に、一天竺を一白ともなづけ、一黄とも名くる事あり、所詮一年と云心地也、黄葉落る國あるを一黄となづく、此心地を以て、十五白と云歟、せむは只十五年也(白と云は別)

恁麼來は、佛參なり、説似一物即不中に、諸佛諸祖を開殿參見する、すなはち亦如是參なり、人畫看よりこのかた六十五百千萬億の轉身徧參す、等閑の入一叢林出一叢林を徧參とするにあらず、全眼睛の參見を徧參とす、打得徹を徧參とす、面皮厚多少を見徹する、すなはち徧參なり

【聞解】開面參見の即不中が佛祖の面目なり、故に即不中と知るは佛祖の面目に參見するなり○亦如是……佛亦如是、即不中是が徧參なり○入畫看なり……畫餅卷に翠竹紅花入畫圖、一切の法は畢竟空の畫に入れて看るなり、十界の諸法ともに、無所有の法で皆入畫みる、即不中で何とも不中、畫圖なり、一切法入畫と知つてよりこの方、見道人行道じやから六十五百千萬億の徧參見するなりと云ふは、一と度び見道置て修行すれば一切時一切處が皆修行徧參になると云ふこと、光陰空く度らぬなり○六十五百とは出法華○等閑……見道眼睛も無く彼此の叢林に出入するは粥飯僧なり、何の

△辨、殿ヲ面ニ作ル
宋吾本、すなはち亦如是參なり作如是を亦是甚麼物の
よりこのかたヲ作ス轉身徧參すヲ作身徧參見を現前せしむ
△辨、那、同文
△辨、那、のヲに、作リ、其

下割云、等閑
ハ字海ニ疎畧
之意又尋常ナ
△辨、那、ず
下割云、參學

備なし○全眼睛……全い眼の開くか不ぬかを詮議するなり○打得徹……てつしりと石地藏の頭をはつた様に手ごたへする程な目に逢ふが徧參なり、古人の語に踏著秤錘堅如鐵○今一つ云ば六祖の言れた那箇是明上座本來面目と、この面皮の厚き多少を見徹す、これが徧參のしるしなり。

【私記】とは 恁麼來と徧參と、その義ことならざるなり「佛祖はみな一物に體露するがゆるに開殿參見するといへり、亦如是徧參ならざらんや」甚麼物の入畫看とは、甚麼物恁麼來と同じ、甚麼物はみな畫圖なるなり、このゆるに、六十五百千萬億の無量無邊の諸法は、みな徧參の轉身せるなり「全眼睛の參見とは、一隻眼開明なり」打得徹は、かけさはりなきをいふ「面皮厚多少をみな面皮とするなり、いづれも徧參の廓落をあかすなり」

【御抄】 恁麼來の姿、遍參なるべし、開殿參見すと云へば、開堂見佛せむするやうに覺ゆ、諸佛諸祖を、開殿參見とも談也、此諸佛諸祖に相見の理、亦如是の道理なるべし、亦如此參とは六祖の印可の御詞に、西天諸佛諸祖亦如是の詞をとる、參は遍參の參なるべし。

此入畫の畫は佛法を指なり、所詮佛法に入りしより、このかたと云詞也、此六十五百千萬億の詞は、何事ぞとも覺たり、又數量にかはりたるとも覺ぬべし、但あながちに此數の大切にはあらず、法華經の嚴王品に、淨藏淨眼の二子、父母の邪見をあらためしとき、是は一旦翻邪見に似たれども、六十五百千萬億の雲雷音王佛のさきより、法華の值遇によりて、今如此なるなりと佛言ありし所の經文の詞を被引出也、所詮無始無終邊際なき、六十五百千萬億なるべし、入一叢林出一叢林を遍參といふべからずとは、打任ては只出叢林して所々へ尋師訪道すと、遍參をば心得なり、今の祖門所談の遍參、此義にはあらざる所を示さむ料の詞也と、可心得也。

此詞は沙門一隻の眼、則遍參なるべし、打得徹とは打とをす詞也、解脱の理也、實今の遍參の義如此なるべし、面皮厚多少を見徹すとは、面の皮のそこばくあつきを見徹と云も、解脱の理なり、此面皮厚多少則見徹の理なるべし、是則遍參の道理なり。

【辨註】 辨曰、乍入叢林の時を入畫看と云ふ、始て叢林佛祖の畫圖に入と云ふの意なり、畫餅篇云、先師道、脩竹芭蕉入畫圖、この道取は長短を超越せるもの、ともに畫圖の參學ある道取なり、又云、生死去來無上菩提畫圖なり、法界虚空いづれも畫圖にあらざるなしと、以是視之、六十五百千萬億とは妙莊嚴王品云、大王汝見此二子不、此二子已曾供養六十五百千萬億那由他恆河沙諸佛、恭敬親近於諸佛所、受持法華經、愍念邪見衆生、令住正見、是則二王子の親近轉身の徧參見なり。辨曰、是參學の眼目なり、師家の面皮多少なることをしる自も、面皮多少ぞ、俱是自己の面目を見徹するの謂なり。

【那一寶】 入畫看よりとは始て佛祖の畫圖に入と云ふ意、乍入叢林の時なり、畫餅篇云、先師道、脩竹芭蕉入畫圖、この道取は長短を超越せるもの、ともに畫圖の參學ある道取なり、又云、生死去來無上菩提畫圖なり、法界虚空いづれも畫圖にあらざるなしと、以之視之○六十五百千萬億とは、妙莊嚴王品云、大王汝見此二子不、此二子已曾供養六十五百千萬億那由他恆河沙諸佛、恭敬親近、於諸佛所、受持法華經、愍念邪見衆生、令住正見、是則二王子の親近轉身の徧參見也。

盡十方世界沙門全眼睛と參得打得徹し、盡十方世界眞實人體なる、自己の面皮面目を見徹する即徧參なり。

雪峰道の徧參の宗旨、もとり出嶺をすすむるにあらず、北往南來をすすむ

△辨、雪上而

今△那、いま
二字アリ
もとより宋晋
本作ニかなら
ずしも下皆
宋晋本異同也
故略本號ニ
無北往以下
十三字
△辨、那、リ
下割云、其意
旨ハ
△辨、那、ば
下割云、爾ガ
日用
玄上有いま
の字
△辨、那、ず
下割云、若人
識得心ニ
大地以下廿三
字作ニ偏參の
道理を通過す
るなり十二
字
△那、土下割
云、更無自己

るにあらず、玄沙道の達磨不來東土、二祖不往西天の徧參を助發するなり、たとへばなんぞ徧參にあらざらんといはんがごとし、玄沙道の達磨不來東土は來而不來の亂道にあらず、大地無寸土の道理なり、いはゆる達磨は、命脈一尖なり、たとひ東土の全土たちまちに極涌して、參侍すとも轉身にあらず、さらに語脈の翻身にあらず、不來東土なるゆゑに、東土に見面するなり、東土たとひ佛面祖面相見すとも來東土にあらず、拈得佛祖失却鼻孔なり、おほよそ土は東西にあらず、東西に土にかかはれず

【聞解】 雪峯の道ふ、何不徧參去と云ふ宗旨は、もとよりたかいかから雪峰嶺を出よとす、むるに非ず、又いたづらに南北の往來をす、むるに非ず、其のす、むる心は玄沙道取の達磨不來東土二祖…と云を助け發すなり、何不徧參去ふと云意をたとへば、何徧參にあらざらん、とてもちらへ向い唯這々從生至死徧參に非ることなし、皆な徧參じやと云ふことなり○玄沙道の達磨の世間では、來て而不來不來而來るから來が來で無い、故に不來と云ふと云ふが、それは亂道なり、祖師の境は大地無寸土にして廻避する處がないから去來の沙汰なし○たとひ東土四百州全土が至極に涌出して、達磨に隨はずとも必ず轉身して來たでない、又語脈裏に身を翻じて來るにもあらず、不來不去と云ふは語脈に表裏あるに非ず○不來の東土…不來達磨の上に東土あり、東土の上に於て相見す、本と不來の故に不去、大地無寸土の大師じやから、東土に相見したるもの○東土たとへ佛祖面に相見すとも祖が天

から來て相見するにあらず、不來不去の祖に相見するなり○拈得佛祖失却自己鼻孔、拈得する方があれば失却することがある故に、來ることあれば去ることがある故に不得不失、不來不去にして不動本處、大地無寸土の大師の面目と相見するがよし○おほよそ土に實に東西なし、機見によりて東西あるなり、故に東西の土に拘はれず。

【私記】 とは、影室いはく、此雪峰の備頭陀なんぞ不徧參の詞弟子を教訓して尋師訪道すべしと被仰にあらず、玄沙の姿、徧參なるべきか、徧參にあらざるべきか、ゆゑに出嶺をすすめず、北往南來をすすむるにあらずと云なり、とまたいはく、是は雪峯弟子の玄沙の分際、能存知せられたるうへに今の雪峯の詞に付て今の不來東土の詞を玄沙にいせむとて、被云出たるやと云なり、徧參を助發するなりとある此心地なるべし、と來而不來とは、東土にまさしく來れる祖師なれども、不來の道理なりなどといへる、いひちらしにてはなきなり、この不來東土は、まさしく徧參の道理を通過するなり、盡界徧參なるがゆゑに大地無寸土なり、命脈一尖とは、影室いはく、達磨命脈一尖とは、盡界皆達磨の皮肉と云心地なり、と極涌せる東土の全土、すなはち達磨の全體なるがゆゑに轉身にあらざるなり、語脈の翻身にもあらざるなり、轉身とは東土の身をふりかへて達磨にするなり、語脈の翻身とは、東土の語脈をひつくりかへして達磨といふなり、しかはこころうまじきなり、上下四維無等匹の達磨の一面目のみなり、參本いはく、語脈番身譬如言番欸、といひかへることなり、東土を達磨といひかへてみるなり、東土に達磨の面目をあらはすがゆゑに不來なり、たとひ東土の佛祖面に相見するとも、彼より此へ來るまではなきなり、故に來東土にあらずといふ、東土に面見するを相見といふのみ、拈得佛祖失却鼻孔は、雪竇の拈得鼻孔失却口より修し來る語勢なり、拈得失却は徧參に

【私記】 とは、影室いはく、此雪峰の備頭陀なんぞ不徧參の詞弟子を教訓して尋師訪道すべしと被仰にあらず、玄沙の姿、徧參なるべきか、徧參にあらざるべきか、ゆゑに出嶺をすすめず、北往南來をすすむるにあらずと云なり、とまたいはく、是は雪峯弟子の玄沙の分際、能存知せられたるうへに今の雪峯の詞に付て今の不來東土の詞を玄沙にいせむとて、被云出たるやと云なり、徧參を助發するなりとある此心地なるべし、と來而不來とは、東土にまさしく來れる祖師なれども、不來の道理なりなどといへる、いひちらしにてはなきなり、この不來東土は、まさしく徧參の道理を通過するなり、盡界徧參なるがゆゑに大地無寸土なり、命脈一尖とは、影室いはく、達磨命脈一尖とは、盡界皆達磨の皮肉と云心地なり、と極涌せる東土の全土、すなはち達磨の全體なるがゆゑに轉身にあらざるなり、語脈の翻身にもあらざるなり、轉身とは東土の身をふりかへて達磨にするなり、語脈の翻身とは、東土の語脈をひつくりかへして達磨といふなり、しかはこころうまじきなり、上下四維無等匹の達磨の一面目のみなり、參本いはく、語脈番身譬如言番欸、といひかへることなり、東土を達磨といひかへてみるなり、東土に達磨の面目をあらはすがゆゑに不來なり、たとひ東土の佛祖面に相見するとも、彼より此へ來るまではなきなり、故に來東土にあらずといふ、東土に面見するを相見といふのみ、拈得佛祖失却鼻孔は、雪竇の拈得鼻孔失却口より修し來る語勢なり、拈得失却は徧參に

らず、達磨も
し東土にきた
らば、佛法い
ま東土に正傳
すべからず、
不來親曾不來
なり、不往無
外不往なり、
これを動著せ
ばなにをか偏
參とせん、し
かあれば雪峰
の行履を觀著
し、玄沙の先
蹤を參究して
偏參して閑遊
なかれ、たと
へば百九十八
字、

影像のこらざるをいふ、佛祖も鼻孔も徧參し去るなり、ここをもて東西も土田も、罣礙あることなし、土の東西はことごとく、徧參の界畔となれるがゆるるにあらず、かかはれずといふものか
【御抄】 如文前には遍參の大都を被釋、こゝよりは雪峯の遍參の詞を被釋也、此雪峯の備頭陀なむぞ不遍參の詞、弟子を教訓して尋師訪道すべしと被仰にあらず、玄沙の姿、遍參なるべきか、遍參にあらざるべきがゆへに、出嶺をすゝめず、北往南來をすゝむるにあらずと云也。
是は雪峯弟子の玄沙の分際、能能存知せられたるうへに、今雪峯の詞に付て、今の不來東土等の詞を、玄沙にいはせむとて被云出たるやと云也、遍參を助發する也とある、此心地なるべし。
達磨の皮肉骨髓、盡界に彌綸して、初祖の身心にあらざる所なし、大地無寸土の理也、ゆへに來を不來なむと、打任て談ずる亂道にはあらずと云也。
達磨の命脈一尖とは、盡界皆達磨の皮肉と云心なり、又東土の全土とは西にたいしたる東土にあらず、東土の全土といはむ時は、西と云事あるべからず、盡十方界東土なるべし、是を全土と仕也●如此參侍すとも、彼より是へ來不來とは不可心得、ゆへに轉身にあらずとは云也、語脈の翻身にあらざるべし、不來東土なるべくば東土見面と云詞不被心得聞ゆ、但不來東土の道理前に聞へぬ、所詮不來東土の道理のうへに、東土に見面すと云道理もいでくるなり。
是は佛面祖面相見せば、來東土と云義不可有、一方を證すればの風情也、拈得佛祖失却鼻孔とは、是も佛祖を拈得せば、失却鼻孔の道理なるべし、只前の詞に同じき也、土は東西にあらずとは、實土と談せむときは、東西にあらざるべし、此道理の上には、東西は土にあらざる道理、又勿論也。
【辨註】 辨曰、此意旨は、達磨もし東土に來り、二祖西天に往く、往來あらずば轉身徧參にはあらざるなり。

△辨、二祖不
往西天以下二
十二字此ノ處
ニナシ
△那、リ下割
云、此下二祖
もし西天にゆ
かば一臂落了
也ト云フ十五
字有ツテ以下
ノ八十字ヲ末
ニ出ス本モア
リ
△辨、那、ば
下一臂落了也
ノ五字ナシ、
ば以下しばら
くニ至ル間

【那一寶】 假令東土の全土六種震動し、同時に來て參侍すと云も、轉身徧參眼に非ず、語脈裏の翻身に非ず、一句一偈の語脈裏に翻身する處あるを徧參と云ふ、不來東土の眼有て、二祖も達磨に相見なり、玄沙も祖師に相見なり、拈得佛祖失却鼻孔とは一方を證すれば一方はくらきなり、取箇眼、今耳必聾の意にして閑佛祖を認著すれば、自己の鼻孔を失却するなり、言は東土の外に祖師なく祖師の外に東土なし、若得失あり、往來あらずば徧參にはあらざるなり。
二祖不往西天は、西天を徧參するには、不往西天なり、二祖もし西天にゆかば、一臂落了也、しばらく二祖なにとしてか西天にゆかざる、いはゆる碧眼の眼睛裏に跳入するゆるるに、不往西天なり、もし碧眼裏に跳入せずば、必定して西天にゆくべし、抉出達磨眼睛を徧參とす、西天にゆき東天にきたる、徧參にあらず、天台南嶽にいたり、五臺上天にゆくをもて、徧參とするにあらず、四海五湖、もし透脱せざらんば、徧參にあらず、四海五湖に往來するは、四海五湖をして徧參せしめず、路頭を滑ならしむ、脚下を滑ならしむ、ゆるるに徧參を打失せしむ、おほよそ盡十方界、是箇眞實人體の參徹を徧參とするゆるるに、達磨不來東土、二祖不往西天の參究あるなり。
【問解】 二祖もし……西天に行かば佛法今日に傳はらず、なせに、來ることあればいやでも還ることあり。

ニ佛法いま東土にいたるべからず達磨もし東土にきたらば佛法いま東土に正傳すべからず不來は親曾不來なり、不往は無外不往なり
 (那、割註、三世古今不、動本處) 動著せばたにをか偏參とせん(那、割註、己上) 七十字アリ
 △辨、那、碧眼ヲ眼晴ニ作
 △辨、那、べし下割云、依門傍ノ戸踏躡辛苦スベシ
 △那、晴下割云、淨祖語
 △那、む下割云、到不得ヲ云フ

るけれども本と不來なる故に不去なり、二祖も往くことあれば必ず來ることあれども、不往故に不來なり、故に佛法今日に傳はるなり○不來親曾……曾ていつの頃から盡過去より本處不動の大師なり、又二祖も不往は無外で外の土が無いからゆくべき他界が無い、故に不往なり、これを二祖も往くと動著し、大師も來ると動著せば、何をか偏參とせん○しばらく……これから細に詮議する○碧眼裏に跳入すとは、二祖の全身が達磨大師の紺碧眼の眼睛裏に跳入するから往かぬ、大師の眼睛は盡大地一隻眼、故に不往、往くべき餘地無し○今日も其碧眼睛を智慧を以て抉り出す偏參とす○西天に往きたる人も多くあり、西天より東土に來るもあり、これ偏參とはせぬ、上天にゆくは天竺に上天竺寺、下天竺寺あり○四海五湖を透脱は盡大地眞實人體と知る、不往不來の界なり○四海五湖を偏參ならしむるは四海五湖を我物にして自由に使ひ得るなり○路頭を滑にす……只四海をうろたへ廻るは、路を滑にすべりみちするのみである、向ふの所で言へばかう、手前の能で言へば脚跟を滑にするなり、なんの役にも立たぬ、打失して偏參をうつちやると云ふものじや。

【私記】 とは 西天を偏參するがゆゑに不往西天なり」二祖もし西天にゆかば、西天は二祖の一臂ならん、斷臂の縁より一臂落了といふのみ」東西すでに初祖の碧眼睛裏に歸して不來東土なるがゆゑに二祖もこの碧眼睛裏に跳入して不往西天なり」偏參には達磨の眼睛をくりぬくなり」上天は、あるがいはく、上天竺寺乎、と、四海五湖、透脱偏參なり」徒に往來するは、直下の偏參にはあらざるがゆゑに四海五湖をして偏參せしめずといふ」往來經歷の脚足のみなるがゆゑに路頭脚下を滑ならしむといふ、偏參を打出するゆゑなり、一步也錯、兩步也錯、兩步也錯ならば也太奇ならん」十方界眞實人體のゆゑに不往不來なり」二祖もし西天にゆかば等は、二祖と西天と、兩段にあらざる、佛法と東土

△那、なり下割云、上ノ二祖もしヨリ以下ノ八十字此際ニ入ル本モアリ

と彼此にあらざる宗旨なり」この不動著を親曾無外といふ」もし彼此の往來あらば動著といひぬべし、なんぞ偏參といふべけん」不來不往を重ねたるは、不來不往をつよくみせたる語勢のみなり」參本いはく、親曾無外、猶言渾然無内外也、實亦如是偏參渾寒渾暑躑也、と」

【御抄】 前には達磨不來東土の詞をとき、こゝよりは二祖不往西天の詞を被釋、所詮今の不往西天の道理が、遍參の理なるべき也、二祖は祖師にて、此上に西天へ行くゆかすの論にあらざる、二祖の皮肉ならぬ道理なきゆへに不往ともいはる、來不來に不拘なり、又一臂了也とは、二祖與西天非各別、行と云も不行と云はむも同理也、又一臂了也と云へば、あしく成たるやうに聞ゆ、なじかば其義あるべき、祖師の一臂又不可有邊際、千手を談せしとき、手にあたる物なく、眼に見る物なかりき、今の一臂も此手眼に不可違歟。

二祖不往とは、いかなる道理にいはるゝぞと云へば、如今云、碧眼裏に跳入するゆへに不往西天と云とあれば、如前云、二祖の皮肉盡界に遍參する道理を、眼睛裏に跳入すと云也、此理の上に、不往西天とは云はるゝ也、此道理跳入せずば、必定して西天に行べしとあり、是は今の理に不及ときは、西天に行と云理も、只尋常思付たる、定に可心得と云心地也。

抉出眼睛、實に遍參なるべし、打任は西天東地へ行を遍參と思所を如此被嫌なり、如文、路頭を滑ならしめ、脚下を滑ならしむとは、十方世界を往來するを遍參と思處を遍參を打失せしむとあり、今の遍參の道理に背所を、如此打失とは被嫌也。

如文、實にも盡十方界是眞實人體の參徹を遍參とすべき道理必然なり、此道理を以て今は達磨不來東土、二祖不往西天とは云なり。

べし、爲自もかくのごとくなるべし五十

【那一寶】不動一步、徧參盡界、是則不往不來の徧參なり、來往あるは限りあり、いまだ徧參に非ず、打地俱抵の事を拈弄し玉ふは實知見あるを徧參とするの用處なり。

立沙示衆云、我與釋迦老子同參、時有僧出問、未審參見甚麼人、師云、釣

魚船上謝三郎、釋迦老子參底の頭正尾正、おのづから釋迦老子と同參なり、

立沙老漢參底の頭正尾正、おのづから立沙老漢と同參なるゆゑに、釋迦老子

と立沙老漢と同參なり、釋迦老子と立沙老漢と參足參不足を究竟するを、徧

參の道理とす、釋迦老子は、立沙老漢と、同參するゆゑに古佛なり、立沙老漢

は、釋迦老子と同參なるゆゑに兒孫なり、この道理、審細に徧參すべし、釣

魚船上謝三郎、この宗旨、あきらめ參學すべし、いはゆる釋迦老子と立沙

老漢と、同時同參の時節を徧參功夫するなり、釣魚船上謝三郎を參見する立

沙老漢ありて同參す、立沙山上禿頭漢を參見する謝三郎ありて同參す、同

參不同參みづから功夫せしめ、佗づから功夫ならしむべし、立沙老漢と釋迦

老子と、同參す徧參す、謝三郎與我參見甚麼人の道理を徧參すべし、同參す

べし、いまだ徧參の道理現在前せざれば、參自不得なり、參自不足なり、參

べし、爲自もかくのごとくなるべし五十
一字、
△辨、俱底參以下ノ十四字ナシ
△辨、那、はヲをニ作ル
△辨、那、リ下とす二字アリ
△辨、那、リ以下ニ、さら
に、拳頭せば徧參にあらざらむ爲人も如是、爲自も如是なるべし、三十字アリ
△抄、耶下割云、立沙ノ俗名ナリ△那、割云、出子禪類十一
△辨、那、釋迦上ニしかあ

佗不得なり、參佗不足なり、參人不得なり、參我不得なり、參拳頭不得なり、

參眼睛不得なり、自釣自上不得なり、未釣先上不得なり、すでに徧參究竟盡な

るには、脱落徧參なり、海枯不見底なり、人死不留心なり、海枯といふは、

全海全枯なり、しかあれども海もし枯竭しぬれば、不見底なり、不留全留、

ともに人心なり、人死のとき、心不留なり、死を拈來せるがゆゑに、心不留

なり、このゆゑに全人は心なり、全心は人なりとしりぬべし、かくのごとく

の一方の表裏を參究するなり

【聞解】立沙示衆……釋迦老子と同參とは永嘉の語に諸佛法身入吾性、吾性同與如來、合とある、この道理で同參と云ふ、如是同參した時は向ふに參見する者が無くてはかなはぬから、此の僧氣を付けて問うて來た○釣魚船上……僧俗男女の性相を離れた、屋裡の主人翁に參見したと云ふこと○釋迦は釋迦で頭正、尾正釋迦と同參第二人無し、立沙も頭正尾正まで立沙と同參無第二人、これで上無參仰下絶、己躬した境界、それゆゑに、如來性と合して一性の道理なり○釋迦立沙と二人の間に釋迦は佛で參足、立沙は末世の祖師で參不足と云ふこと無し、生佛不二なる故にこゝを知るが徧參なり○釋迦の方からいへば、立沙に同參で釋迦が立つて立沙は立たず、故に古佛なり、立沙の兒孫も我今盧舍那となるなり○立沙の方から言へば、釋迦と同參で、立沙の外に釋迦は無い、故に兒孫と云ふ、盧舍那が我今の弟子となる○釣魚……別段に上げて丁寧におほせらる、同時同參の時節とは世俗諦でいへば、釋迦は果

ハノ五字アリ
釋迦老子參底
以下九十五字
作ししかあれ
は釋迦老子參
底の頭正尾正
みづから立沙
老漢と同參
なるべし、立
沙底の頭正尾
正、したしく
釋迦老子と同
參す、釋迦老
子と、立沙老
漢と參足參不
足なき、これ
徧參の道理な
り九十八字
△辨、おのづ
からナしたし
クニ作ル
△辨、漢下の
字アリ
△辨、那、な
ハ辨、那、な
究竟するをチ
なき、これをニ
作ル
いはゆる作と

いふば、
するなり作
すべし
△辨、那、す
るなりすべ
しニ作ル
老漢ありて同
參す作ニを同
參すやいな
や
△辨、り下で
字ナシ
次下ノありて
同參す亦作
を同參すやい
なや
△辨、參下の
道理ノ三字ア
リ△那、割云
ノ道理
參す偏參す
作ニ參を偏參
しをばりて
△辨、那、同
文
同參すべし

また作し
二字
△辨、左下前
字ナシ
無參自不足
なり、參他不
足なり、參拳
頭不得なり、
參眼睛不得な
り四句
△辨、參人。以
下十二字ナシ
留心なり下
有いはゆる
四字
△辨、那、同
文
無海し三
字
人心なり下
有しかある
に五字
△辨、那、同
文
とき心不留
り下有心不

上佛、玄沙は因地祖師で、大に違ふ、唯我性同與三如來合すの時節を偏參功夫すべし○釣魚……不凡
不聖屋裡の主人釣魚……を參見する玄沙ありて、謝三郎と同參す、又上を打返へして玄沙山上の禿頭
のあたまのなめた漢を參する謝三郎有つて、玄沙と同參す、この參見同の處へ釋迦と同道し同時に參
見し同參すと意を入れて見る、謝三郎は不凡不聖男女の相を離れた性で能になる、玄沙は今日の身な
る故に相で所になる、初句は所より能に參じ、下句は能から所に參す、性相不二能所順逆一枚なり○
本文……釣魚船上謝三郎を參見する玄沙老漢ありて、謝三郎と同參す玄沙山上の禿頭漢を參見する謝
三郎ありて、玄沙老漢と同參す、同參不同參と下へうつる、この文諸本寫誤あり故に錄す○同參不同
參みづから……上に同參のこと計りあるゆゑに、不同參あることも功夫せざるなり、同參は圓融門、
不同參は行布門で能所雙べたたぬ○みづから他づからは自己ながら他己ながらと云ふこと、自己は自
己に功夫し他己は他己に功夫す、走して性相不二生佛一枚なる道理を偏參して○釋迦老子と同參し偏
參すとは、前には謝三郎と玄沙との間の性相不二の同參計を云ふから、こゝで釋迦老子と同參するこ
とを示す○謝三郎とわれと性相一枚にして甚麼人に參見したもので、この甚麼人を知らねば自己にも
他己にも參不足なり、この他と云ふは相手を取る他で無い、他是れ阿誰の他なり、他是性、自は相な
り、この性相に參不足なれば人々本具の拳頭にも參不足なり、拳頭は用、眼睛は相照也、この照用同時
に參不得なれば、自釣自上の不借他力、玉の返光の如く、返照の退歩を學することをも不知○未釣
先上は、知識の勘辨機院を受けつけぬ自己に菩提心發するなり○すでに偏參し理を究盡すれば是を脱
落し、同未悟の境界になる、其脱落の道理は○海枯不見底なり、大海の枯れても底を不見究盡が無
い、偏參を脱落してこれざりと法を持つて居らぬ○人死しても心は三世不可得、留ることならぬもの、

性相無き故に此れが脱落の道理也、こゝは宗鏡錄にある海枯縦見底人死不留心と云ふ心也○全海全
枯とは大海の全體が其儘全枯で、一滴も無い、水は本より性空なるものゆゑに○水に自性あれば方圓
の器に隨ふことはならぬ、然れども大海の枯れた時不見底、本より大海は無底なるゆゑに○不留全留
の心を不留と云ふが全留也、心は名のみで畢竟空無性の故に不留が全留也、名をはなれて水と云ふが
無い、不留全留ともに人心也、不留が全留、全留が不留なる故に○しかるに……人死するの時は心不
留、一塵も不殘死す、この時は死を拈來する故に全體死也、二つは立たぬ、死の時は死計り生の時は生
計り○ゆゑに今日人の全體心也、これは外から云はぬ、内から云つても全心は人也、人が心、心が人
で人、と心と別で無い、人に限らず盡十方が表は人、裏は心で、表裏一枚の人也、心也と知るべし。
【私記】 とは 我と釋迦老子と同參なるがゆゑに、參見は甚麼人なり、甚麼人はみな參見なるべし、
謝三郎あに別人ならんや」參底の頭正尾正は釋迦老子なり、玄沙老漢なり」足不足なきは同參の面孔
なればなり」同參するがゆゑに、古佛なり兒孫なり、向上して父祖となり、向下して兒孫となれども
同參の頭正尾正なるなり」釣魚船上謝三郎の姿、すなはち參學なり、ゆゑにこの宗旨あきらめ參學す
べしといへり」謝三郎と玄沙と、參學の同氣連枝なるをもて謝三郎を參見する玄沙あり、禿頭漢を參
見する謝三郎ありて同參すといへり」同不みな參なるを同參不同參といふ」自佗ひとしく偏參を功夫
するがゆゑに、みづから功夫せしめ、他づから功夫ならしむべしといふ」偏參の道理現前せるには、
自佗人我、擧頭眼睛、自釣自上、未釣先上、ともに偏參なるのみ、自釣未釣は、釣魚の縁より來れる
なり、なにはのこといたるまで同參なるのみ」この脱落偏參を不見底不留心といふ、海枯は、海ば
かりなり、能見の傍人なし、ゆゑに全海全枯といふ」餘物なきがゆゑに不留なり、別無眞のゆゑに全

留は人死なり、
八字、
無死を拈來
以下三十八
字、
△辨、リ下割
云、留ト不留
ト俱ニ心ナリ

留なり、年のうちに春はきにけりひととせをこそとやいはんことしとやいはん、なり」人死のとき心なるがゆるに不留なり、心不留は、唯心なり、人死はなるべし、この人死の餘剰にあらざるをきこへて死を拈來せるがゆるに心不留なりといへり、牛没馬回の曹谿鏡の琢磨するなり、人の外に心なかるべし」一方は獨露方なり、表裡をのこさず參究すべきなり」

【御抄】 此玄沙の示衆の詞、以外の自讚と聞たり、釋尊は五百塵點劫の久遠實成の佛也、玄沙は今の祖師一體と云義不可有と覺たり、然而法體の道理、釋尊與玄沙なりの隔かあらむ、迷此理ゆへに顛倒の衆生、流轉の迷身となる也、口惜事也、以此理與我釋迦老子同參也とは云也、又僧問の未審參見甚麼人の詞も、いかにと可心得を、甚麼人の詞事奮了甚麼人の上には參見の理もあるべし、不參見理又あるべし、是則即不中の理也、こゝに師釣魚船上謝三郎とあり、玄沙はつり人也、三十にして發心、雪峰の下にて得法悟道す、謝郎とは玄沙の俗名なり、それをみづから、我昔の俗名を被呼出也、是は奥の御釋に委細也●釋迦老子の參底の頭正尾正、をのづから釋迦老子と同參也、玄沙老漢參底の頭正尾正をのづから玄沙老漢と同參なるがゆへに、釋迦老子と玄沙老漢と同參也とは、釋迦は釋迦と同參し、玄沙は玄沙と同參する道理也、此謂が釋迦老子と、玄沙老漢と同參也とは云はるゝなり。

釋迦與玄沙のあはひ、參足は滿じ、參不足は不足也と不可心得、見佛の上の不見佛程の道理なるべし、釋迦與玄沙あはひも是程なるべし。

此御釋所詮、釋迦與玄沙、皮肉の所通、聊もへだてなき道理が如此いはるゝ也、釋迦に玄沙は藏身すれば古佛といはれ、玄沙に釋迦は藏身するゆへに見孫といはる、此古佛の詞と、見孫の詞と總不可違、只同詞同心なるべし。

釣魚船上謝三郎は、玄沙發心已前の名なれば、こゝには可被呼出とも不覺、但佛法にはきらひて、徒なる時節と云事、總不可談事也、ゆへに謝三郎は發心よりさきの名字とて非可棄置、此遍參の理の所及、いたらざる所なく、可嫌跡なし、玄沙の玄沙と同參する理なるべし、只釋迦與玄沙、同時同參の時節を遍參功夫する道理なるべし、又釣魚船上謝三郎を參見する、玄沙老漢ありて同參す、玄沙山上禿頭漢を參見する謝三郎有て、同參すとは如前云、詞は替とも玄沙與玄沙同參する理也、釣魚船上謝三郎と玄沙と一體なるゆへに、又玄沙山上禿頭漢を參見する謝三郎有て同參すと云も、只同前玄沙と謝三郎と一體なるゆへなり、但こゝには聊意これあるべきか、其故は玄沙は悟道已後なれば釣魚船上謝三郎はむかしの俗名なれば、法體悟道の後は、よりつくべき詞とも聞ぬ處を、今は釣魚船上謝三郎を參見する、玄沙老漢有て同參す、玄沙山上禿頭漢を參見する謝三郎ありて、同參すと云へばいたづらなる發心以前の釣魚船上謝三郎と云詞のすてられぬ遍參の理なる道理があらはるゝ也、此同參不同參の詞、如何同參なる理あり不同參なる理あるべし、釋迦與玄沙、乃至釣魚船上謝三郎と玄沙と同也、又別也、此理なるべし、是理を功夫すべしとは云なり。

是は釋迦と玄沙と、同參遍參の理事奮了謝三郎と與我と參見甚麼人と云は與我とは玄沙也、已本の詞に與我釋迦老子同參也とあり、然而釋迦と玄沙と謝三郎と與我との參見が甚麼人といはるゝなり。是は今祖門所詮の遍參の理現在前せざれば、參自と云も參他と云も、乃至人と云も、我と云も、拳頭も眼睛も、皆不得也と被嫌也、尤有謂自釣自上も、未釣先上不得も古き詞也、是等も皆不得不得と被嫌なり、遍參究盡なるには脱落遍參也とは、東西南北十方の師を、訪行を遍參と心得る方をきらはれ、一師一言半句が遍參なる方を、今の遍參究盡とは取なり、此遍參究盡なる時、脱落遍參也とはゆるす

なり。
 海枯ならば底みゆべし、今詞逆に聞ゆ、但全海全枯とあり、實全海の上には、不見底の道理なるべし、又能見の人不可有、旁不見底なるべし、人死不留心也とあり、是は打任て心得たるに、今詞は不違、但今の人死不留心の詞は、人と云は盡十方界眞實人體の人也、不留心の心は三界唯一心の心也、ゆへに人と云時は、不留心の道理現前なり、心といはむときは人の詞よりつくべからず、三界唯心の時、人の置所あるべからず、人與心相對する義、佛法には不可有、ゆへに人死不留心なり、此死又死也全機現の死なり、然者不留心なる理顯然なり、不留全留ともに人心也とは、人死不留心の不留なり、此不留と云はるるは、全留の理なり、不留全留ともに、人心を指て如此云也、此人心の道理が、不留とも全留ともいはるゝ也。

此人死の時は、實心不留なるべし、如前云死を拈來せるがゆへに心不留也とは、死の正當恁麼時は、心不留なるべき道理顯然也。

是は全人と云道理を、全心とも談ず、全心なる道理を全人とも云べし、一方の表裏を參究するとは、全人と談ずる所を全心の道理あり、乃至人死と談ずる所に不留心の理のあらはるゝ事を、一方の表裏を參究すとは云べき也、此道理は見佛の上の不見佛、道得の上の不道得も、一方の表裏を參究する道理なるべし。

【辨註】 辨曰、此意は自心與自心同參、更無自他隔別、同一心心の徧參なることを示し玉ふなり。辨曰、老僧面授篇辨註、所謂我今盧舍那作諸佛師、盧舍那我今作諸佛弟子是也、此一段の文を以て面授の玄旨を參取すべし。

辨曰、釋迦與玄沙何時什麼人に同時同參するや、是則參學の様子なり、面授篇、迦葉は拘那に嗣ぎ、拘那は拘留に嗣ぎ、拘留は毘婆に嗣ぎ、毘婆は尸棄、尸棄は毘婆尸と、沂りて最初無上の時節と今日と俱是同一時節なることをしらしめ玉ふ密意と、此章の時節を徧參工夫すべし、とあると同一意なり、釋迦嗣迦葉佛、迦葉佛嗣釋迦一時節亦復爾なり。

辨曰、是亦曾不動著の道理なり、全海即全枯、不留即全留、留與不留、枯與不枯、全無二無別、故に、枯も海の枯なり、不枯も海の不枯、留も心、不留も心、人死の時は心不留なり。

辨曰、表裡とは枯不枯、留不留の表裡なり、海枯ても底を見ざれば海なり、枯は表なり、不見底は裡なり、人死は表なり、不留心は裡なり、心を留めざれば死と云ふべからず、生と云ふべからず、道吾所謂、生也不道死也不道是也、此徧參篇有三品、是徒衆の諸記するが故に、互有不可、尙可考合乎。

【那一寶】 同參參見は自心與自心同參、更に無自他隔別、同一心心の徧參なることを示し玉ふ、是其大久遠の佛と我と同參なり、又釋迦與玄沙何時什麼人に同時同參するや、是參學の様子なり、嗣書篇、迦葉は拘那含に嗣ぎ、拘那含は拘留孫に嗣ぎ、拘留孫は毘婆浮に嗣ぎ、毘婆浮は尸棄に嗣ぎ、尸棄は毘婆尸に嗣ぐと、沂て最初無上の時節と、今日と俱是同一時節なることをしらしめ玉ふ、密意と此章の同時同參の時節を徧參功夫すべしとあると同一意なり、釋迦佛嗣迦葉佛、迦葉佛嗣釋迦佛一時節亦復爾なり。

此段不動著の道理を示し玉ふ、全海即全枯、不留即全留、留與不留、枯與不枯、全無二無別、故に枯も海の枯、不枯も海の不枯、海の外に可見底なし、留も不留も心、人死の時は心不留なり、人と

云ふは盡十方世界眞實人體の人なれば、留不留別に有に非ず、死也全機現、死の外に可_レ留心なきを云ふなり、人死不留心、語外道の死後斷滅の邪見に錯會すること勿れ。
一方の表裡を參究するとき對待の二見を破するなり、海枯れても底を見ざれば海なり、枯は表なり、不見底は裏なり、人死は表なり、不留心は裏なり、心を留めざれば死とも云ふべからず、道吾所謂生也不_レ道、死也不_レ道是也

△那、紅下割云、出_二淨祖する清涼寺
錄
ときに作_二ちなみに
△辨、那、同文
無_二諸方にし
て五字
交友以下十七字作_二いたらす請せられ

先師天童古佛、あるとき諸方の長老の道舊なる、いたりあつまりて上堂を請するに、上堂云、大道無門、諸方頂顛上跳出、虚空絶路、清涼鼻孔裏入來、恁麼相見、瞿曇種賊、臨濟禍胎、咦、大家顛倒舞春風、驚落杏華飛亂紅、而今の上堂は、先師古佛、ときに建康府の清涼寺に住持のとき、諸方の長老きたれり、これらの道舊とは、あるときは賓主とありき、あるひは鄰單なりき、諸方にしてかくのごとくの舊友なり、おほからざらめやは、あつまりて上堂を請するときなり、渾無箇話の長老は、交友ならず、請するものかすにあらず、大尊貴なるをかしづき請するなり、おほよそ先師の徧參は、諸方のきはむるところにあらず、大宋國二三百年来は、先師のごとくなる古佛あらざるなり、大道無門は、四五千條華柳巷、二三萬座管絃樓なり、しかあるを渾身跳出するに、餘外をもちあらず、頂顛上に跳出するなり、鼻孔裏に入來

無_二大宋國三
字
ご_二く下有
徧參二字
△辨、同文
大道上有_二眞箇の徧參ナリ
一句
△辨、那、同文
無_二門は下有
條條_二なり、汝問趙州_二なり十二字
△辨、大道下
無_二門二字ナシ
△那、は下四
五千以下ノ十
四字ナシ條條
彈_二なり汝問趙
州_二判註、四
門事也ノ十
字アリ、割云、
已下ノ十二字
ナ四五千條華
柳巷二三萬座
管絃樓なりノ

するなり、ともにこれ參學なり、頂顛上の跳脱いまだあらず、鼻孔裏の轉身いまだあざざるは、參學人ならず、徧參漢にあらず、徧參の宗旨、ただ玄沙に參學すべし、四祖かつて三祖に參學すること九載せし、すなはち徧參なり、南泉願禪師、そのかみ池陽に一住して、やや三十年やまをいでざる徧參なり、雲巖道吾等、在藥山四十年のあひだ、功夫參學する、これ徧參なり、二祖そのかみ嵩山に參學すること八載なり、皮肉骨髓を徧參しつくす、徧參はただ只管打坐身心脱落なり、而今の去那邊去、來遮裏來、その間隙あざざるがごとくなる渾體徧參なり、大道の渾體なり、毗盧頂上行は、無情三昧なり、決得恁麼は、毗盧行なり、跳出の徧參を參徹する、これ葫蘆の葫蘆を跳出する、葫蘆頂上を選佛道場とせることひさし、命如絲なり、葫蘆徧參葫蘆なり、一莖艸を建立するを、徧參とせるのみなり

【聞解】先師の清涼寺にての上堂なり○大道本より有門無門なき故に諸方の頂顛上を跳出で、こゝと云ふ一處の定りは無い、故に一切處が大道の通處で何れからも入られる、其の跳出の當體は○虚空の眞空で眞俗有無の入るべき路が絶へたこの絶路の處から、今日知音の方が手前清涼主人の鼻孔裏に入り來りて上堂を請ふ、恁麼上如_レ是諸方の頂顛ある知音達と、即今鼻孔裡頂顛上の相見は上で言へば

十六字ニ作ル
本モアリ、然
レドモ當本文
簡而理優長ナ
リ
眞身上有ニ大
道まさきニ五
字
入來下有ニ參
學二字
△那、同文
ともにこれ參
學以下百九十
三字作い
だ頂顛上より
跳出せざるを
ば、參學人と
いはず、徧
參漢にあらず、
いままで
も見一知識の
風流、聞一頭
話の工夫、み
なこれよりい
るなり五十八
字
△辨、脱ヲ出
ニ作ル

曇瞿の種氏より出た、この老賊、下では臨濟の四天下人をみなころす、禍の胎める中から出頭し來るなり、これは向ふの知音をおもに云ふて、手前も其の中にある○咦は機嫌よくわらう○大家……頂顛ある大家の知音が顛倒し、ころびたをれて春風のやわらかなる、よろこび舞ふて、吾れに上堂せよと法を催さる、故に吾れも不得己其春風に香の華を驚落して、亂紅を飛し上堂説する也○おほからざらめやは、反語で、おほいと云ふこと○かしづきは、崇字を書す、あがめること○四五千丈……類聚圓通仙頌趙州四門語一曰、四門開豁任來游、脚下分明到地頭、四五千丈云云、大道は無門で定れる門が無いから、一切處此門に入る路なり、春は四五千丈の柳櫻のにぎやかなる巷も、是の門に入る路、又春の風景に興して二三萬座吹き物、にきわしき處もみな大道に入る活路也○條々……すぢくがこの大道じや、故に汝一切人が皆其儘趙州なり○渾身……この大道を全身跳出するに外の物を用ゐず、手前の頂顛上より、跳出して、天童が鼻孔裏に轉身し來る、共にこれ大道通達の參學也○徧參の宗旨は、玄沙に參學し不往不來の道理を知るべし○四祖かつて……二祖そのかみと云ふ迄、皆不往不來徧參に親切なることを明す○徧參はただ……今日の人の徧參の道理は祇管ひたすらに、打坐して身心脱落するがよい○而今の去那邊上求菩提し、來這裡ては、下化衆生する、其間すさま無きが如し、これが渾體徧參、大道の全體と云ふもの也○毘盧頂上……肅宗帝問忠國師、如何は無諍三昧、國師云、踏毘盧頂上、行と云ふ意は、上に毘盧と云ふものを見れば、手前は凡夫になるから毘盧頂上を踏んで行け、走せねば佛と衆生と領分が違ふ、故に踏んで行けと示す、走すれば面前此門に物が無くなる、故に生佛無諍○すでに無諍三昧生佛無諍を得れば、毘盧頂上を行くと云ふもの也○跳出の徧參……上の頂顛より、跳出と云ふを承けて云ふ、頂顛を透出する徧參が、胡蘆のふくべがふくべをまとひ、跳出し佛祖

無海體徧參
なり六字
無情作無諍
△辨、那、同
文
決得作既得
△辨、那、同
文
△辨、道字ナ
シ
場上無道字
無一莖以下
十八字
△那、一莖
以下十八字
ナシ

の命脈が佛祖の命脈をまとひて絶へぬ○この佛佛祖祖の慧命の絶へぬ處が選佛場なりと、徧參し來る、ことひさし盡過去より盡未來まで胡蘆が胡蘆をまとひて斷絶せぬ、これ徧參見なり。正法眼藏徧參卷聞解終

【私記】とは 四方八面大道なるがゆるぎに無門なり」諸方頂顛上これおるをもて跳出と云ふ」頂顛のしかあるがごとく鼻孔もまたしかり」虚空なんぞ蹤跡あらん」跳出入來これを恁麼相見といふ」賊種禍胎は、そこなひ、うしなふをいふ、瞿曇臨濟の忘前失後なり」大家は大道なり、春風のふきまはす、これ大家の顛倒舞なり、別無真なり」杏花の片片たるなにの染汚かこれあらん」條條は、すぢめのみだれざるをいふ、一一みな大道なるなり、例せば汝問趙州のごとし、汝問これ趙州なるのみ」華柳巷、管絃樓、これ大道の無向背なり」頂顛ながら鼻孔ながら跳出し入來するゆるぎに除外をもちひざるなり、ともにこれ參學なりとは、大道を參學にうつしてあかすなり、これよりいとは、見一知識問一話頭よりして徧參に在るなり、きくやく、入得する、偃谿の水聲なり」徧參の宗旨はといふより下は本色の徧參を擧ぐるなり」いま那邊にさり這裏にきたる、すなはち渾體徧參なるがゆるぎに、間隙あらざるなり」毘盧頂上これ大道なり、なんの諍論かこれあらん」既得恁麼は毘盧行なり、毘盧住なり」跳出の徧參は、跳脱の徧參なり」葫蘆の葫蘆を跳出するとは、まじりものなき渾體徧參なり」選佛道場は、徧參道場といはんがごとし」命如絲は血脈不斷なり、葫蘆徧參といふべきのみ」この徧參の純一なるには、挿一莖草これ徧參なり、卓拄杖一下これ徧參なるのみなり」

【御抄】今の上堂の詞の大道無門とは、大道は指佛法歟、大道には門あるべし、而を佛法の大道には無門なる也、然者又出入すべき人もなし、諸方頂顛上に跳出すとは、所詮無門の上に跳出とも、入來

と云は、諸方頂頓上とは佛祖なるべし、指彼で跳出と可云也、清涼鼻孔裏とは、天童清涼寺に住持の時なりし間清涼の鼻孔とは被仰歟、今は天童の鼻孔を指て入來とも可云なり、又別物ありて出入すべき事なし、又瞿曇種賊、臨濟禍胎とは頂頓上に跳出すと云詞、或清涼鼻孔裏に入來すと云詞共が、瞿曇種賊、臨濟禍胎とは云はるゝ也、大家顛倒なむと云へば、あしく成たる詞かと聞ゆ不然也、驚落杏華飛亂紅と云詞は、雪裏梅華只一枝なむと云程の詞也。

是は詞もなき無鼻孔の長老は、談するに不及と云なり、已下如文。

四五千條花柳巷、二三萬座管絃樓とは古き詞也、是は只四五千條もあれ、只一とをりにて又物の交はらぬ心地を云なり、二三萬座管絃樓も只同心なるべし、是は今の大道無門の詞、佛法の一理、餘外の交はらず、只一とをりなる事に被引なり。

是は前段に遍參の道理、現在前せざれば、參自不得也、參自不足也と云しが如く、此頂頓上に跳脱せず鼻孔裏の轉身いまだあらざらむ參學人にあらず、遍參漢にあらずと被嫌なり。

是は玄沙の達磨不來東土二、祖不往西天の詞を被讚嘆なり。

如文、所古擧の姿を皆今は遍參と可云なり、諸方經歷して訪道するのみ、遍參と思所を破せむ料に如此被擧也、祇管打坐身心脱落とは、坐禪の事也、坐禪の姿、專遍參の至極なるべき也。

是はこゝかしこと云へば、各別なるやうにきこゆ、去來の詞も又相對の詞と覺えたり、所詮那邊の姿を指て去とは談也、遮裏の當體を來とは談也、然者日來の去來彼此には不滯なり、日來の如く心得は、いかにも彼是去來に間隔あるべし、渾體遍參とはいはるべからず、如今談するとき間隔なく、渾體遍參とはいはるゝ也。

一莖草の上に、丈六の金身を見ると云詞あり、其事を被引出也、一莖草を丈六の金身と談する、まことに遍參なるべし。

【那一寶】 傳燈五、肅宗帝問忠國師、如何は無諍三昧、國師云、檀越蹈毘盧頂上行、云云、那邊這裡の去來間隙なき渾身の徧參但報化佛頭を坐斷するのみに非ず、毘盧法身をも透過し跳出なる轉身の參徹、これ無諍三昧なり、胡蘆跳出乃至徧參胡蘆とは一點の法執法見なき佛向上の眼目、古佛光前絶後の活句なり、選佛場とせること久しとは、甚大久遠より如是なるの要旨なり、命如絲なりの五字なき本もあり、任有見時は、擬思不免喪身失命の意、文尾一莖艸を建立するを徧參とやるのみなりの十八字を加るあれども、義雲本のなきに隨ふ。

【御聽書抄】 ▲出嶺をすゝむるにあらず北往南來をすゝむるにあらず參學を云なり ▲足下無絲去といふ、此詞のある様はたとへば足の下なる程は、絲すぢ程ものこる所なし、足をあげぬれば、又足の下の義あるべからずとなり、但しこゝには此足の下と云下の詞が、盡十方界なるゆへに無絲去也、仍參徹と云也、盡界無客塵と云程なり ▲足下雲生と云は、絲すぢだにもなしといふ、是は雲生と云は雲ありと聞ゆ、相違に似たれども、雲生と云詞は、すべて無邊際道理なり、無の見解を超越するなり、大道の究竟とも、參徹ともいはるゝは、無邊際處を云也、ゆへに廻ては無絲去の詞も、雲生も一心也 ▲花開世界起といふは、此三界の起をさして云にはあらず、只一花開は世界起となり、一花開と云心はたい、世間に春ほころぶる花をばいはず解脫する所を、今花開と云ふ、一花開五葉、結果自然成の花開なるべし ▲吾常於此切と云は、なにに切也といはず、只此に切なりと云ふ、今の大道究竟これ也、この究竟何事を究といはざる程なり ▲甜蔗徹蒂甜といふ、あまさうりがいづくまでもとをりて、つる

まであまきやうに、無絲去ともこゝろへ、雲生とも心得なり▲苦瓠連根苦といふこの心同上▲甜甜微帶甜と云ふ、蔗の字をまじえずして、重點になる事は、大道究竟の心地也、何物といはずたゞ究竟と云様に、甜が甜なる也、然者微帶の詞無詮何にもつかずきこえ、但甜々と云ぬれば、甜のつるところそは心得へめ、蔗ををくときは、蔗帯と聞れども、いまはあまきがつるとなるなり、苦々連根苦と云べき也、花開世界起と云も、花開花開起とも云べき也▲玄沙山宗一大師段、雪峯深然之何不遍參去と云は、たとへばなむぞ一句を不問といはむが如也、此遍參の心地如此▲遍參と云は、今はありくとは不可心得、此寺より彼寺へうつる事は、知識をとぶらふなり、これこそ遍參ともいはめ、たゞ人人の面をかへたるを遍參とは不可云、不參微なるべし、一句を一所にてあきらめなば、諸方の遍參無益歟▲達磨不來東土二祖不往西天と云ふ、達磨をば西天の人とさだめ、二祖をば東土の人と心得る時こそ、不來ぞ、不往ぞと云詞にも迷へ、佛祖となりぬる皮肉は、西天東土とわくる事なし、超越三界法界究盡する人なり、ゆへにいつれの詞こそ、不當と不可云、たゞ達磨の一句となり、二祖の半句となる也遍參にいまこの不來不往をひかる、事は、一向不可用往來義故なり▲玄沙道の達磨不來東土は、來而不來の亂道にあらず、大地無寸土の道理也といふ、是は達磨と、二祖と無寸土となり▲番巾斗參と云は、もの入たる斗をかへす程に、日來のを見を變ずるなり▲聖諦亦不爲なり、何階級之有也といふ、佛道にはもとより、階級なき事なれば、なにかはあらむときこゆ、但只何の階級かあらむといふ詞をばうくべし、佛法に階級なければならむと云と許心得む、猶佛法にならず、きこゆ、佛法の上に、何階級之有と云詞あるべきか▲聖諦亦不爲といふ、たとへば無作無爲なむと程の詞也、聖諦何事をなすといはぬ也▲是甚麼物恁麼來は、達磨不來東土也、遍參也、南嶽八ヶ年參學をそき様に、思ふやからあ

るべし、不可然事也、八ヶ年尤頓也▲説似一物即不中は、二祖不往西天也、遍參なり、即不中は何の詞にむけても、即不中なるべし、三界唯一心も、諸法實相も即不中と心得べし、泥彈子にかぎるべからず、一物のみにあらず、即不中の不の字本意にあらず、何にもあたりたらむこそ、よかりぬべけれども、不中を佛法と云べし、教家にも説似一物は釋せられぬべけれども、今の遍參の道理に、心得合する心地不及、所詮又一句もあたらずといふことなし、諸法佛法なる時節、有迷有悟、有生有死といふ、これ遍參なり、不中の詞にて心ともとくべし、仍遍參見成也、抑八年見成也と云は、是甚麼物恁麼來と聞し、初より即不中也、佛語に本來成佛の事をとくに、生死涅槃猶如昨夢と被仰是也▲年見成に心得合すべし、八年と云は無量劫の遍參也、吾亦如是汝亦如是遍參なり▲泥彈子一著子といふ、曹谿古佛の遍參ときこゆ、達磨眼睛を泥彈子につくるなむと云詞、古くよりあり、初祖の佛法を泥彈子とも一著子とも心得べし▲末上に遍參する一著子と云事、難心得し、末と云はすえなり、上はかみとこそきこゆるときに不審なれども、向上の上、直下の下承當ともいふ、大方世間の上下の詞に難准也▲還假修證否といふ、説似一物即不中の上は、更不可有修證故に、無染汚ととく也▲入畫看といふ、入畫圖なむと云詞あり、入佛祖畫となり▲等閑の入一叢林、出一叢林にあらざといふ入一叢林、出一叢林をくだすにあらず、等閑の詞がつきたることをもて、まことの遍參とはいはぬなり、祖師先に入出の字に付て、開演佛法する事多し、然而こゝにはたゞ遍參に付てこの叢林に入り、この叢林を出と云詞に、ひかるゝときなをざりぬとはをかるゝ也▲一臂落了也といふ、二祖のひちをきりし因縁也、所詮二祖の一臂落了也の道理は、西天の往不往の義いすれもそるべからず▲路頭を滑ならしむ、脚下を滑ならしむと云ふ、是は祖道の事也、滑と云はほむる詞也▲玄沙示衆段、釣魚船上謝三郎佛と同參と云事、打任て

は佛與衆生同じとくを佛法の至極と思ふ、誠衆生輪轉の法なるを佛に同する勝たり、但佛は三祇百大劫の修行を經、仍修得の如來となづく、衆生は迷妄のものなるを佛に同する如何、又凡身は生死にうつさる佛に難同乎、又佛の生滅と云時はたゞ衆生應問の義なり、同するときは心にやくす、三界唯心是なり、佛の心衆生に同する事は理の義也、其時は事理不二なるゆへに、如此いへどもやがて、事の上に理あらはると難云、今の玄沙の詞、釋迦と玄沙と同參といふ▲未審參見甚麼人といふ、釋迦と玄沙と同參なれば、相互見むぞ、此理と覺れども、さにはあらず、釋迦は釋迦を參見し、玄沙は玄沙を參見すと心得とき、玄沙の謝三郎とをいたすなり、名二なれども、非二人この同參をよく心得て、後釋迦と玄沙と同參也と可云也、但これも同を違ぞの談にてはあるまじ、いかさまにも釋迦と玄沙とをこむじて同也とは云まじ、此未審參見甚麼人の詞をうたがひとは心得まじ、釣魚船上謝三郎を參見甚麼人とはいふなり、釋迦老子は釋迦老子と同參なり、玄沙老漢は玄沙老漢と同參也と云心地は、心佛及衆生是三無差別の心地也、心佛衆生この三を取集めて、無差別にはあらず、是も釋迦を強爲して、玄沙と云にはあらず▲參足參不足といふ、釋迦と玄沙と參足參不足とを二にをくなり、參足を釋迦につくとも、又參不足をば玄沙につく也、これが釋迦老子の頭正尾正とも、玄沙老漢の頭正尾正とも云べき道理なり▲釋迦老子は玄沙老漢と同參なるがゆへに、古佛也といふ、これ過去の諸佛は我弟子也といふ義是なり、只釋迦は古の佛なれば、古佛と云にてはなし、玄沙を兒孫にてあるゆへに古佛也、玄沙は又釋迦と同參なるゆへに兒孫也と云と可心得▲自釣自上不得といふ、釣を下すときつらるといはず、やがて自釣するなり、これを遍參の參學とす、不究盡を不得とはつかふなり▲未釣先上不得といふ、此不得は實の不得也、而疎學の會不會ぞ、得不得なむといふ事に、思わたりて、不得は

得同事也と、思事なかれ、實の不得なるべし▲いまだつらざるさきにあがると也、是は父母未生以前とつかはる、詞也、ゆへに遍參也、不究盡の時は不得也、この不得の上の字をすて、自釣自上に得の字はつくなり、いまだつらざらむさきより得ざらむば世間の詞也、いかなる人ををきて、自釣の道理を得させむとにはあらず、是は過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得の得と可心得▲海枯不見底と云ふ、此詞を世間に心得には、海枯さるときはうしほにへだてられて底不見、海枯ぬれば又いたすらなる、平沙となりて底の義なし、このゆへに底不見とも云ふ、たゞし佛法に云ときは、この法性海より外に又あるべき法なし、盡十方界皆海底也、誰人ありてか、底をみるとも不見とも云べき、又底とはいづくをさすべきぞ、表裏あるべからずと可心得、不見底の道理は、底にもかぎらず、岸も濱も不見なり、全海のゆへに、大海とく時は、不宿死屍と云が如し▲人死不留心といふ、是も子細同上、人與心各別に難置、心外にありてとむともいならずとも難云、この不留は三世不可得の得程の事也▲一方の表裏を參究すといふ、此詞首尾からあひてもきこえず、そのゆへは表裏といはい、二方になりぬべし、一方といふべくば、表裏と難置、然而今の佛法のならひ事にはかくいふべきなり、會不會ともつかひ、いま又打坐の上にも遍參也といはむが如し、一方の上に表裏あるなり▲いまだ遍參の道理、現在前せざれば、參自不得也、參自不足也、參他不得也○未釣先上不得也なむといふ、是は實に遍參の道理が現前せずば不得不足と云也、但又遍參の究盡、脱落のときも得ぞ足ぞとは不可云、不得不足の詞こそ、遍參の本意なるべければ所詮詞は同けれども、義は迷悟にわたる事今始て非可驚をや、海枯の道理も、人死心不留の道理も、全海全枯、全人全心と脱落する同事也、一方と仕ても、表裏を究參する也と云程の事也▲先師天童上堂段、杏華飛亂紅、大道無門といふ指佛道也、佛道は無

方ハ法歟

門なるなり、邊際にかゝはらざるゆへに、たとへば帝釋宮に一方四門あり、四方都合十六門也、而佛
教には四門を立るに、有門空門亦有亦空非有非空これを四門といふ、中央に佛を置て、此門より入に
いづれの門よりも中央にいたるとく、但今佛法にはこの四門を立ざるゆへに、無門ととく、此無門
は又四五千條花柳巷、二三萬座管絃樓といふ、この花柳巷、管絃樓は、別に此詞の大切なるべきいは
れなし、何といはむも是程の道理なるべし、麻三斤ととくが如し、邊際なければかくいはるゝ也▲渾
身跳出といふ○頂顛鼻孔なむと云は、天童の頂鼻なるべし、今天童を請して、今上堂するときの御詞
なるゆへに▲虚空絶路と云ふ、無門道理にて絶路なる也▲清凉鼻孔入來といふ、諸法の長老に入來す
る事を取寄て被仰歟、但絶路の詞を鼻孔裏入來と仕也▲瞿曇種賊といふ、大道無門也といふ詞をうけ
て瞿曇種賊といふ、此賊の詞難心得、但輪轉生死の方には、瞿曇種は賊ともいはれぬべし、諸方には
實相をとくとといひつべし▲臨濟禍胎といふ、臨濟の面目と云はむ程の詞なり、又諸法のためには實相
がとくといはるゝが如く、臨濟面目禍ともいひつべし▲顛倒と云は佛道よりみれば、世間顛倒し世間
よりみれば佛道も顛倒といひぬべし▲驚落飛亂の詞、是はともに解脱といはむが如し。徧參終

正法眼藏徧參

爾時寬元元年癸卯十一月二十七日在越宇禪師峰下茅菴示衆

【私記附言】編者曰、此卷も亦異本によるが故に、文の出入多し、參究するもの宜く熟思すべし。

却退一字參

△辨、衆ノ次
行ニ同癸卯臘
月二十七日書
寫之同菴侍者
寮園柴ノ十九
字アリ

六字已亥寫本
無之

正法眼藏徧參 純一無雜參 却退此遍參卷大凡有三本異 光之敬持一本 就三別中
其文其句中不昧因果也 其餘二本應永寫本與別行本 今以敬持本為主校警應永已
亥寫本譯文者也 後智阿哩野以文增多別異 莫動疑咒好
●佛祖大道則究竟參徹也 足下無絲去也 足下雲生也 雖然如是 花開世界起也
吾常於此切也 是故甜瓜徹蒂甜也 苦瓠連根苦也 甜甜徹蒂甜也 苦苦連根苦也
如是參學來也 通本布置應或如是參學 已上身心一如也 純一無雜什麼人
●玄沙山宗一大師因雪峯召師曰 備頭陀何不遍參去 師曰 達磨不來東土 二祖
不往西天 雪峯深然之 謂遍參底道理 則翻巾斗參也 聖諦亦不爲 何階級之有
也 翻斤斗參如或從經卷知識 即自知識自經卷無師自悟無自獨悟 亦不爲是聖
諦不染汚也 設使百階千級共是 不可得不染汚 堂堂行李而已
●南嶽大慧禪師初參曹谿古佛 古佛曰 是甚麼物恁麼來 遍參此泥彈子始終八年
也 末上遍參一著子白古佛言 懷讓會得當初來時和尚接懷讓是甚麼物恁麼來 因
曹谿古佛道 爾作麼生會 于時大慧言 說似一物即不中 是遍參現成也 八年現
成也 曹谿古佛問 還假修證否 大慧言 修證不無染汚即不得 即曹谿曰 吾亦
如是 汝亦如是 乃至西天諸佛諸祖亦如是 自是更八載遍參 頭正尾正算之十五
白遍參也 十五白 白夏之白 比丘僧伽法 歲周圓則一白夏 是一歲也 前
八後八因什麼十五白 前八年尾正即是後八年頭正故 爾算計也 況後八年則非必
八年 於是乎知 道得上前後八年也 故道 是遍參現成也 八年現成也 夫佛祖

徧參參註

四六七

什麼物已亥無之

通本眼之二字

經卷一時、爾時、皆如是數來矣。

● 恁麼來者而今、二字應永遍參也、說似一物即不中開殿參見諸佛諸祖、即亦如是遍參也、入畫看以來、現前六十五百萬億、七字出妙法華轉身遍參見、本現前二字及見、非等閑入一叢林出一叢林為遍參、全眼睛參見為遍參、打得徹為遍參、見徹面皮厚多少、即遍參也、而今二字應永遍參、雪峯道、遍參宗旨非必、必字應勸出嶺、非勸北往南來、助發玄沙道、達磨不來、東土二祖不往西天、遍參也、譬如言何不遍參、今通玄沙道、達磨不來東土、非來而不來亂道、通達遍參道理也、七字應大地無寸土道理也、謂達磨者命脈一尖也、設使東土、全土忽極涌而參待達磨、二字應而非轉身、更非語脈、翻身、一尖命脈盡十方方法界真實、則極涌而非轉身也、語脈翻身譬如言翻款、不爾是、以道更非、是大地無寸土達磨非達磨。

● 不來東土故東土見面也、東土不來東土、則達磨非達磨也、是其見面親稟、他何認影像者耶、而通本作面見。

● 東土直饒佛面祖面相見、而非來東土、拈得佛祖失却鼻孔也、拈得從來手裡空、祖宗鼻孔、失西東、庭前柏樹何人境、獨露一方觸處雄。

● 大凡土非東西、東西不拘土、豈非是無的位、宗耶、亦如是遍參辟歷斯。

● 二祖不往西天、遍參西天、則不往西天也、二祖若往西天、則一臂落了也、且二祖為什麼、不往西天、謂跳入碧眼之眼睛裡、故不往西天也、若不跳入碧眼裡、則必定應往西天、抉出達磨眼睛之為遍參、不來親密不往命脈也、一臂落了則二祖遍參半自

上天竺寺乎

半它、跳入碧眼睛裡時、遍參亦如是了也、所以一步也不動、兩步也不動、不動不動、蓋天遮地二祖、脚尖也、向拈得佛祖失却鼻孔之謂、斷臂得髓、為汝得吾皮髓、不來、豈非是葛藤截斷葛藤根源乎。

● 往西天來東土、則非遍參、非入將到天臺南嶽、往五臺上天而為遍參、四海五湖若不透脫、則非遍參、往來四海五湖、則不使四海五湖遍參、滑路頭、滑脚下、故打失遍參、大凡盡十方界是箇真實人體、參徹之為遍參、故有達磨不來東土、二祖不往西天、參究也、此九十九言直是不來不往、皮髓遍參也、是即師資骨肉相續圓融、合血腥臊于今有在者也。

● 二祖若往西天、則佛法今不可到東土、達磨若來東土、則佛法今不可正傳東土、不來親曾不來也、不往無外不往也、動著之什麼為遍參、此箇一段應永寫本全無有之、親曾無外、猶言渾然無內外也、實亦如是遍參、渾寒渾暑、響也。

● 遍參石頭大底大、石頭小底小也、不動著石頭、應大參小參、應永寫本無應、大底參究大底、小底參究小底、之謂遍參、應永無之、百千萬箇、參見百千萬頭、則未遍參、百千萬轉身子于半語脈裡、有為遍參、此究盡遍參也、遍參永無之、譬如打地唯打地、則遍參也、一番打地、一番打空、一番打、四方八面來、則非遍參、俱抵參天龍得一指頭、則遍

參也、俱抵唯豎一指、則遍參也、更豎拳頭、則非遍參、應為人如是、應為自如是、更豎以下十有八字、應永無之、此是一段純一無雜不染遍參也、如是慣熟佛祖一味、皮髓空淨也。

●玄沙示衆云、我與釋迦老子同參、時有僧出問、未審參見甚麼人、師云釣魚船上、謝三郎、然無之釋迦老子參底、頭正尾正、自通本作應與玄沙老漢同參、應永本同參也玄沙老漢參底、頭正尾正、親與釋迦老子同參、應永本同參也釋迦老子與玄沙老漢無參足參不足為是遍參、道理足參不足為遍參、應永本同參也釋迦老子與玄沙老漢同參故古佛也、玄沙老漢則與釋迦老子同參故兒孫也、此之道理應審細遍參、釣魚船上謝三郎、此之宗旨應明參學、謂遍參功夫釋迦老子與玄沙老漢同時同參之、應永本同參也究無之時節也、有參見釣魚船上謝三郎玄沙老漢、而同參焉、有參見玄沙山上禿頭漢謝三郎而同參焉、同參不同參應自功夫它功夫、遍參玄沙老漢與釋迦老子同參、了而遍參已下十有五字應永作玄應遍參謝三郎與我參見甚麼人道理、應同參焉、未遍參道理現在前、則參自不得、參自不足也、參它不得、參它不足也、參人不得、參我不得、參拳頭不得、參眼睛不得、自釣自上不得、未釣先上不得也、既遍參究盡、則脫落遍參、海枯不見底、人死不留心也、謂無之海枯者全海全枯也、而海若枯竭則不見底也、不留全留共人心也、人死之時、心不留也、心不留則人死也、永七字應拈來死故心不留也、是故須知全人則心也、全心則人也、應永本同參也應字無之參究如是一方表裡也、應永本同參也發無上心、卷尾、引證華嚴經賢首品言、菩薩於生死最初發心時、一向求菩提、堅固不可拔、彼一念功德深廣無邊際、如來分別說窮劫不能盡、乃至窮劫言語如來分別之不可有盡期、應海枯尚底遺人則死而心遺故、不能盡也、云云、略抄、全海全枯故波水全同全異、此之謂海枯竭究盡則不見底、非非海認海而已、是海之認

謂通至節也
三八字通本
作謂應遍
節三八
通本老漢二字
無之
應永前字無之

應永寫本二字
無之

海游泳三昧也、是即佛祖遍參海枯非思量耳、不留全留共人心也者、人之與心達彼達此共作一杓受用來向矣、故人死時心不留也、身外無餘、宗旨可甘、人死心死只在這裡而已、是以枯示拈來死故心不留也、須知遍參心只這不留為皮肉骨髓向上向下及佛向上關候子、豈非是發無上心中云、人則死而心遺耶、人之與心全留不留也、於是乎會取不會取、知得不知得、全人則心全則人、也是身心國土遍參、則道究盡一方表裡、即菩提心耳乎、固發無上心底、

●先師天童古佛、有時諸方長老道舊到集請上堂、上堂云、大道無門諸方頂額上跳出、虛空絕路清涼、鼻孔裡入來、恁麼相見、瞿曇、賊種、應永本同參也臨濟、禍胎、應永本同參也嘆、大家顛倒、舞春風、應永本同參也驚落杏花飛亂紅、而今上堂、先師古佛因、應永本同參也建康府、清涼寺、住持時、諸方長老來、與是等道舊、有時賓主、或隣單也、諸方而如是舊友也、不多哉耶、集請上堂時也、渾無箇話、長老則不交友、非請曹敷、應永本同參也請太尊貴、應永本同參也大凡先師遍參、則非諸方之所究、大宋國二三百年来、則不有如先師遍參古佛也、真箇遍參也、應永本同參也大道無門、則條條躡、汝問趙州躡也、應永本同參也四五千條花柳巷、二三萬座管絃樓也、而渾身跳出、不用餘外、跳出頂額上也、鼻孔裡入來也、俱是參學也、頂額上跳脫未有焉、鼻孔裡轉身未有焉、則不參學人、非遍參漢、應永本同參也迄今見一知識、風流、問一頭話、功夫、皆從此入、應永本同參也十有八字、遍參、宗旨、只須參學玄沙、四祖曾參學三祖、九載即遍參也、南泉、願禪師、往昔一住池陽、良三十年不出山、遍參也、雲巖、道吾等、在藥山、四十年、際功夫參學是遍參也、二祖當初、參學嵩山、八載、參盡皮肉骨髓、盡、應永本同參也參盡三字、遍

參盡焉。遍參則唯祇管打坐身心脫落也。如而今去則去那邊。而今來則來這裡。應本
作而今去那邊 不有其間隙。渾體遍參也。大道渾體也。毘盧頂上行無諍三昧也。既得
去來這裡來 恁麼則毘盧行也。參徹跳出遍參。是葫蘆跳出葫蘆。葫蘆頂上為選佛道。永無之場。尙
矣 命如絲也。葫蘆遍參葫蘆也。建立一莖草為遍參而已矣。文 信受奉行作禮而去
●正法眼藏遍參 爾時寬元元年癸卯十一月廿七日在越宇禪師峯下茅庵示衆。本通
作吉峰 同癸卯臘月廿七日書寫之同菴侍者寮 懷昇 此箇一行。
明和七年庚寅後六月二十二黃昏戌在東羽秋田仙北郡駒形莊板見內邑釋堂山靈仙
禪寺明窓下純一無雜參了矣以用回向 護法龍天善神冥助至恩云 禪師峯遍參遠
裔 本光盟焚那莫參書

遍參參註附錄

薦福雲著 云雲駛月運已都機卷羅喉鳥有參了矣而今遍參雲駛之時盡天片片月運之盡地時
昏昏應知即不中而是什麼物恁麼來雲倚山矣水歸海是即不來不往遍參現成 鳥不離空魚
泳潭 豈非是遍參公案乎固是遍參要機機要也兀兀地非思量達磨不了來東土西天五竺
無蹤迹有日市中自倒頭盡地盡方蒙味草色香味觸祖師禪二祖未曾往竺乾竺土大仙碧眼祖
既殊半臂一身吾遮天蓋地神光染三拜雪中依位愚誰及綴蓋割衣無奪朱
遍參 蓋根據善財童子入法界一大事因緣乎其文廣多焉得記志斯耶

涉典錄

第三十七徧參卷 ▲雪峰備頭陀 禪類卷十一出 ▲足下雲生 傳燈卷三 達祖章云
師不起于座懸知宗勝義 隨處告波羅提曰 宗勝不稟吾教 潛化於王 須臾即屈 汝
可速救波羅提 恭稟師旨云 願假神力 言已雲生足下 至王前默然而住 ▲抉出達
磨眼睛 天童淨祖清涼寺錄云 踞方丈抉出達磨眼睛 作泥彈子打人 高聲云 看
海枯徹過底 波浪拍天高 ▲玄沙釋迦同參 禪類卷十一出 ▲天童道舊上堂 天童淨
祖清涼寺錄出 ▲無諍三昧 金剛般若經云 世尊佛說 我得無諍三昧 人中最為第
一文長

涉典續貂

園徧參 徧參△華嚴合論中字 傳燈 玄沙章云 雪峰曰 何不徧參去 傳燈潭洲龍
會尋有遍參三昧歌○足下無絲△列仙傳云 浮丘公曰 若不脚下線斷 爾也不得自
由 一本作無私 足下無私語 本出于洞山錄○足下雲生△傳燈達磨章云 師不起
于座 知宗勝義 隨處告波羅提曰 宗勝不稟吾教 化於王 須臾屈 汝可速救 波
羅提 恭稟師旨曰願假神通 言已雲生足下 至于王前默然而住○甜瓜苦瓠△會元
無著文喜 在五臺山 充典座 文殊現粥鍋上 師便以攪粥筯打曰 文殊自文殊
文喜自文喜 文殊說偈曰 苦瓠連根苦 甜瓜徹蒂甜 修行三大劫 却被老僧嫌○
十五白△字典云 梵言一年 為一白 傳燈云 止林間已經九白 律有白夏安居之
字○入畫看△白氏文集云 流水琴中聽 山光畫裡看○六十五百萬億△妙莊嚴王

品云、此二子、已曾供養六十五千萬億、那由陀恒河沙諸佛○出嶺△雪峰錄、入閩詩云、出嶺年登三十二、入閩早已四旬餘○一臂落△乃二祖斷臂事、劉向新書云、崔舒殺莊公、申翽將入死之、門者勿內、翽曰、汝疑我乎、乃斷一臂、門者乃內、五代志、王凝妻、將宿旅舍、舍主執手引出之、妻揮斧自斷其臂○天台△一統志云、台州天台郡、在縣西一百十里山上應三台星、超然秀出○南岳△一統志衡州府云、在衡山縣西十里五岳之一也、寰宇記云、宿當翼軫度璣衡、李白詩云、衡山蒼々入紫冥、下看南極老人星、回瞻吹散五峰雪、往々飛華入洞庭○五臺△一統志云、五臺山、在太原府、五峰秀出雲表頂皆積土因謂之臺也、傳言文殊所居之地者、乃清涼山是也○上天△一統志杭州府、有上天竺、中天竺、下天竺之三寺、上天竺、在府城西十九里○路頭滑△傳燈鄧隱峰章云、馬師曰、何處去、峰曰石頭去、祖曰石頭路滑○石頭大小△已出三界唯心、巖石大小下○打地△傳燈、忻州、打地、嗣于馬祖、凡學者致問、唯以棒打地而示之、人謂之打地和尙○俱胝一指△傳燈、俱胝章云、凡有所問唯豎一指○玄沙示衆△玄沙錄、類聚載之、傳燈、會元、併不載之○謝三郎△傳燈師章云、閩人姓謝氏、祖英集云、釣魚船上謝三郎、不愛南山愛鼈鼻○天童上堂△淨祖錄、清涼寺語○大道無門△左傳襄公云、禍福無門、莊子天下云、以天爲宗、以德爲本、以道爲門○建康清涼△方輿勝覽十四、建康府云、金陵清涼寺、卽李王殿、在石頭城○瞿曇種賊△大報恩經云、提婆達多曰、瞿曇是賊○臨濟禍胎△臨濟錄云、上堂僧問、如何是劍刃上事、師曰禍事禍事、史記枚乘傳云、福生有

基、禍生有胎、杜詩云、結舌防讒柄、探腹有禍胎○四五千條△大慧廣錄、乾峰一路頌云、捲捨雲門一柄扇、拗折乾峰一條杖、二三千處管絃樓、四五百條華柳巷○四祖參三祖△傳燈、三祖章云、道信、於言下大悟、乃勞服九歲○南泉池陽△傳燈九南泉章云、貞元十一年、憩錫於池陽、自構禪齋、不下南泉卅餘年○無諍三昧△字見金剛經○選佛場△傳燈、丹霞章云、初習儒學、將入長安應舉、一禪者問曰、仁者何徂、曰選官去、禪者曰、選官何如選佛、曰選佛當往何處、禪者曰、今江西馬大師出世也、是乃選佛場○命如絲△傳燈、五祖章云、受衣之人命如懸絲○義雲師著語云、雲駛、月運○又頌云、雲倚山矣水歸海、鳥不離空魚泳潭、達磨不了來東土、二祖未曾往竺乾、徧參畢

正法眼藏徧參註解畢

正法眼藏眼睛

眼睛

【義雲頌著】 第四十四眼睛 人人有光明在。

通身一隻眼睛裡、坐臥經行非外方、往日洞山就師乞、獨體遍野發靈光。

【面山述贊】 第四十四眼睛 述云、經說、五眼千手眼、正法眼頂門眼等、其照見諸

法皆空之般若光明也、亦名衲子眼睛、贊言、佛眼本性空、照徹超西東、無始亦無

終、非通也非窮、魔醜何可比、帝釋似不同、具之禪和子、可續少林宗。

【開解】 正法眼藏眼睛卷開解 眼睛は般若の光明のこと、五眼千手眼、三目等と種々あるも畢竟は五蘊皆空と照し見る、觀照般若を眼睛とするなり。

【那一寶】 眼睛 那一寶曰、此眼睛開頂門上麼、滅瞎驢邊麼、縱有八萬四千眼、可換却驢糞來、法華明八百眼功德、又楞嚴觀音有八萬四千寶目等、非此篇取意、加旃維觀音篇通遍身、又不在也。

億千萬劫の參學を拈來して團圓せしむるは、八萬四千の眼睛なり

【開解】 億千萬劫……辨道の修行は衆生無邊誓願度の故に、聲聞等の如く修行に際限を立てぬ、故に億千萬と云ふ、無量劫の修行力で拈來して、團圓と、まろらかに圓滿成就せしむるは、八萬四千の眼

睛なりとは、八萬四千の煩惱を、八萬四千の眼睛となして用ゐるなり。

【私記】 とは、億千萬、八萬四千これ數量にあらず、眼睛なり」

【御抄】 億千萬劫の參學を拈來して、團圓せしむとは、此億千萬參學の力によりて、此八萬四千の眼睛の理をうるやうに心得ぬべし、然者因果にもかゝはり、眼睛外に億千萬劫の時節あるにいたり、不可然、只今の億千萬劫を則眼睛と談也、八萬四千を眼睛と談也、數量に付て、非可心得、億千萬劫の參學を眼睛と談するべし、眼睛を億千萬劫と談するなり、八萬四千と眼睛とのあはひも、又如此なるべし。

【辨註】 辨曰、楞嚴法華明八百眼功德、又楞嚴觀音有八萬四千寶目、等非此篇取意、加旃雖觀音篇通身遍身、又不必要在也、下の公案等を以て辨究せよ、今于茲八萬四千の眼睛なりとは、心上一無明の轉變八萬四千の煩惱と、波羅蜜と、一合不可得、業識忙々無本可據眼睛なり、是以億千萬劫の本行道の參學を拈來して團圓ならしむるは、八萬四千の煩惱眼睛、即是祖門宗乘の正法眼なり、故下天童古佛公案を引玉ふ。

【那一寶】 今于茲八萬四千眼睛なりとは、心上一無明の轉變、八萬四千の煩惱と波羅蜜と一合相不可得、業識忙々無本可據眼睛なり、是以億千萬劫の本行道の參學を拈來して、團圓ならしむるは、八萬四千の煩惱眼睛、即是祖門宗乘の正法眼なり、故下引天童示衆一弄し玉ふ。

先師天童古佛、住瑞巖時、上堂示衆云、秋風清秋月明、大地山河露眼睛、瑞巖點睛重相見、棒喝交馳驗衲僧、いま衲僧を驗すといふは、古佛なりやと

△辨、那、は下割云、參學

人是本成ノ
△辨、那、そ
の下の割云、驗
スル
△辨、の下の割
云、異本作
を字
△辨、河下割
云、大地二字
ナシ割云、異
本有大地二
字
△辨、那、海
下、割云、水
△辨、那、悟
下割云、底
△辨、那、リ
下割云、相見
什麼人、眼
△辨、眼、頭
眼睛ニ作ル
△辨、リ下割
云、尖銳也異
目超宗ノ伶俐
云、△那、割
云、尖銳也
△辨、なり下

驗するなり、その要機は、棒喝の交馳せしむるなり、これを點睛とす、恁麼の見成活計は、眼睛なり、山河大地、これ眼睛露の朕兆不打なり、秋風清なり、一老なり、風秋明なり、一不老なり、秋風清なる、四大海も比すべきにあらず、秋月明なる、千日月よりもあきらかなり、清明は眼睛なる山河大地なり、衲僧は佛祖なり、大悟をえらばず、不悟をえらばず、朕兆前後をえらばず、眼睛なるは佛祖なり、驗は眼睛露なり、睛現成なり、活眼睛なり、相見は相逢なり、相逢相見は、眼頭尖なり、眼睛霹靂なり、おほよそ渾身はおほきに、渾眼はちひさかるべしと、おもふことなかれ、往往に老老大大なりとおもふも、渾身大なり、渾眼小なりと解會せり、これ未具眼睛のゆるなり

【開解】 秋風の清、秋月の明も山河大地都て、衲僧の眼睛にあらず、其秋風秋月を見る、大地山河にあらはれたる眼睛を重ねて點睛し、ぶちつぶして、諸法の差別を見ぬ、眼を睛して重ねて相見す、この時は、向ふに相手を見ぬ眞箇の相見なり、この眼を得てより或は一棒を行じ或は一喝を下して衲僧の正邪を辨す○古佛なりやと驗する今日の衲僧は盡大久遠成佛の古佛なりやとこゝろむなり、點睛の眼睛、故に生佛迷悟を見ぬ、驗する肝要機要の働は、棒喝……よし○恁麼點睛の現成する時が、衲僧の眼睛のあらはるゝ時なり○山河大地はやはり眼睛の露れたじや、故に朕兆不打なり山河が其眼睛で向ふに相手を見ず眼より外に境が無いから、非すべきものが無い、義雲録にある開乾坤眼、無當眼境と

割云、霹靂ハ雷ノ急疾ナル者ナリ岩下ノ電ノ眼ト云ニ似タリ
△辨、ふなり下割云、上來ノ人ハ山河大地ノ眼睛露ヲ不知ナリ

云ふ處○秋風清なり……秋風の清きを今時から見れば一老なり、秋月の明なるを久遠より見れば一老なり、これどちらとも片落ちしていればぬ、唯見てによりて老不老あるのみ、今時より見れば一老なり、久遠より見れば一不老、然も偏正とも三方斗りは取られぬ、秋風の清には四大海水の清も及はぬ、下句同意○清明……秋風の清秋月の明も眼睛なる山河なり、眼睛より外に一切諸法なし、故に全眼睛の山河なり、大地なり秋風なり秋月なり○衲僧は佛祖なり佛界にも衆生界にも窮盡無き、故に今日の人々は證上の修なりで、境界みな佛祖じや、故に大悟不悟をえらばず全眼睛あるはみな佛祖なり○驗と云ふは畢竟空般若の眼睛のあらはる時なり○一切の諸見を泯じた瞎の眼睛の現成なり、之を活眼睛と云ふ、一切の差別を見るは活眼では無ひ○相見は……衆生諸佛中よく相逢、其處は全眼頭より光を放つて般若の光明が現じ十界の衆生同時に結眉相見す、又諸法空と照見する般若の眼睛が霹靂しきらくとかやく○渾身の身は大に眼は小と思ふな○往々ゆくさきくで老々とした、かなるものも大小の見解をなす、それは點瞎眼睛を未具也。

【私記】とは、點瞎相見眼睛なるゆゑに、棒喝交馳なり、驗衲僧は驗眼睛なり「ゆゑに古佛なりやと驗するなりといへり、棒喝の交馳するこれ要機なり」自他彼此の別なきをもてこれを點瞎とすといへり「不打は參本はいはく、不打猶言未分」と「影室はいはく、不打もあとなき心なり」と「老不老みな眼睛なるがゆゑに一一といふ」眼睛突出なるをもて四大海も比すべからず、千日月よりもあきらかなり「清明山河大地は眼睛なり」佛祖は眼睛なり「大悟不悟は眼睛なり、ゆゑにえらばずといふ」瞎活みな眼睛なり「相見相逢眼睛なり」頭尖は、つけそへなきをいふ「眼睛のかくれざるをもて霹靂といふ、渾身はおほきにといふより下、ちなみに身眼に大小をみる僻見を斥くるなり」

【御抄】秋風清秋月明、大地山河を以て、眼睛と談也、瑞巖とは天童の住處也(山寺)點瞎とは眼一也、片目ををさへたる眼也、只眼一なるべし、凡夫の物をすぐによく見とては、片目をふさぎて見之、點瞎の詞、眼睛の脱落なる姿も、彌あらはれぬべし、棒喝交馳驗衲僧とは法を示すに、棒をあて、喝して法器の有無をしらむとて、如此すると思たり、是は非爾此棒喝衲僧等、皆只同たけなるべし、是則眼睛の道理なり、いま衲僧を驗すと云は、古佛也やと驗するなりとあり、非可不審、古佛也やと云へる、猶不審したる詞かと聞ゆ、只古佛也と云也、棒喝の交馳せしむとは、此棒喝の眼睛なる、道理が如此いはるゝ也。

朕兆不打也とは、久き詞と聞ゆ、今の眼睛の姿、昔今の蹤跡を談すべきにあらず、無始無終なり、是則眼睛なるべし、久近始終を非可談なり、秋風清一老、秋月明一不老とあり、一老一不老と云へば、老の詞に付て、子細ありやと覺ゆ、無殊子細、老の上に不老の義如例、又以秋風老とし、秋月を以て不老と談也、秋風清なる姿、實四大海も比すべきにあらず、秋月明なる姿、千の日月よりも明かなるなり、清明は眼睛也とは、秋風清の清、秋月明の明を呼合て、如此清明とは云也、所詮秋風清、秋月明共眼睛也と云なり、山河大地同かるべし、衲僧と云へば、只尋常の雲水なむとを不可云、佛祖といはるゝ程の衲僧なるべし、此佛祖の上には、大悟不悟を朕兆前悟をえらばず、眼睛なるを佛祖とすべしと云心なり、驗と云詞は眼睛露也とあり、瞎現成也とあるは、眼睛の現成也とあり、活眼睛なりとあるは、只いづくまでも、眼睛ならぬ所なき也、驗と云詞をば、其しるしをみする方便序分なむと心得を此驗が眼睛露にてあり、瞎現成活眼睛なる也と云也、又相見と云事は、二人逢して云詞なり、是は相見せば眼與眼相見なるべき所を相逢相見は眼頭尖なりとは云也、眼睛の道理のかくれず、法界を

盡す理を又眼睛霹靂とは云也。

いかにも身は大に、眼はちろさしと思是舊見なり、凡見なり、盡十方界沙門全身、盡十方界沙門一隻眼にて、可心得事也。

如文、往々老々のゆゑしき長老等も、渾身大渾眼小と解會せり、是は此眼睛の道理をしらざる也と被嫌也。

【辨註】 辨曰、八萬四千の眼睛、瞎驢邊に滅却の眼睛とも云ふ。

辨曰、不打はなさすと云ふ義、朕兆は吉凶形兆謂之兆朕、又幾微萌兆謂之朕、一切幾事のわづかにさざしあらはるる處を云ふ、此眼睛露の處、然も朕兆不打にして蹤由なしとなり。

辨曰、山河大地是眼睛露なる故に秋風清なる、是一老功勳邊、眼睛なり、秋月明なる、是一不老正位中、眼睛露なり、一切處一切時、佛祖の眼睛露ならずと云ふことなし、秋風清なり、秋月明なりの二つの字共なるの字にして見よ、次下の文可併見、一老一不老語、洞山無心合道頌曰、道無心合人、人無心合道、欲識箇中意、一老一不老と、傳燈二十九に出たり、老功勳不老正位、白雲兒青山父也、然洞上功位修證を教乗の苦修練行、漸次階級の如く覺へたるは今時不具眼底の見解なり、不見曹山大師所云、不爲明功進修之位、兼涉教句、直是格外玄談、要絶妙旨、祇明從上物體現前、冥叶古聖之道、以此視之、當人一念上功位、問不容問、轉位回機なるぞ、故今古佛山河大地の眼睛露に用ひ玉ふのみ、蓋此篇首所謂億千萬劫の參學を拈じて、團圓せしむるは八萬四千の眼睛なりとある、此之也、然亦佛法祖法の血筋のある目にはあらず、故天童古佛是を點睛眼と示玉ふ、著精彩參究せよ。

【那一寶】 點睛すとは八萬四千の眼睛、瞎驢邊に滅却の眼睛とも云ふ、朕兆は吉凶形兆謂之兆朕、又幾微萌兆謂之朕、一切幾事のわづかにさざしあらはるる處を云ふ、不打はなさすと云義、此眼睛露の處、然も朕兆不打にして蹤由なしとなり。

大地山河是眼睛露の故に、秋風清なる是一老功勳邊の眼睛なり、秋月明なる是一不老、正位中の眼睛露なり、一切處一切時、佛祖の眼睛露ならぬと云ふことなし、一老一不老前に出す、老功勳不老正位也、白雲兒青山父、是也、然洞上功位修證を教乗の苦修練行、漸次階級の如くに不可見、不見曹山大師云、不爲明功進修之位、兼涉教句、直是格外玄談、要絶妙旨、祇明從上物體現前、冥叶古聖之道、以此視之、當人一念上功位、問不容問、轉位回機なるぞ、今山河大地の眼睛露に用玉ふのみ、篇首所謂億千萬劫の乃至八萬四千の眼睛なりとあるも、此之也、佛法祖法の血筋のある目にはあらず、故に點睛眼ともあるなり。

盡十方界沙門、一隻眼なる故に、山河大地も衲僧も佛祖も大悟不悟をえらばず、併眼睛なるは佛祖なり、驗は眼睛露なり、これ瞎眼睛の活眼睛なり、相逢相見はたとひ兩人相對すとも、眼睛逢眼睛なり、一隻眼尖の盡界に霹靂光耀するなり、是故に渾身も法界を盡し、渾眼も法界を盡すなり、豈大小

△辨、那、之、下割云、出

洞山悟本大師、在雲巖會時、遇雲巖作鞋次、師白雲巖曰、就和尙乞眼睛、雲巖云、汝底與阿誰去也、師曰、某甲無、雲巖云、有、汝向什麼處著、師無語、雲巖云、乞眼睛、底是眼睛否、師曰、非眼睛、雲巖咄之、しかあればす

子傳打卷十
四一
△那、影下割
云、不曾藏。
△辨、那、の
下乞字アリ
△辨、那、り
下割云、然モ
△那、す下割
云、全クヤリ
トリナシ

なはち全彰の參學は、乞眼睛なり、雲堂に辨道し、法堂に上參し、寢堂に入
室する、乞眼睛なり、おほよそ隨衆參去、隨衆參來、おのれづからの眼睛なり、
眼睛は自己にあらず、佗己にあらざる道理あきらかなり、いはく洞山すでに
就師乞眼睛の請益あり、はかりしりぬ自己ならんば、人に乞請せらるべから
ず、佗己ならんば人に乞請すべからず。

【聞解】 全彰は初發心より、成正覺までの修行力の全く彰は、參學はみな般若光明智見の眼睛を乞ひ
求むるのじや、其求むる間は己下文相見やすし○おのれづからの乞眼睛とは、上如是するは、みな法
爾如然、般若の知見眼睛を求むる修行なり○眼睛この知見、眼睛と云ふものが、初めから自己に具つ
てあるでなし、又他己にあらざる道理は洞山の公案で知れる○はかりしりぬ……自己にあらず手前に
無きは、人に就ても乞ひ求められぬ○又他己ならぬは吾も人に、もらはれず、人も吾れに、もらはれ
ず、かうした眼睛のこと、自己他己にあらず、走してどこにある、汝が遣り取り無い物のこと。

【私記】 とは 影室いはく、全彰とは、かくれずあらはれたる理を名なり、と」日用の作爲をさして
全彰の參學といへるなり、ゆゑに下に全彰の參學をあげて、雲堂に辨道し、法堂に上參し、寢堂に入
室するといふ」おほよそ參去參來は、上の全彰の參學を結するなり、これらみな眼睛なり」就師乞、
これ眼睛なり」自己佗己ともに一雙眼なるがゆゑに人にもらはれもせず、人にもらひもせぬなり、受
與にあらざるは眼睛の獨立しるべし」

【御抄】 洞山は雲巖の弟子也、無何雲水の問答に不可准、今の洞山の詞に就和尙乞眼睛の詞、いかな
るべきぞ、乞眼ばら門なむどの様にあるべからず、所詮今の詞は就和尙乞正法眼藏とも云程の詞な
り、其等雲巖の詞に、汝底與阿誰也とあり、是も汝と指は、洞山事歟、雲巖と洞山との汝吾是、又自
他にかゝはるにあらず、今更事あたらしく云べきにあらず、阿誰の詞も又非不審、誰にもあたふる理
あるべし、誰にもあたへざる理あるべし、師曰某甲無、雲巖曰、有汝向什麼處著とあり、此師資の無
有詞は、世間の有無にあらず、佛性の上の有無程に可心得、雲巖の汝向什麼處著の詞は、所詮今は眼
睛なるべし、眼睛を指て汝向什麼處とは可心得、師無語、此無語又非惘然、眼睛特立の無語なるべ
し、雲巖云乞眼睛底是眼睛否云云、實にも眼睛の外に物なし、乞眼睛底是眼睛なるべし、非可不審、師
曰非眼睛、是又是非の非にあらず、非定相佛程の非なるべし、眼睛の上の非なり、雲巖咄之云々ゆる
したる心地なり、所詮全彰の參學を乞眼とは談也、全彰とはかくれずあらはれたる理を名也、今の眼
睛此道理なるべし、雲堂の辨道、法堂に上參し、入室し、乃至隨衆參來の姿を、今は皆乞眼睛と談な
り。

如文、眼睛の理、自他に不可拘之條勿論也。
如文、自己ならむときは、自己の外に又人あるべからねば、人に乞請せらるまじき道理顯然也、他己
ならむときは、又他己の外に交はる物なければ、又人に乞請せらるまじき理必然也、是則自他にかゝ
はらぬ、道理なるべし。

【辨註】 辨曰、自己ならんは他ならんはとある、自己ならぬは他己ならぬはとありて好し、言は自己
にあらぬものなれば他人のために乞請せらるべからず、他己にあらぬものなれば我も亦他人に乞請す
べからずと云ふの義なり、故に前に己に自己にあらず、他己にあらざる道理あきらかなりとの玉ふ

是なり、更にやりとりなきことなり。

△辨、那、與、
下阿字アリ

汝底與誰去也と指示す、汝底の時節あり、與誰の處分あり

【開解】 汝底……他に就いて乞請すれば汝が眼睛、誰にやつたとしかられる、これでよく知れた、この眼睛は此方から言へば汝底に時節あり、向ふをいへば、與誰去る、處分もある、これ汝亦如是眼睛、吾亦如是眼睛なる時節あるなり。

【私記】 とは 乞と與と、ともに眼睛なり「汝も誰も眼睛なり」處分は道理なり

【御抄】 如前云、この汝底與誰去也の詞、人を置いて誰にかと非不審、汝底の法界を盡す時節あるべし、與誰の法界を盡す理ある所を、處分とは云なり、誰にも與と云理あるべし、あたへずと云理あるべし、即不中の理是也誰にもと云へばとて、人を置いて彼を指て云にはあらず、汝底與誰といはるは、眼睛なるべし。

【辨註】 辨曰、汝底の時節とは何の時節を、汝人々眼睛開這箇の時節なり、其汝底の時節ある眼睛は與誰ぞと云ふの處分あり、處分は統紀四十一註、分音問處置得處、意は汝が眼睛の置處は誰に與へ置たるぞとなり。

【那一寶】 この眼睛は自他の際限あらず、汝底人々這箇の時節あり、是眼睛なり、與誰の處分あり、是眼睛なり○處分統紀四十一註分音問處置得處。

某甲無、これ眼睛の自道取なり、かくのごとくの道現成、しづかに究理參學すべし

△那、道下割
云、取

【開解】 某甲無と洞山のいはれたは、やはり眼睛般若の光明の自ら道取するなり、般若の知見で無ければ無しとはいはれぬ、如是無しと云ふ道取には、大に道理あり究理して看よ、能く理を究めて見れば、有無を離れたものなり。

【私記】 とは 某甲無は眼睛なり、ゆゑにこれ眼睛の自道取なりといへり「かくのごとくの道現成とは、有なれば有法界、無なれば無法界、觸處生涯をいふ、參本いはく、道現成道、是道得道」と

【御抄】 又某甲無の無にあらず、眼睛無なるゆへに、眼睛の自道取也とは云ふなり。

【辨註】 辨曰、機鋒に誇るの鬼眼睛にはあらず、瞎眼睛の自己の道取なり。

【那一寶】 某甲無、某甲は眼睛なり、故に無とはこれ瞎眼睛の自道取なり、機鋒に誇るの鬼眼睛にはあらず。

雲巖いはく、有向什麼處著、この道眼睛は、某甲無の無は、有向什麼處著なり、向什麼處著は、有なり、その恁麼道なりと參究すべし

【開解】 たとひ有とも……有とも向什麼處著けん、雲巖の此の道取は洞山の無と云ふ無はありとも何處にか著けん、本と眼睛は有無するもので無いから洞山の無しといふ道理は有れども、其無と云ふ道理の置處とす、本とが有無するもので無い故に○向什麼處著は有なり……この詞見難し、雲巖の設有向什麼處著けん、と云ふは有なり、其の有も向什麼處著けん、と云ふ意で、有と云ふ道理もつけぬ、有無ともに掃ふ○その恁麼道とは、如是、是有無ともに不著なる道取を究むべし。

【私記】 とは 有無一隻眼なるをもて、設有向什麼處著なり、什麼處は眼睛なるがゆゑに、つけられ

△辨、く下設
アリ那、割云、
設
△辨、那、有
下汝字アリ
△辨、の無は
三字ナシ
△那、は下割
云、マトヒ

るなり」いへば、かたれば眼睛なるがゆゑは、この道眼睛といへり」某甲無の無は、眼睛なれば、有また眼睛なるがゆゑに、有向什麼處著なりといへり」向什麼處著の語は、眼睛と見るべし、有は眼睛なり、眼睛は有なりといふべきを有向什麼著なり、向什麼處著は有なりと、布置せられしなり」その恁麼道なりとは、上のかくのごとく道現成と、同意なり」

【御抄】 雲巖道の有の詞如前云、眼睛有也、向什麼處著の詞是眼睛なり、いづくを指て、向什麼處と云にあらず、眼睛の道理が、什麼處とは云はるゝなり、眼睛を道眼睛とあり、道がやがて眼睛なるなり、又某甲無の無は有向什麼處著也とは、某甲無の詞は有向什麼處程の詞也、此有無聊も不可有差別となり、佛性の上の有無程あるべし、雲巖の有と被仰に、向什麼處著は有也とあれば、いづくまでも、有の道理也と可心得。

【辨註】 辨曰、此段似有寫誤脱簡、義理不穩、且辨之曰、雲巖云設有汝向什麼處著の道取は、某甲無と云ふ、若有則向什麼處著となり、恁麼の道取は、もし向什麼處なりとも措置する所在あらば有るなり、無と云べからず、若所在あらば正法眼にあらぬと云ふ、其恁麼の道取なりと參究すべし。

【那一寶】 此の道眼睛とは雲巖の道取力即眼睛なるなり、向什麼處著は有なりとは、雲巖の設有汝向什麼處著とは有の眼睛の道取なり、故に次に其恁麼道なりとは眼睛有の道取現成と參究すべしとなり、然れば此章は洞山は無と道取し、雲巖は有を道取す、これ師資表裡、回互眼睛の道取なり。

洞山無語、これ茫然にあらず、業識獨豎の標的なり

【聞解】 茫然……茫然目は目不了也、不明貌、今底意は洞山の無語せられたは茫然と、くらいことで無

福本、れ下有は、
△辨、れ下割
云、不了

△辨、に下は
字アリ、△那、
割云、ハ

い、業識獨豎で無語するは獨立の目あると云ふもの、眼睛の時は眼一つ立つ、業識の時は業識獨り立つ、物が二つ并ばぬ、然れば眼睛と云ふも獨立の眼睛、業識と云ふ時は業識の獨立、この句意、業識の文相に泥んでは洞山の手前へ指しつかへる、故に獨豎の義理を重く取るべし○或説に有る時は洞山は頭長三尺頸短二寸と言はれた、業識茫茫無二本可據と云ふことがある、これら活眼睛と云ふなりとあるこれでも明白なりがたし。

【私記】 とは 無語これ眼睛なるをもて茫然にあらざるなり、まつくらがりのまなこ、かるがゆゑに業識獨豎の標的なりといふ、盡十方界沙門一隻眼なり」

【御抄】 如文、標的とは、あらはるゝ心地なり。

【辨註】 辨曰、三十七品篇、思惟神足の下に云ふ、一切佛祖業識茫茫無二本可據なりとあるを以て見よ、洞山所謂頭三尺頸二寸、此業識獨豎底のことなり。

【那一寶】 三十七品篇思惟神足下云、一切佛祖業識、茫茫無二本可據なりとあるを以て見よ、洞山所謂頭長三尺、頸短二寸、此業識獨豎底のことなり。

雲巖爲示するにいはいはく、乞眼睛底是眼睛否、これ點睛眼睛の節目なり、活碎眼睛なり。

【聞解】 點睛……諸見を混する眼睛を示す、節目ありさまなり○それゆゑに活眼睛を碎き物を見せぬ、永嘉の云ふ唯須息見と、この義なり。

【私記】 とは 乞眼睛なれば、是眼睛なり」このゆゑに點睛眼睛なり、活碎眼睛なり」節目は、分別

△辨、那、こ
れ下割云、先
師古佛所謂
△辨、り下割
云、活ノ字ノ
上ニ碎字アリ
テ好シ點睛ノ
義ナリ△那、

割云、活碎ハ
點睛ノ義ナリ

△辨、道下割
云、取
△那、リ下割
云、同而不
同異而不異
同中異異中同
同中異辨眼也

といはんがごとし」活碎は、眼のびかびかするをいふ、碎、月光の碎のごとし」

【御抄】 如文、此雲巖爲示の詞、まことに點睛眼睛也、活碎眼睛也。
いはゆる雲巖道の宗旨は、眼睛乞眼睛なり、水引水なり、山連山なり、異類
中行なり、同類中生なり。

【聞解】 いはゆる雲巖の道取は眼乞眼で能見所見二つ分れぬ遣り取り無い眼睛なり、そこをいはば
水引水山連山で二つ物無い眼中の眼なり、これを異類中行と云ふ、この異類は常途の見様とは不同
なり、類に異なりと云ふ義にとる、一切に類せず似たもの、無い處へ行く、この時は一切諸法にみな
眼一つで外に類する見るべきものが無い○同類中は一切諸法が皆眼睛で同類なり、外に異なる者なし
同にして同に非ず、同中異辨の眼睛なり。

【私記】 とは 眼睛の彼此絶なるがゆゑに眼睛乞眼睛なり「山水みなこれなれば、連引といふ」同異
の親切なれば、中行なり」

【御抄】 眼睛乞眼睛の詞は、眼睛の外に交物なき道理也、水引水山連山異類中行、同類中生の詞は、
又餘物交はらぬ證據に被引出也、

【辨註】 辨曰、同而不異、異而不異、同中異、異中同、同中異辨眼也。

洞山いはく、非眼睛、これ眼睛の自舉唱なり、非眼睛の身心慮知形段あらん
ところをば、自舉の活眼睛なりと相見すべきなり

【聞解】 洞山の非眼と道取せられたは般若の眼睛の光明の自ら舉唱するなり、雪竇の龍牙山裏龍無

△辨、晴下割
云、晴字行也
△辨、那、リ
下割云、前ニ
是眼睛ノ自道

取ナリト云ニ
一般ナリ
△辨、眼睛下
割云、此晴字
亦行也

眼と云ふもこのこと○非眼の身心……外の身、心内の慮知の形段もすべて非眼なれば、身心も身心
で無く、慮知も慮知で無い、こゝが活眼睛なり、一たび非眼脱落した身心なれば、眞箇の活眼で無
い、これに相見するがよい。

【私記】 とは 是眼睛なるがゆゑに非眼睛なり、ゆゑに眼睛の自舉唱なりといへり」身心慮知形段は
眼睛なるをもて自舉の活眼睛なりと相見すべしといふ、影室いはく、非眼睛の身心とは、眼睛の上の
身心慮知形段なるべし、と」

【御抄】 この非眼睛の非の詞、又是非の非にあらず、眼睛の上の非也、ゆへに眼睛の自舉唱也といは
るゝ也、非眼睛の身心とは、眼睛の上の身心、慮知形段なるべし、この道理のあらむ處は、まことに
自舉の活眼睛也と相見すべき理必然なるべし、

【辨註】 辨曰、日用光中身心の慮知形段ある處棄嫌せず、自舉底の活眼睛なりと相見せよ、一切處眼
睛にあらざるなしとなり。

【那一寶】 日用光中身心の慮知形段ある處棄嫌せず、自舉底の活眼睛なりと相見せよ、一切處眼睛に
あらざるなしと。

三世諸佛は、眼睛の轉大法輪、說大法輪を立地聽しきたれり

【聞解】 三世諸佛……三世の諸佛も皆般若の光明、眼睛の轉法輪、轉說法を立地に聽いて、三世佛と
はいはれるなり。

【私記】 とは 諸佛は眼睛なるがゆゑに、立地聽するなり」

△辨、世下の
字アリ

【御抄】 火焰の説法を三世諸佛、立地聽法せしが如く、今は眼睛の轉大法輪を、三世諸佛は立地聽するなり、是只同心なるべし

【辨註】 辨曰、那箇の諸佛か眼睛の法輪を聽取せざるあらんや、然亦玄沙所云、火焰の法輪と同か別か。

【那一寶】 那箇の諸佛か眼睛の法輪を聽取せざるあらんや、然亦玄沙所謂火焰の法輪と同か別か。

畢竟じて參究する堂奥には、眼睛裏に跳入して、發心修行、證大菩提するなり、この眼睛もとよりこのかた、自己にあらず、佗己にあらず、もろもろの罣礙なきがゆるるに、かくのごとく大事も罣礙あらざるなり

【聞解】 畢竟落著の處を參究するに、師家の堂奥究極の處は、般若の光明なる眼睛裏に入つて發心修行證契す、初より無_二自他_一、故に初中後善不出_二光明眼睛_一。○如是大事も罣礙せざるなりとは、如是發心修行證果も礙へざるなり

【私記】 とは、つまり參究の至極をいはず、と、いへることばを、畢竟じて參究する堂奥と稱せらるるなり、發心修行證大菩提は、眼睛の自舉なり「眼睛の自佗にあらざるがゆるるに、もろもろ罣礙なきなり」かくのごとく大事とは、三世佛の轉大法輪をよび發心修行等をさすなり

【御抄】 此道理の内には、眼睛裏に跳入して、發心修行證大菩提すとは、此眼睛の道理を以て、發心とも修行とも、證大菩提とも云也となり、此發心修行、證大菩提と眼睛とが、非別體一物なる姿を以て、眼睛裏に跳入すとは云なり。

如文、自他にかゝはらぬ上は、實罣礙あるべからず、罣礙なきゆへに如此、大事もとかく談ずれども總無罣礙違事なき也と云也。

【辨註】 辨曰、大事とは發心修行證大菩提の大事なり。

【那一寶】 億千萬劫も一刹那頃も、眼睛裏に跳入して、發心修行證大菩提するなり、如_レ此なるは一大事なり。

このゆるるに古先いはく、奇哉十方佛、元是眼中華、いはゆる十方佛は眼睛なり、眼中華は十方佛なり、いまだ進歩退歩する、打坐打睡する、しかしながら眼睛づからのちからを承嗣して恁麼なり、眼睛裏の把定放行なり

【聞解】 古先いはく、出_二會元十二_一十方佛、元是眼中華とは向ふの所を奪ふ、欲_レ知_二十方佛_一非_二眼中華_一と云ふは能を奪ふ、互奪の法あり○いま……今日那邊に進歩し、這裡に退歩し、或は打坐し、或は打睡して一切を忘れ切つた境界、これともにみな般若の光明の力を得て、眼睛の裡に把住放行するのじや。

【私記】 とは、參本いはく、奇哉眼睛孤峻、故十方佛、同沒蹤迹眼華元首、と_レづからのことばは、舉體のこころなり、舉體眼睛のちからを、眼睛づからのちからといへるなり

【御抄】 眼中華は、打任は妄法の至極なる喩に引を、佛祖の法には、以此眼中華、三世十方諸佛數代の祖師と談する上は、眼中華十方佛なる道理勿論也、今は眼睛の現成公按なる上は十方佛は眼睛也と云なり。

△辨、那、先
下割云、瑯瑤
覺
△辨、那、華
下割云、空華
篇可_二併見_一
△辨、那、リ
下割云、諸人
日用
△辨、那、だ
チのニ作ル
△辨、晴下割
云、異本ニお
のニ字アリ
△辨、那、な
り下割云、ス
ベテ

此眼睛の道理の上に、進歩とも退歩とも、乃至打睡するも、併此眼睛力を、うけつぎて如此の道理ある也とは云也、把定も放行も只眼睛の上の所談なるべし。

先師古佛云、抉出達磨眼睛、作泥團子、打人、高聲云、著、海枯徹底過、波浪拍天高、これは清涼寺の方丈にして海衆に爲示するなり、しかあれば打人といふは、作人といはんがごとし、打のゆるゑに人人は箇箇の面目あり、たとへば達磨の眼睛にて、人人をつくれりといふなり、つくれるなり、その打人の道理かくのごとし、

【聞解】 先師曰、今日師家の方で達磨の眼睛を扶り出して、むさらして泥團となして打人し善い人になれかしと作人するなり○打のゆるゑに……師家に打せらるゝから、學人の面目があらはれて衲僧となる。

【私記】 とは 著を看につくれるもことなることなし、影室いはく、只今の高聲と云ふも、著の詞も、此打人の道理の一切に著道理を高聲とも著とも云なり、と」人人は箇箇の面目ありとは、人人は、人人の面目ありといはんがごとし、打のゆるゑに人人は、眼睛なりと云ふなり、面目は、なほ眼睛といはんがごとし、面は散文なり」つくれるなりとは、たとへばと、いへば、なほこのことをうはさするやうにおもはるるゆるゑに、直下眼睛につくれる人人なりと、したしく釋成することばなり」その打人の道理かくのごとしとは、上を結する詞なり、參本いはく、此箇七字、中の不犯、承前起後、偏正忽忘、と」參本の意は、承前起後なり、しかあれば、打人すなはち眼睛なるを、その打人の道理かくのごとしと參するなり」

【御抄】 抉出達磨眼睛する姿と云は、盡十方界、三世九世總達磨の眼睛ならぬ所不可有、一物と云ても達磨の眼睛ならぬ法なきなり、高聲と云へば、人の聲ありて、高く云べきかと覺ゆ、只今の高聲と云も、著の詞も此打人の道理の一切に著道理を高聲とも著とも云也、海枯徹底過、波浪拍天高と云詞も、只全海の道理なるべし●打人と云は作人と云はむがごとしと云は、打人と云へば猶能所ありときこゆ、只達磨の眼睛にて、作人する道理也、打のゆるゑに人人は箇々の面目ありとは、此打の道理が一切の詞にいはるゝ所を、面目ありとは云はるゝ人々也。

眼睛にて打坐せる人人なるがゆるゑに、いま雲堂打人の拳頭、法堂打人の拄杖、方丈打人の竹篋拂子、すなはち達磨眼睛なり、達磨眼睛を抉出しきたりて、泥團子につくりて打人するは、いまの人これを參請請益、朝上朝參、打坐功夫とをいふなり、打著什麼人いはく、海枯徹底浪高拍天なり
先師古佛上堂讚歎如來成道云、六年落艸野狐精、跳出渾身是葛藤、打失眼睛無處覓、誑人剛道悟明星、その明星にさとるといふは、打失眼睛の正當恁麼時の傍觀人話なり、これ渾身の葛藤なり、ゆるゑに容易跳出なり、覓處覓は現成をも無處覓す、未現成にも無處覓なり

【聞解】 眼にて打生せる……打生は打作の心、達磨の眼睛、般若の智光を以て生ずる人々なる故に、

坐清本作生
△辨、那、坐
ナ生ニ作ル制
云、打作義打
出義
△那、那、磨
下の字アリ
△辨、那、な
ナニニ作ル
△辨、リ下割
云、諸人者道
清水浪上有
波字
△辨、天下割
云、是恁麼人

清境界
 △辨、星下ニ
 清涼愆慶讚歎
 喚作ニ知恩
 報恩其或不
 然年々臘八一
 瓶茶禮拜燒香
 鈍置他ノ三十
 字アリ、那、
 同上ノ文ヲ割
 註トス。
 △辨、なり下
 割云、全非ニ是
 常人話、
 △辨、那、れ
 下割云、悟ト
 云フ
 △辨、那、易
 下割云、ニ
 △辨、那、寬
 ナ無ニ作ル
 △辨、は下割
 云、打失眠睛
 △辨、り下割
 云、何チカ打
 失ト云ヒ成道
 ト云ハンヤ

雲堂に入つて拳頭を行するも、法堂に上つて拄杖を拈するも、これみな達磨眼睛を受用するなり、達磨の眼睛を抉出して、むさらしき泥團となして打人するを、今日朝參暮請、打坐功夫と云ふなり、この様な眼睛を以て打著甚麼人なれば、海枯れて底にとをり、一滴も無い處に空即是色の波が起り、天を拍て高大なり、這邊那邊今時久遠一枚に打作するなり○六年落草は、或師説に成道して、狐の穴からひよと出られ、ただ明星一見して同時成道の葛藤で打失眠睛、それを尋ぬるに初め華嚴會上で出さふと尋ねられたが出ず、其れから阿含方等般若涅槃と尋られたが出なんだとあり、この上堂に、其或不然、年々臘八一瓶茶、燒香禮拜鈍置他、と云ふ二句あり、異本に不見○打失眠睛とは諸見泯じた、傍觀人……釋迦が明星一見して、有情非情同時成道と悟つたと自分に云ひはせぬ、傍觀の者がいふたものぞ、同時成道と云ふは、本人の語話とはきこへぬ、元と迷ふは目を失つて、傍から見られて、是非無しに、いやをれば、見明星と云はれた走な、眼は停觀にこそ、正眼を天童に奪れて、釋迦はつひ傍人となられた、此公案をかう見るは永平の正眼目也○渾身……見明星してより、四十九年の説法始まり、全體身抜けのならぬ葛藤がまとふて、つひに斷へぬ、この葛藤には八相をみな入れて見る、この葛藤の中より容易にひよつと跳り出して、山を下り出世せられた○無處竟は……打失の眼睛は無所覓、今時をも離れた、故に現成をも無所覓で這裡をも見ぬ、又未現成の久遠をも無所覓で見ぬ、有無俱に遣る不空の空と云ふ眼睛なり

【私記】とは 打人の拳頭拄杖竹篋拂子、これ眼睛なり、參請請益打坐工夫等、これ抉出の眼睛なり「什麼人は打算なり」海枯浪高眼睛なり「六年落草は野狐精なり」跳出渾身は不染汚の全體なり、ゆるに上天下地遺餘なきをもて是葛藤といふ、參本はいく、渾身是葛藤、情非同時成道乎、故道打

ト云ハンヤ

失等」と「眼睛の十方界なるがゆるに、無處竟なり」人を成道に誑惑するなり「明星現するとき、眼睛出現するがゆるに悟明星といへり、明星にさるといふは、左右逢悟なり、觸處眼睛隨分明の道理なり」眼睛の恁麼時は、蝦蟇啼、蚯蚓鳴、不曾藏なるがゆるに、傍觀人の話なりといふ、傍觀人話とは、天童和尚上堂の語話、すなはち打失眠睛なり、ここをもて打失眠睛の正當恁麼時の傍觀人の話なりといへり、打失眠睛とは、いづれの處、いづれの時も、眼睛の霹靂なるをいふ、この語大に解しがたし「眼睛の清明なるをもて、渾身の葛藤容易跳出といふ」現成未現成、ともに無處竟なり

【御抄】雲堂打人は拳頭、法堂打人は拄杖、方丈打人は竹篋拂子なむと如此、面々打人の姿をわけて、被談やうなれども、是等皆達磨眼睛にて打坐せるゆへに、皆達磨眼睛也、不可各別也。

是は右に所擧の參請已下打坐功夫等の姿を、皆達磨眼睛と可云也、人の上の所作と不可思なり。是は打著什麼人と云は、海枯徹底浪高拍天道理なるべしと云也、是則全なる姿、又物の交はらぬ道理を云也。

佛は苦行六年、樂行六年都合十二年也、苦行と云は身をくるしめ、とかく難行苦行し給を云、樂行とは、いたく身をくるしめず、只乞食して修行し給を云なり、八年落草の因によりて、跳出渾身の果を得とは不可心得、然者因果の法なるべし、只六年落草、跳出渾身の道理は、葛藤葛藤をまつう理なるべし、野狐精とは佛を云也、あしき物にあらず、又打失眠睛なる時に無處竟なると云やうに見たり、是は凡見也、今の無處竟の道理は、眼睛ならぬ處なき理が無處竟とは云はるゝ也、然者前にいふ、無所覓にはあらざるなり又悟明星と云は、佛成道の時は、明星を見てさとりを得給きと云也、明星を縁としてさとりを得給と云ふ、能見所見をもはなれぬ旁習今理不可然ゆへに、打失眠睛の正當恁麼時の

旁觀人話なり、これ渾身の葛藤也と云ふ、この旁觀人話といはる、人は、眼睛なるべし、全く餘人の人にあらず、さればこそ、打失眼睛の正當恁麼時の旁觀人話とはいはるれ、ゆへに渾身の葛藤也と云也、容易跳出なりとは、やすく成佛する心地なり、かたき事をとかくして、成佛するにあらず、ゆへに容易跳出する道理なり。

前には無處覓とあり、是は覓處覓とあり、現成の時は無處覓の詞其謂あり、未現成の時は無處覓の詞は、打任はあたらす聞れども、所詮この道理は、現成の時も無覓なるべし、未現成時も無處覓の道理なるべし、現成未現成隱顯にあらざるゆへに。

【辨註】 辨曰、世尊六年雪山の野狐窟中に落艸して、腎尻の痛苦にたへず、不合に山を跳出せられしが、渾身は葛藤、猶又明星現時に到て娘生眼睛を失却して覓ぬるに處なきまよ、剩へ誑人有情非情同時成道し了れりと喚呼せらる、是以清涼恁麼讚歎す、是を喚作祖門知恩報恩、其我不然、年年臘八一甌茶、禮拜焼香他を鈍置するのみ、又他に鈍置せらるの點もあり。

【那一寶】 海枯徹底、浪高拍天とは全海の道理なるべし、全海は全眼睛なり、謂是恁麼活境界也。打失眼睛の正當恁麼の時吾も汝もなし、天も地もなし、同時成道と明星に悟ると云ふは傍人の語話なり、傍人と云ふは瞿曇なり、例せば諸佛は傳話の人と云ふが如し、故に明星に悟ると云ふ、是渾身の葛藤なり、容易に跳出とは瞿曇出世、勞無功の謂ならん、清涼讚歎作知恩報恩、不然、年年臘八一甌茶、禮拜焼香鈍置他、又他に鈍置せらるの點もあり、無處は打失の眼睛は現成未現成にあらざる故に、無處なるべし、何をか成道と云はんや。

△辨、那、師
下天童二字ア

先師古佛佛上堂云、瞿曇打失眼睛時、雪裏梅華只一枝、而今到處成荆棘、

却笑春風繚亂吹、且道すらくは瞿曇眼睛は、ただ一二三のみにあらず、いま打失するは、いづれの眼睛なりとかせん、打失眼睛と稱する眼睛のあるならんさらにかくのごとくなるなかに、雪裏梅華只一枝なる眼睛あり、はるにさきだちて、はるのこころを漏泄するなり

△辨、す下割
云、汝が脚下
ニモ送與スル
ヲ知ルヤ

【開解】 先師……瞿曇且道すらくは、しばらくまあ云うて見様なら、瞿曇眼睛は八萬四千の眼睛なる故に、一二三のみにあらず、今打失の眼睛は一二三の中に何れの眼睛なるぞ、打失の一切の所見を混じた無見取心、是の眼睛ならむ、この眼睛の中に雪裏の無陰陽の地、未兆前なる梅が一枝ある、春に先だつは春ならぬ消息、春の心を漏泄すは無にも墮せぬなり、これが打失の眼睛なり

【私記】 とは、いづれの眼睛なりとかせんとは、謝答話し了れり「一二三のみにあらざるべし」春にさきだちて春のこころを漏泄するとは、雪裏梅華只一枝の句を解したる詞なり、これすなはち眼睛なり、影い室はく、所詮雪裡梅華只一枝も、而今到處も、荆棘も、春風繚亂吹のすがたも、皆眼睛なりと可談なり、と」

【御抄】 瞿曇打失眼睛の時節には、雪裡梅華只一枝の道理あるなり、此眼睛の法界を盡すとき千變萬化眼睛ならぬ、物なき道理が、而今到處成荆棘とは云なり、所詮雪裡梅華只一枝も、而今到處も、荆棘も春風繚亂吹すがたも、皆眼睛也と可談也、此眼睛の千變萬化の姿は、只一二三のみにあらずと云はる、也、打失と云詞に付ては、あしき物を打うしなはむするやうに聞ゆ、不可然、非定相佛と云佛を、佛性るとき談せしやうに、打失眼睛と云、眼睛とも云、一筋あるべき處を如此打失眼睛と稱する、

眼睛あるならむとは云なり。
如文、無盡の眼睛の中に、雪裡の梅華只一枝なる眼睛一時あるべき也、春にさきだちて春の心を漏泄すとは、被云也。

【辨註】 辨曰、是釋迦の眼睛が諸人の眼睛なることなしや、然れども此瞿曇の眼睛而今到る處の諸叢林に荆棘をなし却て春風の繚亂して吹こと可笑、然もまた笑はれもせぬ、繚亂して吹笑止なことかな亂吹の二字に心を著よ、春に先だちて春意を漏泄するは諸佛出興已前の妙法輪のこと、耳傾けて聞や。

【那一寶】 一二三にあらずとは森羅萬象瞿曇の眼睛なり、何れの眼睛をか打失せん、打失眼睛と稱するは點睛眼睛なるべし、如是なる中に威音那畔の雪裡梅華只一枝なる眼睛あり、雖先春説佛談法到處成荆棘、春意繚亂惑人、天童却て堪笑なりの餘意を含めり、然るを古佛先春漏春意なりと、諸佛出世以前の轉妙法輪を示さる、傾耳聽。

先師古佛上堂云、霖霖大雨、豁達大晴、蝦蟇啼、蚯蚓鳴、古佛不曾過去、發揮金剛眼睛、咄、葛藤葛藤、いはくの金剛眼睛は、霖霖大雨なり、豁達大晴なり、蝦蟇啼なり、蚯蚓鳴なり、不曾過去なるゆゑに、古佛なり、古佛たとひ過去すとも、不古佛の過去に一齊なるべからず。

【聞解】 先師古佛……霖霖と久しく振りつゝ雨、こゝは上にある未現成の場、雪裡とも云ふ、無變易處なり○豁達と、ほがらかに晴れたそら、この時は日月星辰もあらはる現成の處なり、上下二句で久遠今時一枚に開いた、金剛堅固の晴なり、かうして見れば蝦蟇蚯蚓も外ならぬ、常在靈山の境界であ

△辨、那、藤、下割云、古佛不曾過去常在義忠國師曰古佛過去久矣而今轉換之用ヒ玉フ
△辨、那、は、下割云、有時ハ

△辨、に下割云、然モ又△辨、り下割云、古佛ハ何レ古佛ナルヤ△辨、も下割云、人々知ラレバ古佛ハ則チ古佛ナラズ△辨、す下割云、不古佛ノ過去トハ應身八相示現ノ新佛チ云フ

△辨、氣下ニ還知ニ向上事ニ摩訶飯快活同一堆超ニ過難疊親授記ノ

る、國師は古佛過去久矣といはれたが、つひに涅槃に入られぬ、蟲鳥草木一切みな金剛眼を發揮す、咄これはしたり、いひ過した、葛藤々々、金剛眼睛が古今不斷なるを云ふ○不古佛……過去とは、今日八相化儀の應身を指して不古佛と云ふ、人々甚大久遠迷はぬ、古佛は應身過去するには、一齊ならずとなり。

【私記】 とは 古佛は過去久矣のみならず、不曾過去も古佛なり、過去の古佛と、不過去の古佛と、ともに眼睛なるがゆゑに一齊なるべからず「過去不過去の辨、參本影室みな分明ならず、餘文しるべし」
【御抄】 霖霖大雨とは、假令五月雨比事歟、豁達大晴とは天晴たる姿也、がまていとは、かへる、蚯蚓鳴とはみゝす也、古佛不曾過去、發揮金剛眼睛云云是は所詮大雨も大晴も、がまていも、蚯蚓鳴も、皆古佛と可談也、古佛と云へば過去佛かと聞ゆ、是等を今は古佛と談する上は、不曾過去といはるゝ、尤其謂あり、是等皆眼睛の道理也、眼睛のあらはるゝ也、葛藤葛藤をまつふなり。

古佛たとひ過去すとも、不古佛の過去に一齊なるべからずとは、古佛の上にはたとひ、過去すと云事を談すとも古佛ならむ、尋常に思付たる過去にはひとしかるべからずと云也。
【那一寶】 不曾過去とは非去來今、吾亦汝亦の古佛なり、此古佛たとひ過去すとも不知屋裡古佛、不古佛の八相示現をみる、三世遷流の過去に一齊なるべからずとなり。

先師古佛上堂云、日南長至、眼睛裏放光、鼻孔裏出氣、いま綿綿なる、一陽三陽、日月長至、連底脱落なり、これ眼睛裏放光なり、日裏看山なり、このうち消息威儀かくのごとし

二十字アリ△
那、割註ニ同
上ノ文アリ
△辨、いまチ
而分ニ作ル
△辨、陽下割
云、異本作至
△辨、那、れ
下割云、即
△辨、このう
ちチ道裏ニ作
ル

【聞解】 日南、日南は冬至の節より絲一筋程日脚が長くなる、一陽三至とは、一陽は冬至を云ふ、三至は十一月十二月正月まで一陽づゝ長するを云ふ○連底脱落とは連なる其儘が脱落なり、どこにも連なるもの無し、故に脱落なる道理脱落は真空を明す○この日南長至は般若の眼睛裡の大智慧光明なり其曇りなきは日裏看山で少しも礙りは無い、見とをすなり○この眼睛の中の消息ありさまは何にも替たことは無い、山を見る時は山を見るのみ。

【私記】 とは 参本いはく、大甚分明、謂之、日裏看山、と「陰陽を消息といふ、文義しるべし」

【御抄】 是は冬至上堂歟、一陽三陽日月長至、連底脱落とは、冬至を云也、一陽三陽の姿、日月長至連底脱落の一一姿を皆談眼睛、此一詞の眼睛なる所を眼睛裏放光とは仕也、日裏看山とは、古き佛性(観音歟)の時沙汰ありき、この内の消息、威儀とは、右に一陽已下の詞を指て此内の消息如此とは云也。

【辨註】 辨曰、一陽三陽日月長至連底脱落なりとは、三陽は三至なるべし、一陽は冬至、一陽生則陽道長、以見君子道長、三至は斗指子爲冬至、至有三、一曰陰極之至、二曰陽氣始至、三曰日行南至、故曰三至、眼睛裡放光日裡看山、無有二點瑕翳、日裡看山は雲門西來意の答なり。辨曰、人々拭目見よ、何れの這裡の消息なるぞ、耳出して聞け。

【那一寶】 一陽三陽及連底脱落なりとは、一陽は冬至、一陽生則陽道長、以見君子道長、三至斗指子爲冬至、至有三、一曰陰極之至、二曰陽氣始至、三曰日行南至、故曰三至、眼睛裡放光日裡看山、無有二點瑕翳、日裡看山は雲門西來意の答なり。

先師古佛ちなみに臨安府淨慈寺にして、上堂するにいはく、今朝二月初一、

拂子眼睛凸出、明似鏡黑如漆、驀然跨跳、吞却乾坤二色、衲僧門下、猶是撞牆撞壁、畢竟如何、盡情拈却笑呵呵、一任春風沒奈何、いまいふ撞牆撞壁は、渾牆撞なり、渾壁撞なり。

【聞解】 今いふ撞牆撞壁は向ふにつきあたる相手がありて、撞著するでない、渾牆撞で、やはり壁が壁を撞き、牆が牆を撞く、別の法は無い、壁は壁で眼睛、牆は牆で眼睛。

【私記】 とは 参本いはく、渾撞者、謂牆撞牆、壁撞壁耳、名無餘物撞著也、と「牆壁の渾淪眼睛なり、眼睛の牆壁に開くるをいふ」

【御抄】 二月一日上堂なり、拂子眼睛凸出とは、拂子を則眼睛と云也、明如鏡黑如漆とは、あきらかなる事も、くろき事も一とをり、又餘物不交事に被引出也、驀然跨跳吞却乾坤とは、跨跳とはをどり出たる姿、解脱の心也、吞却乾坤すとは、乾坤とは天地を指なり、天地を吞却すとは、たとへば眼睛が乾坤を吞却すべきか、吞却の姿如此なるべし、又一色衲僧門下、猶見撞牆撞壁とは、衲僧撞牆撞壁の姿も、眼睛なるべし、撞をば突と讀也、撞壁をつくと云へば、人有てつくべきやうに聞ゆ、不爾、牆をば牆がつき、壁をば壁がつくべき也、盡情拈却笑呵呵の姿、一任春風沒奈何の道理、悉是眼睛なるべし、笑呵呵とはわらひたる姿を云也、拂子眼睛驀然跨跳吞却、乾坤撞牆撞壁等の姿を笑呵呵と可云也。渾撞牆、渾壁撞と云はるゝにてしりぬ、撞牆撞壁ともに盡界をつくし法界を盡すと云事を。

この眼睛あり、今朝および二月、ならびに初一、ともに條條の眼睛なり、いはゆる拂子眼睛なり、驀然として跨跳するゆるに今朝なり、吞却乾坤いく十

△辨、リ下割
云、無所見而
無ニ過處ニ△
那、割云、無
過處

跨ハ跨歟

△辨、那、リ
下割云、イカ
ントナレバ
△辨、リ下割

萬箇するゆるに二月なり、盡情拈却のとき初一なり、眼睛の見成活計かくのごとし。

【開解】 二月は二月の眼睛、今朝も初一もみな條々の眼睛なり、この眼睛が驀然と忽に跳出する故に、今朝なり、又乾坤の十方箇吞却する、故に三月なり、この時は今朝も乾坤もみな吞却する、故に二月計り立つ、又盡情拈却の時は初一計り外の法なし、どうしても、唯一の法で外の法がないから二つ並ばぬ。正法眼藏眼睛卷聞解終

【私記】 とは 參本いはく、驀然蹠跳、出一頭地前後際斷、吞却乾坤、固無有數、況幾千萬箇乎、と。影室いはく、蹠跳とは、おどりいでたる姿、解脱の心なり、と。天地がひつくりかへりて眼睛にひらけたりとなり、吞却乾坤は、乾坤眼睛なり、驀然として蹠跳するゆるに今朝眼睛なり、吞却乾坤いく千萬箇するゆるに二月眼睛なり、盡情拈却とは、情識の霹靂なり、ゆるに初一凸出なり、かくのごとく活開眼睛すべきなり。

【御抄】 又今朝二月初一、是は時節指に似たり、ともに條々の眼睛也とあり、今朝も二月も初一も、皆是眼睛なるべし、ゆへに條々の眼睛とは云はるゝ也。

驀然蹠跳する今朝なり、吞却乾坤いく千萬箇する二月なるべし、盡情拈却の初一也、只今朝二月初一なむと云へば、普通の今朝二月一日なむと不心得也、所詮拂子も、今朝も、二月も、初一も、各究盡の姿なるべし。

【御聽書抄】 ▲先師天童古佛住瑞巖時上堂段○團圓とはまるなるこゝろなり▲八萬四千の眼睛也とい

ふ、八萬四千の塵勞ぞ、毛孔ぞ、なむと云を打返て八萬四千だら尼ぞ、三昧ぞ、なむといふ教の心なり、今は八萬四千の眼睛といふ、世間所有の法、或木、或草、或大地、或虚空、是を眼睛と仕とき八萬四千を一眼睛の心地歟、又一一の眼睛歟ともたづぬべし、一隻眼ともいふ、八萬四千眼睛をなしことなるべし▲眼と云事、色につくあきらかなるにつく、又心眼ととる事もあり、千手千眼とて、菩薩の大悲にいひならひたり、これは衆生の願千に不可過、ゆへに千の眼、千の手とはあれども、用許多手眼といふ時は無員數、菩薩は、衆生の願をみてむする事と計思は僻事也、所詮は皆令入佛道と心得べし、所詮今の眼睛は、八萬四千ともいはず、又一ともいはずが本意にてあるなり、八萬四千の一心實相なりとはいはず▲秋風清秋月明、大地山河露眼睛といふ眼睛くもありあるべからざれば、すめりともあきらか也と云ぬべし、大地山河のあらはなる所を、眼睛にとりよせていはむとはあらず、たゞ眼睛をやがて秋風清秋月明大地山河と云也▲點睛とも云ふ、點睛はくらき事を、てむじてあきらかなるよしを示すにてはなし、眼の上には閉るときあり、開時あり、いづれをかならず善ととり、惡ととることなし、皆眼の能なり、今の點睛も是程に可心得、重相見すると云也▲棒喝交馳といふ、棒も喝も是は問答の義に通するなり、賞罰の棒喝にあらず、朕兆不打也と云ふ、あとぞしるしぞなむと云心地也、不打もあとなき心也▲一老一不老といふ、古詞云、道無心合人、人無心合道、欲識箇中意、一老一不老、(これは不會と、いはむがごとし、長老ぞなむとは、いふべからずと云詞なるべし、秋風清、秋月明を一老一不老と云ふ、(老と不老とは只一の字の上にあらず)八萬四千の内の其一をあげて、秋風清秋月明と云にてはなし、秋風清眼睛也、其明又世間ならびて云べき法なし、盡十方界なる眼睛明珠、光明、自己等なる也、されば一老といひ、一不老と云へばとて、勝劣善惡に仕にてなし、會不會といはむが如し、又一心を以て、三界と仕ひ、三界を以て一心と仕ふが如

云、八月ニモ
晦日ニモナラ
△辨、なり下
割云、卒勿ミ
衝突△那、割
云、卒勿ミ踏
破
△辨、那、下
割云、今日ノ
に下割云、二
月ノ
△辨、那、き
下割云、初一
ノ
△辨、一なり
下割云、別ノ
日月ナシ
△辨、し下割
云、全無ミ他
事△那、割
云、全無ミ他
他日事也

し▲洞山悟本大師段、雲巖咄之乞眼睛といふ、尋師訪道是乞眼睛也、身子が乞眼のばら門にあふ、しかのごときは不可似、師に仕る法これ乞眼睛也、師與眼外には、無他乞と云も、與に對したるにてはなし○汝底與阿誰去也といふ、佛祖身心は誰を主として、誰と定むるにもあらず、初祖の所にはなむちよく、吾皮肉骨髓をえたりといふ、非汝非誰と云程の事也▲某甲無といふ、この無は、一切衆生無佛性程の無なり▲有といふこの有は、何の所になからむと云義也、有無が世間の如にてある所なき所のあらむには、著所などかなからむ▲乞眼睛底、是眼睛否といふ、たとへば佛性を見るや、なむと云はむ程の事也、更非能見所見なり、乞と云も否と云も、一眼睛の道理也▲非眼睛といふ、即心是佛を非心非佛と云が如し、此非もさなき事をあらずと云にてはなし、眼睛の上に置て非ととく也▲雲巖咄之といふ、是はつたなしとさぐるにてはなし、證明する心地也、ものをゆるす心地也、又舌をくだす心也、聊をどろく氣色にも仕也▲業識獨堅の標的といふ、是は佛法にいふ、業識なり、さらふべきにあらず、今の眼睛程の事也、眼睛も凡夫の上にあるときは、悪見の眼なれども、乞眼睛になれば、脱落の眼なり▲點睛眼睛といふ、この時いかさまにも境を置て眼にてみると云程の義をすべて點睛するときに、その時の眼は點睛眼睛といはる、點眼の上にも、たとひ境と云事ありとも、識と云事ありとも、點睛なるべし、佛向上義なり▲異類中行といふ、天上天下唯我獨尊と云が如し、たゞしこの獨尊も、天上人間なむとを、類にをきて其中に尊なる所をことなりとつかふ様に心得ば、世間をはなれず、たとへば一長の中に、すぐれたる人ありとも、藤氏は藤氏、源氏は源氏といはるべし、非本意、天上をも人間をも皆とりて、三界唯一心と仕ふこそ、異類中行にてあるべけれ、この時こそ、同類中生といふ詞もつかはるれ、一切皆とるゆへに同類なるなり▲非眼睛の身心慮知形段といふ、非眼睛といはる、

活眼睛と思へし▲古先段、元是眼中華といふ、是を心得るに、多は色相の佛をば、非實佛權化なりとなむといふ、今は三世の諸佛は眼睛の、轉大法輪諸大法輪といふ上は、眼中と云ふこそ、實佛なれと心得也▲先師古佛段、波浪拍天高、達磨眼睛作泥彈子にて、人を打と云は、法華經若有聞法者無一不成佛とかけたる、たゞ同心なるべし、聞法の法は、今の泥彈子也、聞と云と、打と云と、此二つだけ同じかるべし、無一不成佛と、大地有情同時成道と、又同じかるべし、達磨四人の門人に、得吾皮肉骨髓と被仰しは、以皮肉骨髓、四人の門人をつくりたる也、たとへば以髓作慧可といはむが如し、高聲に云くとは、先師古佛の御事也▲海枯徹底とあるは、一の義には海枯ぬればまことに底もみゆれば、徹すともいはれぬべけれども、又海枯れば底と云事なし、いたづらなる平沙のみなるべし、もしはくぼき所とこそいはるべけれ、又の義には海枯とは、全海の義也、すべて邊際なき心也、故に波浪拍天高しとも云也、打人の道理如此なる、眼睛にて打坐せる、雲堂人の拳頭、拄杖、竹篋、拂子、達磨の眼睛なるべし▲先師古佛上堂段、道悟用星、未現成無處竟なむと云ふ、これ不會程の詞なり、無佛性ほどなり▲六年落草野狐精といふ、此六年はさとり已前の法かと聞れども不然、但落草と云ぬれば、すでに脱落の義也、しかれば野狐精とは云へどもやがて佛心とるべし、教にも應佛の威儀には、八相をふさねてとる、今も六年苦行、皆野狐精佛心と云べき也○誑人則道悟明星といふ、このとき明星出現の悟も、いまはじめたるぎなるべからず、誑人と云へばとてあしき物の一人まじはりて、明星悟道と云にてはなし、たゞ悟明星と云詞につきて、誑人といふばかりなり、たゞ悟明星を誑人と云が如し、打失眼睛無處竟なむといふ、前には悟明星とも、道べき道理なく、きこゆる所を誑人剛とある也、跳出渾身是葛藤と云は、葛藤はいづくまでも無際源つゝきたる詞に仕ふ、ゆへに渾身是葛藤とはあるなり▲悟明

星の詞をば、打失眼睛の正當恁麼時の、傍觀人話也とある、此傍觀人、さらに別人あるにはあらず、さきに誑人といひつる人也、明星出現のとき、悟道するは佛也、誑人も傍觀人話も皆佛なり▲先師古佛上堂段、春風繚亂吹、雪裏梅花只一枝と云は、打失眼睛の姿如此と也▲成荆棘といふ、或達磨眼睛を泥彈子につくり、竹篋拄杖につくる、これを荆棘と云なり、ゆへに春風繚亂に吹と云也▲諸佛の實相とも、眞如ともとくが如く、雪裏梅花只一枝とく、をなじ諸佛道の無盡なるを繚亂とつかふ▲春にさきだちて春の心を漏泄すとは、これ梅の春のみさかば、春華なるべけれども、冬もさく、ゆへに春にもかはれず、冬にもかはれぬなり▲先師古佛霖霖大雨段、咄葛藤葛藤霖霖大雨豁達大晴といふ、是盡十方界一顆明珠なむと云程の語なり▲がまていきういんみむといふ、是を古佛とるなり古佛の不曾過去の故に、盡界無客塵といへども、茫茫業識幾時休と云様に、霖霖大雨、豁達大晴の上に、がまていもさういむみむも、又をくをなじ心也▲日南長至段、鼻孔裏出氣、日南長至といふ、日の光至事也、これを眼睛裏仕也▲一陽三陽、日月長至といふ、この日にて、てらさぬ所なきを、脱落と仕也▲眼睛裏の放光といふ、眼睛ならぬ所なき道理を放光と仕ふなり、眼睛が放光せむするにはあらず、放光が眼睛なる也▲日裏看山といふ、無能所日の德にて看山と也▲臨安府上堂段、春風沒奈何、眼睛を似鏡といひ、拂子を如漆といふ、但所詮皆至極する詞に仕なり、眼がさよくあきらかなるに付て、鏡と仕ひ、拂子はぬりたるに付て、うるしのごととつかう▲躄跳吞却乾坤一色なりといふ、拂子ごときが、眼睛なるを、今躄跳と仕ふ、これが吞乾坤なるなり、其故を一色と仕也▲衲僧門下猶是撞牆撞壁といふ、是は門下の門の字に付て、いひいだすなり、この門出入の門にあらず、ゆへに撞の字いできたるなり▲笑呵々は、得道明心なり、一任す春風沒奈何と云は、無對といふほどの詞なり。眼睛終

正法眼藏眼睛

于時寬元元年發卯十二月十七日在越州禪師峯下示衆

却退一字參

△辨、那、子、ヲ
爾、ニ、作、ル

正法眼藏眼睛 牛沒馬回參却退一字
拈來億千萬劫、參學、而團圓則八萬四千、眼睛也文 八萬四千、不動算籌、其唯眼睛、團圓耳、參學、億千萬劫、則雖有去來、而眼中眼行履、步步念念、無別時處、如即心是佛、年月日、可知。

●先師天童古佛住瑞巖時上堂、示衆、云、秋風清、秋月明、大地山河露眼睛、瑞巖點睛、重相見、棒喝交馳、驗衲僧、今驗衲僧者、驗古佛麼也、其要機者、棒喝交馳也、是爲點睛、恁麼見成活計、則眼睛也、大地山河是眼睛露、朕兆不打也、秋風清、一老也、秋月明、一不老也、秋風清非四大海可比、秋月明明於千日月、清明則眼睛山河大地也、本驗古佛麼者、不可得、無一物力究耳、或棒或喝、交參馳騁也、賓主親密、故道是爲點睛、可知彼此絕子母亡、如是則眼睛活計見成也、其見成乎山河大地、朕兆不露、不打猶言未分、清也明也且分賓主、故道老不老而一故、無爭前後、於是乎道非四明於等、恁麼清明、山河眼耳乎、大地眼有之也、此是頭頭一併不染著三昧也。

眼睛參註

舊刻上新刻共
二十一
應永寫本作
山河大地、奈

● 衲僧者佛祖也、不擇大悟、不擇不悟、不擇朕兆前後、眼睛則佛祖也、驗者眼睛露也、瞎現成也、活眼睛也、相見則相逢也、相逢相見、則眼頭尖也、眼睛霹靂也、本衲僧未究什麼物、而今無端聞佛祖也、斯佛祖者、實是眼睛、不擇大悟不悟、不擇朕兆前後也、所以道、驗者等、重相見、則佛祖相逢佛祖、眼睛相見眼睛也、故云、瞎云、活、無外無內、只眼頭尖耳、尖眼、尾正、頭眼、頭正、故道、辟歷、誰奇王戎乎、或佛祖門下王戎乎、

● 大凡勿謂可渾身大渾眼小、往往謂老老大、解會渾身大、渾眼小、是未具眼睛、故也矣、文本 如如宗旨、何不參學、手眼通徧、毫釐差無差、固天地懸隔、盍爾、

● 洞山悟本大師、在雲巖會時、遇雲巖作鞋次、師白雲巖曰、就和尙乞眼睛、雲巖云、汝底與阿誰去也、師曰、某甲無、雲巖云、設有汝向什麼處著、師無語、雲巖云、乞眼睛底是眼睛否、師曰、非眼睛雲巖咄之、然則全彰參學、乞眼睛也、辨道、雲堂、上參法堂、入室寢堂、乞眼睛也、文本 此箇話頭、眼睛光明也、入里乞食、是眼睛故、乞命脈也、金剛般若、佛慧全彰也、全彰無拘自它共其因耳、晨參暮請眼

如是小字者、
通本、下効之

● 大凡隨衆參去、隨衆參來、自而乞眼睛也、眼睛非自己非它己道理明也、謂洞山既有就師乞眼睛、請益、測知自己則不可見乞請人、它己則不可乞請人、文本 可知眼睛無一物、所以道、常隨衆參、忽一日不退、不落不昧、一等全因滿果大修行人、謂洞已下、則眼睛變態乎、豈非佛祖老野狐精、遍界者乎、

● 指示汝底與阿誰去也、有汝底時節、有與誰處分、文本 區處分別、與誰左右、汝也誰也、共密眼睛正法眼藏如是開闢、

● 某甲無、是眼睛、自道取也、如是道現成、須靜究理參學焉、文本 道現成、道是道得、道、某甲無、非有無、無為眼睛、所以道是眼睛、自道取也者乎、

● 雲巖云、設有向什麼處著、此道眼睛者、某甲無、有向什麼處著也、向什麼處著、則有也、應參究其恁麼道也、文本 有向等言、道是眼睛、汝今道無、固依非什麼處什麼時、什麼人物等、則無何等何等眼睛也、故道向什麼處、則有也、加之有、應參究

等、放大光明、莫蹉過、

● 洞山無語、非是茫然、業識獨豎、標的也、文本 謂則全眼睛、暗昏昏地、業識獨豎、為無標的、恁麼情謂、端然標幟、非是茫然、於是乎明矣、

● 雲巖為示云、乞眼睛底是眼睛否、是點瞎眼睛、節目也、活碎眼睛也、文本 點瞎者、無邊際涯底眼睛、之自為道也、節目者、節目理則猶言、貞幹、活碎者、獨體裡爛爛、麼、豈其恁麼乎、非眼睛片塵、有止住此乎、這裡是什麼處、

● 謂雲巖道、宗旨、眼睛乞眼睛也、水引水、山連山也、異類中行、同類中生也、文本 乞眼與眼是、異類、而眼乞眼與故同類、行也、生也、固為自為它、是以雖有同異、巨效、凡夫、引連無物、物物頭頭密爾、引連、故盡十方眼睛而已、

● 洞山曰、非眼睛、是眼睛、自舉唱也、有非眼睛、身心慮知形段處、可相見、自舉、活眼、睛也、文本 非是渾眼小、胡為渾身大、

眼睛參註

●三世諸佛、立地聽眼睛、轉大法輪、說大法輪、來也、是即行佛威儀、一著落在也、

●畢竟參究堂與跳入眼睛裡、而發心修行證大菩提也、恁麼恁麼、不恁麼不恁麼、

●此眼睛從本以來、非自己非它己、無諸罣礙故、如是大事、不有罣礙也、

●是故古先云、奇哉十方佛、元是眼中華、謂十方佛眼睛也、眼中華、十方佛也、

●先師古佛云、抉出達磨眼睛、作泥團子打人、高聲云、著、海枯徹底過、波浪拍

●其打人道理如是、此箇七字、中的不犯、承前起後、偏正勿忘、

詳空華卷

精刻共初號右

舊刻上新刻共四號
通本作無竟處
下一併爾

一本七十五帖
有現者一字
善寫刺

舊刻七右
新本二右

眼睛也、抉出達磨眼睛來、作泥團子打人者、今人謂之參請請益朝上朝參打坐功夫

●先師古佛上堂、讚歎如來成道云、六年落草野狐精、跳出渾身是葛藤、打失眼睛、

●其悟明星者、打失眼睛、正當恁麼時、旁觀人話也、是渾身葛藤也、故容易跳出也、

●且道瞿曇眼睛、非但一二三、而今打失爲什麼眼睛、稱打失眼睛、眼睛之有焉、更

●先師古佛上堂、云、瞿曇打失眼睛時、雪裡梅華只一枝、而今到處成荆棘、却笑、

●其悟明星者、打失眼睛、正當恁麼時、旁觀人話也、是渾身葛藤也、故容易跳出也、

●且道瞿曇眼睛、非但一二三、而今打失爲什麼眼睛、稱打失眼睛、眼睛之有焉、更

●先師古佛上堂、云、瞿曇打失眼睛時、雪裡梅華只一枝、而今到處成荆棘、却笑、

●其悟明星者、打失眼睛、正當恁麼時、旁觀人話也、是渾身葛藤也、故容易跳出也、

●且道瞿曇眼睛、非但一二三、而今打失爲什麼眼睛、稱打失眼睛、眼睛之有焉、更

●先師古佛上堂、云、瞿曇打失眼睛時、雪裡梅華只一枝、而今到處成荆棘、却笑、

●其悟明星者、打失眼睛、正當恁麼時、旁觀人話也、是渾身葛藤也、故容易跳出也、

晴參註

己芳勿以鼻嗅先師古佛上堂曰霖霖大雨豁達大晴蝦蟇啼蚯蚓鳴古佛不會過去發揮金剛眼睛咄葛藤葛藤謂金剛眼睛霖霖大雨也豁達大晴蝦蟇啼蚯蚓鳴也不會過去故古佛也古佛設使過去而不可一齊不古佛過去矣本謂大雨也大晴也啼鳴也總金剛眼睛不會過去不會現來三世不可得之謂金剛古佛本身毘盧遮那過去久矣則古佛平常身心也不可以凡情測度故道不可一齊等而今道古佛設使則雖類凡夫過去言而不可爾會取之謂也南無越州金剛古佛

舊刻上新刻同九號右方

●先師古佛上堂曰日南長至眼睛裡放光鼻孔裡出氣今綿綿一陽三陽日月長至連底脫落也是眼睛裡放光也日裡看山也箇裡消息威儀如是文本冬至上堂地雷復故一陽長至三陽地天泰下三爻共陽此時自是連底脫落也若無一陽何有三陽陽是長也陰是消也陰陽又云消息陽息是眼睛陰息蓋爾大甚分明謂之日裡看山眼睛單提獨弄而已

●先師古佛因臨安府淨慈寺上堂曰今朝二月初一拂子眼睛凸出明似鏡黑如漆暮然踣跳吞却乾坤一色衲僧門下猶是撞牆撞壁畢竟如何盡情拈却笑呵呵一任春風沒奈何今道撞牆撞壁渾牆撞也渾壁撞也渾撞者謂牆撞牆壁撞壁耳名無餘物撞著也撞溢全機

●有箇眼睛今朝及二月初一其條條眼睛也謂拂子眼睛也文本一條條者猶言一一獨露獨露一眼睛也本來無一物何處惹埃塵

●暮然踣跳故今朝也吞却乾坤幾千萬箇故二月也盡情拈却時初一也眼睛見成活計如是文本通本作如是也暮然踣跳出一頭地前後際斷吞却乾坤固無有數況幾千萬箇乎二月是月重重盡情拈却無有繫縛初一自忘也豈不眼睛活計乎

●正法眼藏眼睛爾時寬元元年癸卯十二月十七日在越州禪師峯下示衆已上應永本下從本

●同二十八日當山侍司寮裡書寫之懷昇

明和七年庚寅仲夏念八日安居東羽秋田仙北郡駒形莊版見內邑釋堂山靈仙禪寺寬仲眼睛移盃再會明憲下午沒馬回參了矣以回向護法龍天善神冥加至恩云末裔本光盥焚畔睇書

眼睛參註附錄

薦福雲語云人人有光明在己光明卷念茲在茲參而今眼睛牛沒馬回身心如一故有光明在之為人人人有外無光明在眼睛一枚呼喚人人染汚光明者乎通身一隻眼睛裡眼外無餘身眼一如慣勿容身大眼小情量因坐臥經行非外方誠哉是言也火爐古鏡世界虛空一尺一丈都來無外只箇眼睛角角尖尖四威儀行足往日洞山就師乞為無有自它彼此就師乞之師資舊來眼睛三味見成也獨體遍野發靈光可知海枯眼睛獨體眼睛邊界謂之遍野遍野則無邊闊空是也發靈光非智發非境發靈光發也發靈光是就師乞即得解脫也

涉典錄

第四十四眼睛卷 ▲瑞巖點睛 淨祖瑞巖錄上堂出 ▲洞山乞眼睛 傳燈卷十四雲巖章出 ▲打失眼睛 淨祖錄臘八上堂出 ▲眼睛裡放光 淨祖錄冬至上堂出 ▲金剛眼睛

淨祖錄上堂出▲拂子眼睛凸出。淨祖錄上堂出。

涉典續貂

【鑿眼睛】先師住瑞巖△乃出于淨祖錄明州瑞巖語。同錄。又有臺州瑞巖。不可雷同也。○交馳△雪竇。百丈奇特話頌云。祖域交馳天馬駒。○洞山眼睛△出于本錄。及傳燈十四師章。○立地聽△雪峯火燄說法話字。已出之。○先師曰抉出△淨祖清涼寺晉山。踞方丈法話。○六年落草△淨祖清涼錄中。臘八上堂語。次有清涼恁麼贊歎。喚作知恩報恩。其或不然。年々臘八一甌茶。禮拜燒香鈍置他。之卅字。○奇哉十方佛△已出于空華篇中。○先師曰瞿曇△淨祖清涼錄。臘八上堂。今偈次。有諸方說禪。清涼念詩。還當得麼。其如不然。燒香點燭拜泥團。腦後遼天鶴子飛。之卅字。○上堂云霖露△淨祖淨慈。上堂語。○蝦蟆△格物論云。有數種蝦蟆。皮上腹下。有黑點脚短能跳。接百虫。解作嗚叫。○不會過去△翻用忠國師語也。○金剛眼睛△法界次第云。如來卅二相。第廿九。眼色如金剛相。雪峯偈出林間云。欲識金剛體。但看獨樓前。武庫上。大慧就張無盡。請湛堂塔銘曰。若是金剛眼睛。在相公筆頭上。○先師曰日南△淨祖。臺州瑞巖錄。冬至上堂云。晷運推移。打圓相云。看日南長至。眼睛裡放光鼻孔裡出氣。還知向上事麼。飽飯快活一厨。超過瞿曇親授記。○日南長至△玉燭寶典云。十一月建子。周正月。冬至。日南極景極長。○綿々△詩大雅云。綿々瓜瓞。王風云。綿々葛藟。注云長不絕貌。○一陽三陽△春秋考異云。千歲昌期。一陽

嘉節。注云。十一月地雷復卦。一陽初生。白虎通。史天官書同焉。三陽者。地天泰下。三爻共陽。○臨南府淨慈△一統志。杭州府云。宋南渡遷都於杭。陸爲臨南府。淨慈寺。在西湖之上也。名藍圖云。淨慈開山。永明延壽禪師也。○今朝二月一△淨祖。淨慈錄。○明如鏡黑如漆△增續傳燈。破菴先。上堂云。十五日已前。明如鏡。十五日已後。黑如漆。洞山菓卓話。及韓文。有黑如漆字。○撞墻撞壁△介石明錄云。行到說不到漏雨。漏風。說到行不到。撞墻撞壁。○義雲師著師著語云。人人有光明。在。○又頌云。通身一隻眼睛裡。坐臥經行非外方。往日洞山就師乞。獨體遍野發靈光。眼睛畢

正法眼藏眼睛註解畢

正法眼藏家常

家常

【義雲頌著】 第四十三家常 亘古亘今
喫飯著衣斯日用 更無餘事敢應求 阿誰向火裡望水 慕地難論親與讎

【面山述贊】 第四十家常 述云、家常亦稱家風、二時粥飯隨家豐儉、日年年、生涯不改、是、衲子之用心也、贊言 十二時中、法喜禪悅、飽滿身心、不干唇舌、瓦盃之茶、色兮啜黃金、鐵鉢之飯、淨兮嚼白雪、誰人敢得此味知、十方諸佛不可說

【開解】 正法眼藏家常卷開解 家常○述贊にも家常亦云家風ある、豐儉に隨て相應の家のならはし有るべき、たべもの不珍、よのつねのこと初發心より正覺位まで如是にして間斷無き、是れ佛祖の家常なり。

おほよそ佛祖の屋裏には、茶飯これ家常なり、この茶飯の儀ひさしくつたはれて、而今の現成なり、このゆるるに佛祖茶飯の活計きたれるなり。

【開解】 おほよそ佛祖屋裡の茶飯、法喜禪悦食の正命食がある、これ家常よのつねならはせなり、この茶飯は佛祖以來久しく傳はれて今日まで不藏に現成してある、それゆるるに佛祖の茶飯ならはせの活計があらはれ、傳來しきたれるなり

△那、れるな
リテ、れリニ作
△辨、那リ下
翻云、是則承
上喚、出下公
案也

【記私】 とは おほよそ佛祖の屋裡とは、世間にゑらぶなり「家常にあまれる一法なきがゆゑに、茶飯是家常なりといへり」此茶飯の儀則これ家常なること、いまにはじめたるにあらざれば、ひさしくつたはれりと云ふ「ひさしくつたはれ、而今現成とは、古今は家常の現成なるなり」このゆるに佛祖茶飯の活計は、家常につたはれきたるなり「影室いはく、家常の詞は、よのつねと談するなり、此茶飯世間出世まことによのつねの儀なるべし、と」

【御抄】 家常の詞は、よのつねと談也、此茶飯世間出世まことによのつねの儀なるべし、雲堂裏の茶飯世間にも打任たる儀なるべし、但佛祖茶飯の儀詞はよのつねに似たれども、よのつねにあらずとも云ぬべし、其故は茶も法界をつくし、飯も盡界を盡すべし、是則佛祖の上の、茶飯の道理なるべし。

【辨註】 辨曰、佛祖も如前所言、生佛無有別面、然る故に此茶飯有生佛、已來久く傳はれて、唯今各人の現成なり、人々日用茶飯、是家常知鼻孔裡不喫飯外更無他事、雖然如是一番筋斗翻則鼻飯耳食亦不無。

【那一寶】 家常 那一寶曰、誰家竈裏火無煙、茶飯これ家常なり、知鼻孔裏不喫飯外更無他事、此茶飯有生佛已來、久しく傳はれて唯今各人の現成なり、雖然如是一番翻筋斗則鼻飯耳食亦不無。

大陽山楷和尚、問投子曰、佛祖意句如家常茶飯、離此之餘、還有爲人言句也無、投子曰、汝道、寰中天子敕、還假禹湯堯舜也無、大陽擬開口、投子拈拂子掩師口曰、汝發意來時、早有三十棒分也、大陽於此開悟、禮拜便行、投子曰、且來闍黎、大陽竟不回頭、投子曰、子到不疑之地耶、大陽以

手掩耳而去、しかあればあきらかに保任すべし、佛祖意句は、佛祖家常の茶飯なり、家常の麤茶淡飯は、佛祖意句なり、佛祖は茶飯をつくる、茶飯佛祖を保任せしむ、しかあれどもこのほかの茶飯力をからず、このうちの佛祖力をつひやさざるのみなり、還假堯舜禹湯也無の見示を、功夫參學すべきなり、離此之餘、還有爲人言句也無、この問頭の頂額を參跳すべし、跳得也跳不得也と試參看すべし

△那、去下割云、出子續傳燈第十芙蓉道楷禪佛傳
△辨、リ下割云、外別辨談玄談妙
△辨、那、祖意句、意祖句、作ル
△辨、句下割云、異本作佛祖意句
△辨、は下割云、日用
△辨、那、し下割云、了、不、從、他得、的、知見、云、跳、漢書註、獨、出、境、也

【聞解】 大陽山……意句は大般若にある意善安樂清淨句義、是菩薩句義と、この意なり、意と云ふは是れ何の意ぞと參じ、句は是れ何の句ぞと參するなり、法華轉にもある通り、きくに唯一句なり一偈なりじや、今問ふ心は佛祖日用の意識言句は家常の茶飯、これを離れて外は有るまいと云ふ下た意で問ふて來た、佛祖の意句を以て爲兒孫から、これを離れてはならぬ○寰中……寰中は天子の勅命で治る、禹湯文武の力は借らぬと云ふ心で答へる、心王城は心王でをさまる、他力は借らぬ、意句は意句で治る○三十棒……一念發意、欲云ともはや三十棒の罪がある、口開な徳山未跨船舷、好與三十棒と云ふと同意なり、且來れ第二杓の惡水○掩耳……到るやと云ふ氣に入らず、故に掩耳不疑の地は到不到の場では無い、到ると云ふものが有れば不到があるから能所が立つ○しかあれば……日用の佛祖の意識言句は外の物で無い、法の物で法身の慧命を養ふ茶飯正命食なり○家常の凡の聖の迷の悟のと云ふ美味は無い、麤茶淡飯が佛祖の慧句也、佛祖の意句が麤茶淡飯、麤茶淡飯が佛祖の意句、二つ無い、生死は佛の御命なる道理なり、常には意識厭ひ嫌ふ、其れが佛祖の命根なり○佛祖は……上た

る佛祖は正命食の茶飯を爲_ニ子孫_一つくる、茶飯佛祖を保存せしむとは佛祖の意句の正命食の茶飯を喫すれば、必ず佛祖となる、これ佛祖を保認せしむるなり○しかあればこの意句の外に心外の茶飯を借らぬ、又この内の佛祖力_{チカラ}をつひやさず、三祖の云ふ虚明自照不_レ勞_ニ心力_一、非思量の故に○見示を參學すべし……借_ニ堯舜之力_一也無_トあらはれ示さる、處を功夫するがよい、借るや無_ヤ……裏_{ウラ}には借らぬと言葉がある、こゝを參學すべし、又還て有_ニ爲人言句_一也、無_ト云ふ處には此を離れて外に爲人の言句は無_イ筈と云ふ心あり、この問頭の頂顛を參究すべし○跳得……借_ニ堯舜力_一也無_ト云ふ處を一つ跳出して見よ、又還借_ニ爲人言句_一也無_トから跳得して見るがよい、この超と不超とを試に參じて看よ、不借と云ふは有ならず、跳り超へるなり、借るといへは今時で不_ニ跳得_一なり、この跳と不跳との間を參學すべし。

【私記】 とは 意句は言句なり「家常茶飯は佛祖意句なり」離此之餘、爲人言句の有無は、みな家常なり「拈拂子掩口は、家常茶飯なるゆゑに、早有三十棒分なり」禮拜便行は、棒頭の翻身なり「竟不回頭は、到不疑地なり」以_レ手掩_レ耳而去は、作家の去就なり「佛祖は茶飯をつくる、茶飯佛祖を保任せしむとは、佛祖と茶飯と、自佗にあらざるなり」此ほかの茶飯力をからず、このうちの佛祖力をついやさるのみとは、茶飯佛祖を家常に獨立するなり「還假堯舜禹湯也無_トの見示を功夫參學すべしとは、これ家常の王勅には佗力をからざるなり」離此之餘爲人言句の有無、一途に屈滯せざるを參跳すべしといへり「問頭の頂顛とは、家常をいふ」跳得跳不得ともに家常なり「試參看とは、あたるものを幸に家常に參學するなり」

【御抄】 楷和尚とは芙蓉山の道楷和尚事也、投子とは義青事也是楷和尚也、佛祖の意句とは、頌をも作り

なむとせむするかとこそ思に、家常の茶飯とある難心得、但佛祖の上の茶飯の姿、尤佛祖の意句と云はるべし、楷和尚の師に問する詞に、離此之還有爲人言句也、無とは、此茶飯を離て有爲人言句無と被問也、如文、此無の詞例はなると云理も不離と云道理もあるべし投子曰汝道、寰中天子勅還假禹湯堯舜也無、是は當時の天子堯舜の政事をかるや否と云也、此詞は離之還假有爲人言句也無と云詞に、聊も不違、只同事也、其時大陽擬開口投子拈拂子掩師口曰、汝發意來時早有三十棒分也と是は汝は無始本有の佛祖の面目也と云詞なるべし、大陽このとき開悟禮拜す、其時投子曰、且來闍黎、是は弟子をよびかへすか、而大陽ついに不歸、こゝに投子又云、子到不疑之地耶、此詞はたとへば、汝心得たるかと云心地也、こゝに大陽以手掩耳而去、此詞を聞て手を以て掩耳ゆくなり、此問答文に聞えたり、此師弟の問答、振舞所詮悟道得法の上の所作なるべし、凡慮の境界の非所及べし。

如前云、茶飯を佛祖の家常といふ、魚茶淡飯とはあらし茶、あらし飯と云也、これは只茶飯と心得べき魚淡の詞に付て別の了見不可有、佛祖は茶飯をつくる、茶飯佛祖を保任せしむとは、たゞ佛祖は茶飯、茶飯は佛祖と云なり、無別子細、是は強爲して佛祖を茶飯になし、茶飯を佛祖になすにあらず、たゞ法爾法然の道理如此なる也、故に此外の茶飯力をからず、此内の佛祖力をついやさずとは云也。此詞如前云、無の詞例うけたる詞也、假と云義も、からずと云義もあるべし、爲人の言句も有と云義も、無と云義もあるべし、此道理を問頭の頂顛を參跳すべしとは云也、跳はをどると云歟、解脱の心地也、跳得はよく、跳不得はあし、とは不可心得、跳得、跳不得、非得失只同理なるべし。

【辨註】 辨曰、言は佛祖の上堂小參示衆說法、是家常の茶飯、正命食なり、是此佛祖不知、爾が佛祖なること無_ヤ否。

【那一寶】言は佛祖の上堂小參示衆說法、是家常の茶飯、正命食なり、外別に談玄談妙なし、佛祖は茶飯をつくる、茶飯佛祖を保任せしむとは、たゞ佛祖は茶飯、茶飯は佛祖と云ふなり、然れども強爲して佛祖を茶になし、茶飯を佛祖になすに非ず、たゞ法爾如然の道理、如此なるなり、故に此外の茶飯力をからず、此の内の佛祖力をつひやさずとは云ふなり、是此佛祖、不知爾が屋裡の佛祖なることなしやいなや。

南嶽山石頭菴無際大師曰、吾結艸菴無寶具、飯了從容圖睡快、道來道去道來去する。飯了は、參飯佛祖意句なり、未飯なるは未飽參なり、しかあるにこの飯了從容の道理は、飯先にも現成す、飯中にも現成す、飯後にも現成す、飯了の屋裏に喫飯ありと錯認する、四五升の參學なり

【聞解】南嶽山……出于傳燈三十卷、四大の庵を結び、且く此に須磨の浦なる境界なれば、寶具のたからも無し、何にも無いから、飯を喰つて仕舞つた、從容とゆるやかに眠るのみ○道來道去……石頭の道ひ來り道ひ去る、飯……とは、佛祖の意句に參じ切つてのこと、この抄飯を未喫者の、未參佛祖の意句なり○飯先……この飯了從容……道理は飯先未悟の處にも具つてあるけれども、修證せざればあらはれぬなり○飯中の得悟は眞正當、この時に從容睡快の道理現成するなり、飯後……悟り了つて聖體長養の時にも現成す○しかあれば飯了屋裡に……抄飯に飽きた後、又喫飯し證上の修に引轉せらるゝと錯認する、少し計りあり、四五升は少し斗りと云ふ程のこと、錯認とは悪いと云ふことでは無けれども、初めの喫飯さへも、本と十成の處から見れば錯なり、これで飯了に飯喫し、證上に修するはなほ、錯認では有るは有れども、これが四五升、少し計りの參學で向無うてはならぬ。

△辨、那、師下
割云、艸菴歌
一本する上
無、道來去三
字、參飯作參
飽
△辨、參飯チ
參飽二作ル、
割云、異本作
飯不可也
△辨、那、リ下
割云、モシ
△辨、す下割
云、其人ニヨ
ルナリ

【私記】とは、飯了は、參飽佛祖意句なりとは、飯了の通天徹地は、家常の玲瓏通暢のごとしと示さるるなり、佛祖意句は、すなはち家常なり、參飽は不犯のごとし、飯了從容の道理は、初中後ともに飯了なり、ゆるぎに飯の屋裡に邊際なく、隔意なし、喫飯喫茶、寢息覺悟、ともに飯了ならざることなし、あにたい圖睡快のみならんや、錯認とは、そのことを、そのことに合點するを云、四五升の參學、八九成の道得といはんがごとし、何必の宗なり、一途につかへざるを四五といふのみ、飯了といふより、四五升とつけたるなり

【御抄】此詞は石頭の草菴の歌と云詞を一句被引出也、是は無別子細草菴に無寶具とは、たからなしと云也、飯了してはこゝろよく、睡眠すと云心地なり、但是も一向順世狀では不可心得、此飯了從容圖睡快の姿、只我々が食了、いたづらにやすみぬぶりたる義にてあるべからず、佛成道のあした、大地有情同時成道とも被仰たる程の詞と可心得、不可類凡慮事也、道來道去道來去する飯了は、參飯佛祖意句とは、道來道去道來去とは、上の石頭の吾結草菴無寶具已下の詞を云歟、飯了は參飯佛祖意句とは、所詮今の喫飯の姿を、佛祖意句と談也。

是は此飯了の道理をしらざれば、未飽參也とはきらう心地也、實にも此理にいたらず、くらからむば未飽參なるべき條勿論事也、又佛法の上に、參飽未飽參飽と云理なかるべきにはあらねども、こゝの未飽參はきはらるゝ詞と可心得。

是は飯了と云へば、飯はさき、了は後と聞ゆ、此喫飯の道理かならず、飯了許なるべきに非ず、飯先も飯中も飯後もあるべきなり、初中後にかはらぬ飯なるべきがゆへに、飯了なるときは、喫飯の理

ハバ虚空吞
虚空鉢盂合
掌受ナリ、如
是佛祖ノ妙鉢
諸人能受持
セヨ

ことを知る○喫飯飽了一と度び喫して飽く、證して後に修する方○知了飽飯……知了了て飽く修と證と同時に、さらに喫飯とは證して又修するなり○作麼生……上如是喫飯にさま／＼あるが其の喫する鉢盂はいかなるぞ、鐵木でも無く、瓦石でも無い、無底なり、無鼻孔なり、鐵木瓦石にあらずと云つて一向に辨白無いでも無い、吞盡虚空全無底と云ふ鉢盂なり、無底さへあるに又一口に吞却虚空空も持たぬ、其時虚空合掌して受くる、これ有無俱に遣る不空の空と云ふ處、川僧禪師の歌に「無の字盛るそのから鉢の底ぬけて、空とすれともたまらざりけり」とこの意なり。

【私記】とは この奇特事これ家常なり、家常なるがゆゑに、獨坐大雄峯なり」家常のゆゑに不得動著坐殺漢なり、なにのさはがしきことなきなり、幾度逢春不變心のごとし」有人問、向佗道する有甚奇特事なり」移過喫飯、なにの造作なき奇特事なり」奇特事は、條條面面みな奇特事なるがゆゑに喫飯なり」飽了知飯、喫飯了飽、知了飽飯、飽了更喫飯、これらみな鉢盂なり、ゆゑにしばらく作麼生ならんかこれ鉢盂といへり」ただこれ盃盂の七穿八穴なるがゆゑに、木頭にあらず、黒如漆にあらず、頑石鐵漢ならんや」影室いはく、無底なり無鼻孔とは、只鉢盂の解脱し、脱落したる姿なるべし、と遺餘なきがゆゑに吞虚空なり」二時の受食、これ虚空受なり、虚空受、これ奇特鉢盂なり」

【御抄】如何是奇特事と云へば、普通にもなき珍事あらむするやうに覺えたり、神通の詞も、神通と云へば身上より、出水、身下より出水し、或虚空を飛、大海の上を如陸地走らむするをのみ、神通と思へり、手巾來と點茶來を、神通と談せし程事也、百丈の答に、獨坐大雄峯とあり、是奇特事也、大衆不得動著、且教坐殺者漢とは、如文大衆不可動著、しばらく者漢を坐殺する也とあり、是坐禪の姿也、是は百丈の坐禪して、大衆を坐殺したるぞと被仰也、凡は是に過たる奇特事何事かあるべき、奇

特に取て尤奇特なるべし、已下如文、百丈は獨坐大雄峯とあり、天童は淨慈鉢盂移過天童喫飯と云ふ、是奇特事なるべし、此獨坐大雄峯の姿淨慈鉢盂移過天童喫飯する姿、只尋常に思付たる分にあらず、各法界を可盡、此道理尤奇特なるべき也。

猶これ奇特事有とは、必勝劣あるべき詞にあらず、さきには獨坐大雄峯を、奇特事といひ、こゝには淨慈鉢盂移過天童喫飯を奇特事と云也、是則天童の御詞をもてなさるる心地歟。奇特事の條々面々とは、右に所擧の獨坐大雄峯を始て坐殺者漢、淨慈鉢盂移過天童喫飯と等云を指歟、是等を喫飯と可談也、又鉢盂は喫鉢用也とあり、是は打任たる詞に相似たり、但是も只尋常に飯を入れて可用器物也とは不可心得鉢盂の姿可盡法界、鉢盂と喫飯と、不可各別、鉢盂の上の喫飯なるべし、此道理をのべらるゝに、淨慈鉢盂也、天童喫飯也と云也、こゝに淨慈鉢盂とあり天童喫飯也と、はじめには、一句にかゝれたるを、こゝには兩語になされたり、是は如前云、鉢盂も盡法界、喫飯も盡法界、只鉢盂喫飯の器物也と許、心得させし料とも可心得也。

此詞無別子細喫飯の道理の上の、功德壯嚴なるべし、此鉢盂今喫飯、凡見に順すべからず、奇特の上の道理なるべし。此鉢盂の姿、作麼生といはるべきにあらず、但今の鉢盂いかならむも、鉢盂の道理なるべき所が、如此いはるゝ也、鉢盂は只鉢盂なるべし、木ぞ黒ぞ、石ぞ鐵ぞなむと云べからず、但鉢盂の上の莊嚴に又如此の詞なかるべきにあらず、其時の木黒石鐵の姿、不可准凡見、各可盡法界、鉢盂の當體を如此可談也、無底也、無鼻孔とは、只鉢盂の解脱し、脱落したる姿なるべし。是も如前云、鉢盂の盡界をつくす道理なるべし、以虚空鉢盂とするなり、虚空が虚空を吞も受もすべ

き也、此鉢孟喫飯の道理が、一口呑虚空、虚空合掌受の理なるべき也。

【辨註】 辨曰、楞嚴八上云、如是世界十二類生不能自全、依四食住、所謂段食觸食思食識食是故、佛說一切衆生皆依食住、當知行住坐臥、日用光中、造次云爲、根境識十八界、皆依食住有所食也。

【那一寶】 楞嚴八上云、如是世界十二類生不能自全、依四食住、所謂段食觸食思食識食、是故佛說一切衆生皆依食住、當知行住坐臥日用光中、造次云爲根境識十八界、皆依食住有所食也。

先師古佛、ちなみに臺州瑞巖淨土禪院の方丈にして示衆するにいはく、飢來喫飯、困來打眠、爐鞴巨天、いはゆる飢來は、喫飯來人の活計なり、未曾喫飯人は、飢不得なり、しかあればしるべし、飢一家常ならん、われは飯了人なりと決定すべし、困來は、困中又困なるべし、困の頂額上より全跳きたれり、このゆるるに渾身の活計に、都撥轉渾身せらるる。而今なり、打眠は佛眼、法眼、慧眼、祖眼、露柱燈籠眼を假借して、打眠するなり

【辨註】 飢來……一度び飢へたものでなければ、飯を求めぬから、この飢は祖門の入用なり、一たび迷はぬと云ふ妙飯を喫して、それから飢初めたるなり、この二句永祖の釋で知れる、故に略す○爐鞴巨天とは爐はいが開いて亘天ひろい、こゝに入り來り透過するものが有らまほしい、透過する底は無いか、走したるものあらば○咄あゝと、われ如淨も三千里程もあとさきするであらう○いはゆる飢る

△辨、天下、莫、有、透、鉢、鐘、底、麼、咄、倒、退、三、千、ノ、十、二、字、ア、リ、其、下、割、云、異、本、無、莫、有、以、下、十、二、字、△、那、割、云、上、ノ、十、二、字、ヲ、割、註、ト、ス、△、辨、那、下、割、云、不、可、念、飯、故、上、云、飢、來、は、喫、飯、來、の、人、の、活、計、ナ、リ、ト、直、下、二、△、辨、那、は、下、割、云、本、成

△辨、し下割云、困、道、什、麼、耶、無、困、則、不、可、打、眠、故、二、△、辨、那、べし下割云、老僧常云甚大久遠未曾迷、コトヲ決定セヨトハ是ナリ、△、辨、那、に下割云、日用人々、△、辨、那、る下割云、唯、△、辨、今下割云、這個時節

とは一通りで無い、一度び無漏の妙飯を喫し來つた人の活計、悟了同未悟の境界なり、未喫……腹一杯無漏飯をくはねば、飢えることはならぬ○しかあれば飢えることも家常のならばせなり、一度喫したのが無くなりたが家常の境界、其時を手前は昔決定して飯了つた、其れゆるるに、今飢えぬと知るがよい○困は窮なり、こまると訓ず、今はくたびれた中に、又くたびれた、六祖の慧熊無伎倆と、おほせられた境界、聖諦不爲、況階級乎、くたびれた、困から困を跳り出たる、無伎倆の境界なり○渾身……人々日用全身の活計に撥轉せられて、渾身を持って居られぬ、これが眞箇渾身の境界なり、而今なりとは即今寸時も空く過ぎざるなり○打眠……佛眼法眼、一切の眼を借て眠る、しかればこの境界は、有縁を不逐、空忍に不沈、久遠今時を超えて、一切に自由なる打眠なり。

【私記】 とは 爐鞴の間隙なき、これを亘天といふ「飢喫困眠、爐鞴にあらざるはなし」一事一法も爐鞴裏の面目にあらざることなきがゆるるに、透鉢鐘底なり」ものよりつかざれば倒退三千なり「飢來、喫飯來、ともに爐鞴の活計なり」未曾喫飯飢不得、ともにこれ一家常なり」一家常ならんわれは、飢と、飢了人と、ともに家常なるをもて、飢一家常ならんわれは、飢了人なりと決定すべしといへり、われは家常にわれするなり」困來は、困中又困中なるべしとは、困の一法獨立なり、困の外に一法の家常にまさる法ありとも、われはよんで困といふべしとなり「ゆるるに困の頂額上より全跳きたれりといふ、これ春秋卷に、到來時は寒暑づからの頂額より到來するなりといふにおなじし」困の身體すなはち家常の頂額なるがゆるるに全跳きたるといふ、困の舉體を家常と、おどり出るなり、上下四維これ渾身なるをもて、渾身の活計に都撥轉渾身せらるる、而今なりといへり、のこれる一塵あらざるなり」困來の渾倫なるかごとく、打眠もまた明白なり、ゆるるに佛眼等といへり」

【御抄】 いはゆる飢來は喫飯來人の活計也とは、此飢と飯とは、全非別物、只同事なるべし、喫飯の上の莊嚴なるべし、故に未曾喫飯人は、飢不得也とは嫌也、是は此喫飯の理を不知人は、飢をも不得也と云、しばらく嫌詞なるべし、實にも飯喫飯の理にくらからむ輩は飢の道理は不得なるべし、飢一家常ならむ、我は飯了人也と可決定とは、此飢の道理現前せば、飯了人と決定すべしと云也、其故は飢飯只一物なる上は、飢が盡法界ならむ時は飯了人の道理決定すべしと也、飢飯不各別ゆへに。

是は困來の詞を被釋也、困とはたとへば窮屈したる姿歟、打任人の所行也、但此困は全困なるべし、困中又困は、迷中又迷と云程の詞なるべし、困の頂額上と云は困なるべし、ゆへに全跳きたれりとは全困なる道理也、渾身の活計に、都撥轉渾身せらるとは、只渾身は渾身に轉せらると云詞なり、困はすみにれむらんとするを云ふれむらんとすいふ

是は又打眠の詞を被釋なり、是は窮屈しぬれば、打眠打任たる人の所行かと覺ゆるを、今は打眠を被釋に、佛眼祖眼等を假借して、打眠する也とあり、此打眠今は可盡法界也、所詮盡十方界沙門一隻の眼を打眠とは可談也、然者舊見の打眠の道理はすでに改了、爐鞴とはたゝらと云て、かねわかつ調度也、所詮今の飢來の姿、喫飯の様、困來打眠等が詞は無盡なれとも只一物なり、此理が爐鞴亘天とは云はるゝ也、かねをわかしぬればとろくゝと成て、一味和合する後は差別なし此謂歟、但佛法には彼是を取り合せ、より合て無差別とも云義にてはなし、一法究盡の理が、無差別とは云はるゝ也、三世不可得若は是三無差別ぞなむと談せしに不可違也。

【辨註】 辨曰、飢來は飯を喫せんことを要す、未曾喫飯人は飢不得なり、曾て無上菩提の正命食を喫せし、我本行菩薩道是飢人なり、故に未曾喫飯の人は飢不得なりとの玉ふ、祖門中參學の志氣

は是飢來喫飯來の活計なり、奈何今時禪林無飢人、たまたま飢るに似たるも、只是邪命に飽食し去るのみ。

辨曰、二祖斷臂の如き、一彈指頃に積功累徳せし困中又困なるべし、不爾則不可得、安心の打眠は不可穩、其餘一切諸佛諸祖孰か困し來て後打眠せざるありや、試辨看、學人參究の志氣を勸化し玉ふのみ。

辨曰、凡夫の目にては睡不得、毒蛇已に出て後睡るは教迹中の安眠なり、然も石頭庵裡圖睡快は佛眼法眼乃至燈籠眼を假借して、打眠するにはあらず、此處爐鞴亘天、鉗鎚上佛法慧の眼露柱燈籠の目を借て眠らんは、不亦病耶、且問佛法慧露柱燈籠の眼と、爾が娘生の目と異か同か、若又不假借是等眼則眠不得乎、いかな、勘破して看よ。

【那一寶】 飢來喫飯、未曾喫飯人は飢不得なり、曾て無上菩提の正命食を喫せし、我本行菩薩道是飢人なり、故に未曾喫飯の人は飢不得なりとの玉ふ、祖門中參學の志氣は是飢來喫飯來人の活計なり、奈何かせん、今時禪林無飢人、たまたま飢に似たるも多くは邪命食に飽飯し去るのみ。如三祖斷臂の、一彈指頃に積功累徳せし困中又困なるべし、不爾則不可得、安心の打眠は不可穩、其餘一切諸佛諸祖孰か困し來て後打眠せざるありや、試辨看、是學人參究の志氣を勸化し玉ふなり、困の頂額上とは全困なるべし、全困を全跳とするゆゑに全迷全悟の宗旨なるべし。

毒蛇已に出て後睡るは教迹中の安眠なり、淨土院裏の打眠は佛眼法眼燈籠眼を假借し、佛法と異類と有時に隨て間隙なきの打眠、最も難遇なることを知るべし、段借の妙語又是巨有の宗旨なるぞ、勿誤過、雖然如爐鞴亘天、鉗鎚上佛法慧等の眼を借て眠るは不亦病耶、若不借則眠不得ならん

か、更且問す、佛眼法眼と諸人娘生の眼とは是同か是別か、請、勘破して看よ。

先師古佛ちなみに臺州瑞巖寺より、臨安府淨慈寺の請におもむきて上堂にいはく、**半年喫飯坐鞞峰、鎖斷煙露千萬重、忽地一聲轟霹靂、帝鄉春色杏華紅。**佛代化儀の佛祖、その化みなこれ坐鞞峰喫飯なり、續佛慧命の參究、これ喫飯の活計見成なり、坐鞞峰の半年、これを喫飯といふ、鎖斷する煙雲いくかさなりといふことをしらず、一聲の霹靂たとひ忽地なりとも、杏華の春色くれないとなるのみなり、帝郷といふは、いまの赤赤條條なり、これらの恁麼は喫飯なり、鞞峰は瑞巖寺の峰の名なり

【聞解】代佛化儀……佛に代り化益の威儀を一切衆生に施す處、佛々祖々ともに坐鞞峯なり、獨坐大雄峯と同意、一切の相手を離る、本意なり○世間に隣らぬ處に坐して、無漏飯を喫す、これが代佛化儀なり、走して佛の慧命を繼ぎ斷やさぬ、これが法喜禪悅の喫飯現成なり○喫飯の活計が續佛慧命なり○しかれば、先師の半年間坐鞞峯、相手を取らぬ、無漏飯を喫する道理なり、其半年の間は、世間隣らず、雲烟の幾千重銷したる中に身を籠て凡聖の路やり斷へた、然れども、一向に消息無い死漢で無いから、時節至て忽地思ひ掛け無しに一聲の雷が轟けば帝郷春色がおとづれて杏花が紅に開たとなり○みなこれ坐鞞峯……已下よし、杏花の春色くれないなるのみなり○或説に動搖中古路に揚ぐる時はさても面白い景色かな、春色紅なる風景の面白さは食うて面白いと同心なり○赤心條々……一

福本代ノ下の字アリ
△辨、那、佛代ヲ代佛ニ作ル
△辨、す下割云、瑞巖寺住山爲體也又有時△那、割云、瑞巖寺住山爲體也
△辨、那、條下割云、萬里無寸艸地
△辨、那、り下割云、佛祖ノ家皆ナリ
△辨、名ヲ間ニ作ル

ずじ〜が空々赤々なり、この二十空門の開いた處が、帝郷心王のをわします場處なり、これらの恁麼上に云ふ段々の様子は喫飯了の一度抄飯に飽いた人のこと、虚腹では知れぬ故に。

【私記】とは、半年坐鞞峯これ喫飯なり、佛佛代代、化物儀則ある佛祖は、みなこれ喫飯なり「今日究理坐看の各各、これ喫飯の活計見成なり」いくかさなりの煙雲の諸法をも喫飯に坐斷するなり「帝郷杏華の紅なる、分明に喫飯なり」影室いはく、忽地一聲轟霹靂とは、只かくれなく、あらはなる詞なり、と「またいはく、帝郷春色杏華紅なりとあり、是等皆喫飯の道理なるべし、と」またいはく、坐斷の姿、まことに不可有際邊、一聲の霹靂たとひ忽地なりとも、杏華の春色紅なるのみなりとは、只今の喫飯の姿の、かくれなき道理を云なり、杏華の春色も、所詮喫飯の道理と云なり、と「またいはく、帝郷と云へば、只其所を示したるにかざるべからず、只盡法界なんと云心地なり、是を赤赤條條なりとは云なり、と」赤赤條條は、からさりにつけそへなきなり、帝郷といふも、華紅といふも、ただ喫飯のみなり、ゆるにこれらの恁麼は喫飯なり、と云」

【御抄】半年喫飯坐鞞峯坐斷煙雲千萬重なる姿を喫飯ととるべき也、坐斷とは坐禪の姿也、煙雲とはかならず煙雲許に不可限、いづれも此道理なるべし、忽地一聲轟霹靂とは、只かくれなくあらはなる詞也、轟とは群車の聲と釋なり、車のむらがりたる聲也、此喫飯の道理のかくれなく邊際なき道理が如此いはるゝ也、帝郷春色杏華紅也とあり、是等皆喫飯の道理なるべし、又坐鞞峯喫飯の姿を、續佛慧命の參究この喫飯と談なり。

喫飯の道理と云也。

帝都と云へば、只其所を示たるにかぎるべからず、只盡法界なむと云心地也、是を赤々條々也とは云なり、是を喫飯也とあり非可不審。

【辨註】 辨曰、如今淨慈の進山、忽地霹靂の轟が如く、動容の活計ありといへども帝郷の春色は杏花紅なるのみ、動容に古路を揚るなるべし。

【那一寶】 如今淨慈の進山、如、忽地霹靂轟轟雖有動容活計、帝郷の春色は杏花紅なるのみ、動容揚古路なるべし。

先師古佛ちなみに明州慶元府の瑞巖寺の佛殿にして示衆するにいはく、黄金妙相、著衣喫飯、因我禮備、早眠晏起、咦、談玄說妙太無端、切忌拈華、自熱瞞、たちまちに透擔來すべし、黄金妙相といふは、著衣喫飯なり。著衣喫飯は、黄金妙相なり、さらにたれ人の著衣喫飯すると摸索せざれ、たれ人の黄金妙相なるといふことなけれ、かくのごとくすればこの道著なり、因我禮備のしかあるなり、我既喫飯、備揖喫飯なり、切忌拈華のゆるにしかあるなり

【聞解】 先師古佛……これは瑞巖寺晋山の時、佛殿之法語なり○黄金……佛の黄金の妙相は外の處には無い、著衣喫飯の處なり、佛衣を著に佛飯を喫す、即如來の法身なり○因吾……吾と汝と不二、能所空寂なる故に○早眠……瑞巖に住持の様子は、早く眠り、おそく起ることもある、咦うれしいことじや、早眠晏起が海晏河清の消息なる故に、嬉しく悦ぶなり、かうして見れば、如來の四十九年の

△辨、那、下
割云、什麼ヲ
カ透擔來スル
ヤ透ハ通也兩
肩ニ通荷スル
ヲ云フ
△辨、金下の
字アリ
△辨、かくの
ごとくすれ
如是するニ作
ル△那、すれ
ヲするニ作ル

△辨、那、著下
割云、ニテア
ル
△辨、那、り下
割云、是ハ
△辨、那、揖下
割云家常

談玄說妙も太きつを取りしめ無いこと、花を拈せられたも、自ら熱瞞し、人を誑すと云ふものじや、それを忌きらふ、なせには、法本無法なる故に○たちまち……忽にこの法を聞くには五蘊の重擔を透り脱て來るがよい、走すると佛の黄金妙相は外には無い、今日佛衣著て佛飯を喫す、吾れ吾れなり、然るに誰れが著衣すると模するな、誰か黄金相なると人のことと思ふ、如是手前に返照するが黄金妙相の道著なり○因吾……能所一空生佛不二なる故に、しかあらしむるなり○我既に喫飯……すべて吾も汝も如是喫飯了底に非るなし、故に拈花等は化儀の法で飯了の處には入らぬ、故に忌む、かうした道理故にしかあらしめて皆飯了の人なり。

【私記】 とは、黄金妙相著衣喫飯なり」因我禮備は、そちこちなしの喫飯なり」ねておきて、さはりあることなし」太無端のゆるに談玄なり、說妙なり」拈華して熱瞞すること、ゆるさじとなり、熱瞞とは、せわすることなり、よそごとは、させまじとなり、太無端のひびくところなり」たちまちに透擔來とは、のこりなく、一肩に擔ひ來るなり」著衣喫飯黄金妙相は、自佗の論にあらざるを、黄金妙相といふは著衣喫飯なり、著衣喫飯は黄金妙相なり、乃至、たれ人の黄金妙相なるといふことなけれといへり」かくのごとくすればこの道著なり、とは、黄金妙相著衣喫飯なり、この道著とは、喫飯なり」因我禮備のしかあるなり」我既喫飯なり、備揖喫飯なり」切忌のゆるにしかあるなり」

【御抄】 著衣喫飯と云は、人の上の所作とこそ思ならはしたれ、黄金妙相は佛體とのみ思ひ付たり、しかるを今御釋に、黄金妙相と云は、著衣喫飯也とありしりぬ此著衣喫飯の當體、黄金の妙相也と云事を、此道理の上は、たれ人の著衣喫飯すと云道理まことに不可有、たれ人の黄金妙相なると云義、不可有なり、如此談すれば此道著也と云なり。

因我禮備とは、我によりてなむちを禮す、と云詞なり、此我汝非誰さる道理也、我既喫飯備揖喫飯也とは、是は喫飯が喫飯なる道理なるべし、只喫飯の道理が如此いはる、也、切忌拈花とは、著衣喫飯なる時は、著衣喫飯、○黄金妙相なるときは黄金妙相○なるべし、此の時は拈花と云沙汰は、しばらく切忌すべしと云也、切忌とてあしく成て、すつべきにあらず、只一法獨立なる姿か、切忌拈花といはるべき也。

【辨註】 辨曰、因我禮備は、續傳燈、一蒙菴元禪師上堂曰、擧玄沙見僧禮拜云、因我得禮備師頌曰、因我得禮備、莫放屁撒屎、帶累天下人、錯認自家底、此玄沙の意旨は拜我却禮備なり、何故ぞ、箇々別人なし、黄金の妙相を拜する、因我禮備なり、禮備則禮我なり、故云誰人の妙相、誰人の喫飯と云ふことなかれとなり。

辨曰、我既喫飯のことは傳燈十四龍潭崇信傳、天皇悟曰、汝擎茶來吾爲汝接、汝行飯來吾爲備受、備和南時吾便低首、何處不指示心要、師低頭良久、悟曰、見則直下看、擬思即差、師當下開解、此事ならんか。

【那一寶】此玄沙の意旨は拜我却禮備なり、何故の箇々別人なし、黄金の妙相を拜する因我禮備なり、禮備則禮我なり、故云、誰人の妙相誰人の喫飯と云ふことなかれとなり○因我禮備者續傳燈卷一、蒙庵元禪師上堂曰、擧玄沙見僧禮拜云、因我禮備、師頌曰、因我得禮備、莫放屁撒屎、帶累天下人、錯認自家底。

我既喫飯のことは傳燈十四龍潭崇信傳、天皇悟曰、汝擎茶來吾爲備接、汝行飯來吾爲備受、備和南時吾便低首、何處不指示心要、師低頭良久、悟曰、見則直下看、擬思即差、師當下開解、此事ならんか、切忌拈華とは家常茶飯外、不要拈華付屬なり。

福州長慶院圓智禪師大安和尚、上堂示衆云、大安在、瀉山三十來年、喫瀉山飯、厨瀉山屎、不學瀉山禪、只看一頭水牯牛、若落路入艸便牽出、若犯人苗稼即鞭撻、調伏既久、可憐生、受人言語、如今變作箇露地白牛、常在面前終日露迴迴地、趁亦不去也。あきらかにこの示衆を受持すべし、佛祖の會下に功夫なる三十來年は、喫飯なり、さらに雜用心あらず、喫飯の活計見成すれば、おのづから看一頭水牯牛の標格なり。

【聞解】 福州……喫瀉山飯、厨瀉山屎、一文も借りぬ、みななして仕舞ふ、だゞ只見一頭牛居た、其見様は入草六塵に走れば牽出し、或は空忍に入つて主人公の苗稼を犯せば鞭を加へて調へ、それ修行の年月久しくして可憐生はなりたれども、まだ人の言語を受けて染汚する處ある、其れが、今は變じて法身地の露地の至り、純一無漏の白牛となり、常に手なれて面前に在り、諸縁に繋れず露迴々と物の外にもぬけあらはれ、趁不去吾物になり切た○三十年來は……三十年來の功夫は喫飯なり、この通飯の活計現成はやはり水牯牛を見るや○性相二つ無いから喫飯する、相が、看牛の性の標準格様の目あてなり。

【私記】 とは 常在面前は、白牛の露迴迴なり、影室いはく、露迴迴は、あらはれたる心なり、と趁亦不去は、一頭しるべし、看中の消息ある、すなはち喫飯の活計見成するなり。

來年一本作二年來下同
△辨、那、同文
△辨、那、牛下
割云、長者論
云露地白牛方
明至無依
處一露地者即
佛地也爲佛
智無依處故
云露地白牛
者即法身也
迴迴清本作
同回
△辨、也下割
云、迴迴遠也
寧深遠、額△那
割云、字書曰、
迴、寧遠也寧
深遠也

【御抄】百丈の弟子に滄山、滄山の弟子に長慶、圓智禪師也、今の示衆詞に在滄山、三十來年喫滄山飯、厨瀉山屎、不學滄山禪、只看一頭水牯牛と、文是は只徒に喫飯して東司に居學すべき滄山の禪をも不學して、一頭の牛を看たる許とは不可心得、喫飯の姿已盡法界道理事舊了厨瀉山屎姿も、此道理なるべきかすでに滄山の下にて悟道の禪師たり何としてかいたづらに、不學滄山禪べき、滄山の身心法界を盡すうへは、大安彼に藏身する上は、不學滄山禪と云道理あるべし、又此一頭水牯牛と云も、只普通の牛とは不可心得、三世諸佛、諸代祖師なむと云程の詞也、何としてやらむ、祖門に常此一頭水牯牛と云詞を仕付たり、あしき詞にあらず、只我身心は佛祖に藏身する也と云程との心と可心得、若落路入草便牽出、若犯人苗稼即鞭撻調伏已下の詞は、此一頭水牯牛の上に、たよりある詞共を、如此書かれたれども、不可類凡見詞今所談の水牯牛の上の莊嚴なるべし、受人言語と文、人も盡十方界眞實人體の人なり、如今變作と云詞もあしき物かよく成を變作と云にはあらざるべし、喫飯の道理の千變萬化する姿を變とも可云歟、然而非善惡改轉變作也、箇露地の白牛とは、一乘を云也、今の水牯牛と白牛と只一物也、一體也、不可有差別、所詮滄山も大安も、喫飯姿も、一頭水牯牛も、白牛も只一體也、終日露迥々地趁亦不去也とは、露迥々はあらはれたる心なり、趁亦不去とは、白牛の道理如此なるべき也。

分明也、所詮三十年の姿喫飯なるべし、雜用心あらずとは又喫飯の外に交物なき所を如此云也。今の喫飯と看一頭水牯牛とのあはひが、親切なる道理を如此云也、水牯牛の姿は、喫飯、喫飯の理は水牯牛なるべし。

【辨註】辨曰、此公案見やすし、更に雜用心あらずとは是趙州語なり、然も此粥飯外無雜用心語、

古今禪人錯て粥飯の時を雜用心として、其外は純一辨道無雜用心と云ふ不爾、趙州意則一切時處無雜用心、故に粥飯の時は飯の外更無雜用心、乃至經行の時住止の時、坐禪の時看經の時、喫茶の時、寒暖人事應對談笑する時、其時時に在て更無有雜用心、是則辨道の第一義なり、以予觀之至裡許、舉唱佛法邊事、早是雜用心也。

【那一寶】無雜用心趙州語、此語錯て粥飯の時を雜用心なし、其外は純一と云ふ趙州の意、粥飯の時は粥飯の外更無雜用心なり、睡眠の時は睡眠の外無雜用心、寒暖人事其時々に在て無有雜用心、到這裡、舉唱佛法邊事、早是雜用心なり、長者論云、露地白牛方明、至無依處、露地者即佛地也、爲佛智、無依處、故云露地、白牛即法身也。

趙州眞際大師問新到僧曰、曾到此間否、僧曰、曾到、師曰、喫茶去、又問、一僧、曾到此間否、僧曰、不曾到、師曰、喫茶去、院主問師、爲甚曾到此間、也喫茶去、不曾到此間也喫茶去、師召院主、主應諾、師曰、喫茶去、いはゆる此間は、頂顛にあらず、鼻孔にあらず、趙州にあらず、此間を跳脱するゆるに、曾到此間なり、不曾到此間なり、這裏是甚麼處在、祇管道曾到不曾到なり、このゆるに先師いはく、誰在畫樓沽酒處、相邀來喫趙州茶、しかあれば佛祖の家常は、喫茶喫飯のみなり

【聞解】趙州……到此間とは這裡に到るやと云ふも同意、這裡は環中虛白の處なり、この公案の大意

△辨、に下割
云、跳脱其所
住故只是到
處此間ナリ
△辨、り下割
云、不可家
窟

△辨、那、なり
チなるニ作ル

は、到の偏位でも、不到の正位でも、喫茶去は離れぬとなり○此間は頂顛鼻孔にあらず、又趙州の處でもない此間と云ふも名のみ實は無い、此間は此間を跳出して一切處に方處が無い、故に今時に向ては會到此間なり、久遠に進めば不會到此間なり、有無ならざる物ゆゑによく、有無なるなり○這裏は甚麼所在ぞ、佛の所在か衆主の所在乎、祇管ひたすらに到の不到の云ふぞと云ふ底意は、甚麼と云ふが取り得なり、この這裏は會て到と云つて入らるゝもので無く、不會到と云て離れらるゝものでも無いと云ふ意なり、このゆゑに(注意、已下一行計り落稿の様に思はる、讀者乞ふ是れを諒せよ)。正法眼藏家常卷聞解終

【私記】とは 此間は頂顛にあらず等は、此間の不宿死屍なり、此間を跳脱するとは、此間の不受塵なり、なにの所在はみなこれ者裏なるがゆゑに、會到不會到と祇管道するなり、誰在等は、參本いはく、類聚圓相門云、法昌遇和、黃龍偈言、頭戴花巾、離少室、手携席帽、出長安、鸞峰峰下重相見、鼻孔元來總一船、云、胡蘆棚上掛冬瓜、麥浪堆中釣得鰕、誰在○州茶、所謂相應法、若非其地、則無其常乎、といはゆるこのところをうればこの行履したがひて現成公案するなり、畫樓沽酒處、すなはちこれ趙州の茶堂裏なり、喫茶喫飯の家常なることしるべし

【御抄】 趙州の此間の詞只趙州の被坐一寺許と不可心得、法界の内外此間の道理なるべし、ゆへに會到と云も、不會到と云も、共に此間上の理なるべし、又喫茶去の詞是又只普通の喫茶の理と許不可心得、此喫茶可盡法界を今趙州以喫茶去の道理を被述なり、ゆへに會到不會到共に喫飯去なるべし、故に二僧の詞は、かはりたれども、師の詞は只喫茶去也、しりぬ又喫茶去の詞にて、法の理を被示と云事を、又院主が不審のやう文に見たり、院主が同師爲甚會到此間也の爲甚の詞に聞たり、是又子細あるべし、會到も不會到も、喫茶也も皆爲甚麼の道理なるべし、此間は又此間なるべし、ゆへに頂顛にあらず鼻

孔趙州にあらずといはるゝ也、此等の道理を此間を跳脱するとは云なり、會到此間も、不會到此間も、跳脱の上の道理なるべし。

遮裏是甚麼處在は、古き詞也、このうちはこれいかなる處在と云詞、例の不審にあらずこのうちの道理いかなる處在にてもあるべき也、いはゆる會到不會到なるべし、又此誰在畫樓とは、大國にある樓事歟、沽酒處とある詞ぞ、不審なる、いかなる子細があらむ、をばつかなし、只所詮いかなる物も、趙州の茶を喫せざる物なしと云心なるべし、一切皆佛性ならずと云物なし、なむと云程の詞と可心得也。

【辨註】 辨曰、多在畫樓沽酒地、無喫趙州茶、底耳、可悲哉、世俗の沽酒の畫樓にはあらず、或は僧家名聞利養或は聲聞等の經論師、無明の酒に酩酊する底を云ふのみ。

【那一寶】 此間は不在一切處として一切處は此間なるを跳脱と云ふ、故に會到も此間なり、不會到も此間なり、這裡會到不會到の論に非ず、故に先師云、此頌意は在畫樓沽酒處、喫趙州茶、底の無礙自在の行履、即曹山の不斷聲色隨隨の謂なり、不可看過。

【御聽書抄】 佛祖の屋裏には、茶飯これ家常といふ、茶飯ならぬ家常多き内を、まづ一とをりいだしてあるにはあらず、そのゆへはこの茶飯々食の見をば超越すべし、すでに佛祖意句は、佛祖家常の茶飯と云ゆへに、凡家常と云に、佛家には實相真如ととくをさしをきて茶飯とつかふ、何事を超越すべき道理あるぞや、人間には實相真如なし、佛祖の屋裡には、我等がきく處の法性真如を茶飯とや云らむ、天上に又何とかとくらむ、難知人間界の内すら猶處處々に隨て詞かはり、貴賤について有差別、また用る器しなくあり、佛教は應機ととくといふ、家常種々なるべし、いかさまにも先今の茶飯は

我が如所見なべからすと、ひとのけくてをくべき也、これ用心なるべし、始證又此道理に落居すべきなり、佛家にあらむ、調度ふるまい、皆以家常といひつべし、必茶飯に不可限と思も、いはれなきにあらねども、家常はたゞ茶飯なるべし、祖師多この事をあく、其上佛法には一同一の法と談じて、實なれば實、妄なれば妄といふ、解脱の法はもの數をつくして、あれこれをまじふべきにあらず、喫茶喫飯といひて、のこる所なし、ゆへに家常の多かる中の其一とはとるべからず、只家常は茶飯と心得に不足ゆめゆめなし、この家常と云詞は如是といふ詞に似たり、相性體力作因縁も、一一爾如是あり、相の如是、性の如是と不各別家常もしかなるべし▲楷和尚段○以手掩耳而去、佛祖意句如家常茶飯離此之餘還有爲人言句也無と云ば、四教の詞、各々ならざれども、談ずるところ不同也、佛を習に四つの姿あり、上を習にも四種あり、水に四見の不同あり、これを離れて爲人の言句ありやといふ、茶飯の詞の世間にありとも又大道に通ずる道有としるべし、佛祖の意句といふゆへに、佛祖の意句に、何事かのこるべき、かけたる所不可有、已茶飯を佛祖の意句と云ふ、非可疑なり、如茶飯とある如の字不審也、この家常茶飯の義は、不及同異論事歟、但同異の詞とは心得まじ、如も茶飯の如なるべし、欲知佛性義のとき、欲知をやがて佛性と心得しが如し▲寰中天子勅假禹湯堯舜也無といふ、これは寰中の天子は劣にて、むかしの禹湯堯舜をよかりし法なればかるにてはなし、無惡は天子の上にごそあるときにいづれの天子の法もかはらざるべきなり、離此之餘爲人の言句あるべからざるなり、此の假と云詞、さとりをかるかと云ふ程の詞なり、かるといへばとて、可假物のあるにてはなし、天子のみちはむかし 禹湯堯舜の道をごそ今の天子もをこなへ、天子の道は、いづれもかはらねばからずとも、さだめがたし▲拈拂子掩口といふ、掩口と云は、爲人の言句をかるべしといはず、

かるまじといはず、この理をとく時掩口なり、かく云ときは、あしく心得る輩をしひたたけて唯云べき事のなきを掩口の理と思へり、不可然なり、この口此拂子共に佛祖の言句をあらはるゝなり▲汝發意來時早有三十棒分といふ、來時發意也、其時より佛法をなはりたりと云也、來時をさきにをき、開悟をのちに置くべきにあらず、前後にかゝはらざるゆへに、たとへば初發心時辨成正覺の心なり、棒をあたへぬる上は邪なしと可心得▲到不疑之地耶といふ、以開悟時節不疑の地といふ、不疑の地の詞いでくる時、以手掩耳、此耳此手また何程なるべしと可明歟▲大陽以手掩耳而去といふ、拈拂子掩師口と云程の分なり▲家常の庵茶淡飯は、佛意祖句なりといふ、此庵淡の詞は、善惡を云はむとはあらず、たゞ茶飯と談ずる上の詞にしばらく置庵談之字者也▲佛祖は茶飯をつくるといふ、これは烈焰亘天には佛法をととき、亘天烈焰には法佛をとくと云程の義なり、佛家には茶飯を、言句といひつるゆへに▲茶飯佛祖保任すといふ、此義同上、佛祖は茶飯をつくる、茶飯は又佛祖を保任するなり▲茶飯ちからをからず、佛祖力をつむやさいるのみなりといふ、他力をかるぞ、ついやすとぞといふべからず、佛法をととき、佛法をとくゆへについやすと云ふ、此時ついやすと云面目なき也、家常茶飯をついやさざる義にてはあるべき▲問頭の頂顛を參跳すべし、跳得也、跳不得也と試參看すべしと云は、問と覺ゆる所が、いまの頂顛なる事を、問頭とは仕也▲南嶽山無際大師段、無寶貝といふ、是は世間の寶なき也、貝と云は、莊嚴美麗の螺鈿なむどの事也、寶石頭草菴にはあるまじき調度也、但此石頭の草菴は、世間の草にてつくる、民戸等には難類、佛祖の道場なるゆへに草と云につきて無寶貝と云許也▲飯了從容圖睡快といふ、此飯了は、徒に飯を食し終にてはあるべからず、飯了は參飯佛祖意句也と云にて可心得、此飯了を飯先にも現成す、飯中飯後にも現成すといふ、飯の現成

佛へ道歎

は佛祖の現成なり、圖睡快と云詞は、さきに到不疑之地なむと云同詞なり、睡快と云も此睡の字が、
 大切なるにてはなし、飯了の上にく、ろよくいはむとての睡なり、また睡に付て從容の詞もあり、飯
 了は佛祖の言句なるゆへに、總世間の人の食飯了て、いたづらにねぶる様には、努々不可心得、佛道
 の喫飯睡快なるべし▲喫飯ありと錯認するといふ、茶飯を飯了ぞとは云へども、いまだ喫の字きこ
 へずこの所に加は、喫の字なり、喫飯ありと錯認とはいども、喫も錯も佛法の上なるべし、飯了の屋
 裏にとあるゆへに、屋裏佛祖なり、この錯認はすつべき、あやまりにはあらず▲先師古佛示衆段、移
 過天童喫飯、獨坐大雄峯、大衆不得動著といふ、大衆あらむ大雄峯にては獨坐と難云、但百丈の坐は
 大衆をのこさず、坐者漢と云心地也○一佛成佛觀見法界、草木國土悉皆成佛と云ふ、獨坐大衆詞に可
 心得合、釋迦一佛出世大衆不得動著なり▲鉢盂を移天童に喫飯する事、奇特事と云事已分明也、但此
 鉢盂は淨慈寺の鉢歎、天童の鉢歎、和尚の鉢歎、如何うつすと云も、何様に移哉吾亦如是なり▲飯了
 知飯喫飯了飽等は、喫飯すれば飽なり、あけば又知飯なり、世間には必喫をさきに置て、飽を後に
 す、佛家には喫必不置前なり、教行證三と不心得、ゆへに過去現在未來不置三世ゆへに▲木頭黑漆頑
 石といふ、四河入海無復本名、四姓出家同稱釋子といふが如し、鉢も木石鐵瓦の四種と思事なかれ、只
 佛鉢也、木頭黑漆頑石にあらず、袈裟をも佛衣とこそ習へ、布絹綿等の論には非也、小乘にいふにを
 なじかるべからず▲無底也、無鼻孔也といふ、一鉢無底と云事あり、常に此義をいふには、乞食する
 に不得とき、鉢底無物と云事あり、今は不然、鉢盂の無底は、功德無底也、かぎりなきゆへに、無鼻
 孔と云は、鉢の姿たなしと云也▲一口吞虚空、虚空合掌受と云、此鉢の姿也、やがて無底の詞ぞ、
 一口に吞虚空たる姿にてはあるべき▲先師古佛淨土院方丈示衆段、 爐輔亘天困と云は、ねぶりを

鉢へ鉢歎

もよをす、時刻朦々たる也、飢來喫飯各別に聞ゆ、しかには非ず、飢と云も喫とも云も、只飯の上の
 詞となる、そのゆへをとくに、困來打眠といふ、困は眠なり、眠は困也と心得合するとき、又爐輔亘天と
 いふ、是はたゝらなり、今たゝらと云詞は、何に仰せていてくるぞと覺ゆ、但たゝらは佛鉢よりはじ
 めて、何の姿も出す、ものなるゆへにかくとく也、但又爐輔がありて、ことものをいだすとは、不可
 云、亘天ととるゆへに、亘天ならむとは、いづれのひま有てか、別にいでくる物あるべき、困と云も、
 困中又困と云ふ、これ迷中又迷程の困なり、きらふべき困にあらず、困の頂頓上より、全跳しきたる
 といふ、渾身の活計といふ、又この渾身は、困をさして渾身とは云也、打眠は佛眼慧眼祖眼露柱燈籠
 といふ、この詞を假借とは云なり▲喫飯せざる人の、飢不得也といふ、喫を飯と仕ゆへに、飢一、
 家常と云也、都喫せざる人は、又飢と云事も不可有▲先師古佛淨慈寺上堂段、 半年喫飯住等時
 刻也是 此喫飯はいたづらに、我等が飢をのぞく喫飯にてはなし、續佛慧命參究の喫飯なり、佛祖の意句
 半年歎 といはれし是なり▲坐○峯と云は○峯と云し處に、坐禪せし事なり、坐斷煙雲千萬重とは、僧の坐禪
 のかたちを、思よせてとく也、煙雲千萬重を坐斷するなり▲忽地一聲轟霹靂といふ、此の忽地は別
 にさる地のあるにはあらず、一聲轟霹靂がやがて忽地といはる、一聲も又何の聲といはず、半年喫飯
 ○峯、坐斷煙雲千萬重か、ひやく聲を一聲と仕也▲帝郷といふ別に宮城をいひいだすべき要なし、赤
 赤條々也といへば、たゞ盡界也と可心得▲杏華紅と、この杏華又非別れば、一聲の轟霹靂なるべし、杏
 花とあらはるゝとも非別也▲これらの恁麼は、喫飯也、といふ、一聲轟霹靂、帝郷春色杏華紅也とな
 むと云詞を恁麼とさす也▲先師古佛示衆黃金妙相段、 拈華自熱瞞黃金の妙相は佛のすがたといふべ
 からず、黃金の妙相をぞ佛とも云べき▲この段著衣喫飯は無人也、たれ人の黃金妙相とする事なけれ

といふ、喫飯も備揖喫飯也といふ、飯が飯を揖する也無別人▲切忌拈花といふ、此切忌拈花の時尅に成ぬれば、拈も誰か拈ずると云事なし、拈華みづからくらすといふ、此心地也、黄金妙相を切忌す、切忌は自ら熱瞞也▲福州長慶段、喫亦不去也、喫瀉山飯といふ、此詞許をとらむとて被引哉也○看一頭水牯牛と云、瀉山に住する本意なり、此詞必圓智禪師の身上とのみ不可取、佛法をとく姿如此この水牯牛はやがて、大安和尚也、露地は樹下なむと云ふ同事也▲白牛といふ、法華大乘の大白牛車の心也、ゆへに受人言語變作すと云也▲趁亦不去也といふ、をばむにはさるべきにてこそ、世間の道理にてあれども、いまの道理如此也、不學禪と云にて可心得也▲實際大師の段、師曰喫茶去、此間と云は非頂頓、非鼻孔といふ、其處を置て曾到不曾到といはば脱落の義なるべからず、ゆへに曾到も、不曾到も喫趙州茶也、喫茶去にあらざるなし▲畫樓沽酒處といふ、あしき所なれば、佛家にあらず、この所を邀來ぞ、趙州の茶を喫すべきならすなむともきこゆ、又やがて畫樓沽酒の處を、接ともきこゆるなり、趙州の茶を喫する程の所をば、畫樓沽酒の處といふべからず、いかなる所にてても喫すべし。家常終。

正法眼藏家常

于時寬元元年癸卯十二月十七日在越宇禪師峰下示衆

却退一字參

正法眼藏家常 非去來今參一却退 十方卷云、家常者尋常也、日本國俗言云庸常、

△辨、那、子、ヲ
爾字ニ作ル

今亦從之謂佛祖家常、前後際斷、故一時無時、予之參目、至道無難揀擇無、中秋不住晚秋孤、身心脱落付何日、古聖貴時實不愚、咄、倚坐單前報益孟。

●大凡佛祖屋裡者茶飯是家常也、此茶飯儀久流傳而今現成也、是故佛祖茶飯活計來也、六根有食眼眠是、若與睡蛇茶飯非、佛祖鉢鉤持日夜、龍頭蛇尾是全機全機是、家常圓相透玄微、是故七尺單前有粥有飯、是即安眠聲色裡消息、則古人示休糧方法、道二時上堂不咬破一米粒、久流傳今現成、以此。

●大陽山楷和尚問投子曰、佛祖意句、如家常茶飯、離此之餘、還有爲人言句也無、投子曰、汝道寰中天子敕、還假禹湯堯舜也無、大陽擬開口、投子拈拂子掩師口曰、汝發意來時、早有三十棒分也、大陽於此開悟、禮拜便行、投子曰且來闍黎、大陽竟不回頭、投子曰、子到不疑之地耶、大陽以手掩耳而去、然明應保任、佛祖意句者、佛祖家常茶飯也、家常、蠶茶淡飯者、佛祖意句也、佛祖作茶飯、茶飯保任佛祖而不假此外、茶飯力、不費此內、佛祖力也、不假不費、家常不犯底、先行不到末後太過、大火聚自受用三昧也。

●應功夫參學還假堯舜禹湯也無見示也、向道寰中天子敕、全無的位、爲無定的、於是乎知、普天下率土濱、空同不假歸寰中。

●離此之餘、還有爲人言句也無、須參跳此問頭、頂頓、應試參看跳得也、跳不得也、又手當胸還不假、家常無迹趙州茶、大陽照處非今古、跳不試參是作家、會麼、

●南嶽山石頭庵無際大師曰、吾結草庵無寶具、飯了從容圖睡快、道來道去本更有、

道來去三字。飯了者，參飽古本作誤佛祖意也。未飯未飽參也。而此飯了從容道理，則飯先現成，飯中現成，飯後現成，錯認飯了，屋裡有喫飯，四五升參學也。一本四五升者半轉身乎，飯了屋裡盈餘全機乎，若未喫飯者，誰稱飯了底，而歸飯了去則喫了未喫，共切佛祖家常，此之謂錯認。

●先師古佛示衆曰：記得僧問百丈：如何是奇特事，百丈曰：獨坐大雄峯，大衆不得動著。且教坐殺者漢，今日忽有人問孛上座：如何是奇特事，只向它道有甚麼奇特事，畢竟如何。淨慈盃孟，移過天童喫飯，佛祖家常。應永寫本必有奇特事，謂獨坐大雄峯也，今逢教坐殺者漢，猶是奇特事也，更有奇特於彼，謂淨慈盃孟移過天童喫飯也，奇特事者，條條面面皆喫飯也，然獨坐大雄峯，即是喫飯也，盃孟喫飯用，喫飯用盃孟也是，故淨慈盃孟也，天童喫飯也，有飽了知飯，有喫飯了飽，有知了飽飯，有飽了更喫飯，且作麼生是盃孟，謂非祇是木頭非黑如漆，頑石耶，鐵漢那無鼻孔也，一口吞虛空，虛空合掌受也。彼此空盃空寂。

●先師古佛因臺州瑞巖淨土禪院，方丈示衆曰：飢來喫飯困來打眠，爐鑪巨天。引通本更唯倒退三千謂飢來者喫飯來人活計也，未曾喫飯人者，飢不得也，然應知飢一家常我者飯了人，應決定焉，困來可困中又困，困頂頓上全跳來焉，是故渾身活計見都撥轉渾身而今也打眠假借佛眼，法眼，慧眼，祖眼，露柱燈籠眼，而打眠也。是即亘天爐鑪喫飯人豈它乎，日時假借正法眼睛打眠者是。

●先師古佛因明州慶元府瑞巖寺，佛殿示衆曰：黃金妙相，著衣喫飯，因我禮爾，早眠宴起，咳，談玄說妙太無端，切忌拈華自熱瞞，應忽透擔來，黃金妙相者，著衣喫飯，著衣喫飯，則黃金妙相也，更不摸索誰人著衣喫飯，莫謂誰人黃金妙相，如是則此道著，因我禮爾，然也，我既通本作喫飯，爾揖喫飯，切忌拈華，故然也。再按我飢亦通，切忌者太無端親切，亦如是爾。

●福州長慶院圓智禪師大安和尚上堂，示衆云：大安在滬山三十年來，喫滬山飯，厨滬山屎，不學滬山禪，只看一頭水牯牛，若落路入草便牽出，若犯人苗稼，即鞭撻，調伏既久，可憐生受人言語，如今變作箇露地白牛，常在面前，終日露迴迴地，趁亦不去也，應明受持此示衆，功夫佛祖會下三十年來，則喫飯也，不更有雜用心，喫飯活計見成，則自看一頭水牯牛，標格也。如是看牛真喫飯，大安行李不參禪，喫滬山飯，滬山屎，其氣熏來第一天。

●趙州真際大師問新到僧曰：會到此間否，僧曰：會到此間否，師曰：喫茶去，院主問師：爲甚會到此間也，喫茶去，不會到此間否，僧曰：不會到，師曰：喫茶去。

會到此間也。喫茶去。師召院主。主應諾。師曰。喫茶去。謂此間非頂顛。非鼻孔。非趙州。超脫此間故。會到此間。不會到此間也。這裡是甚麼處在。祇管道會到不會到也。是故先師云。誰在畫樓沽酒處。相邀來喫趙州茶。然佛祖家常者。喫茶喫飯爾也。本超脫親切。親切脫酒。甚麼處在爾。類聚圓相門云。法昌遇和黃龍。偈言頭戴華巾。離少室。手攜席帽出長安。鷲峯峯下重相見。鼻孔元來總一般云。胡蘆棚上掛冬瓜。麥浪堆中釣得鰕。誰在州茶。謂相應法。畫樓沽酒者。黃鶴樓故事也。往往所知。若非其地。則無其家常乎。

●正法眼藏家常 爾時寬元元年癸卯十二月十七日在越宇禪師峯下示衆 同二年辰甲正月書寫之侍司寮 懷井己亥寫本無之

明和七年庚寅九月朔旦寓常州新治郡南之莊土浦聚落中城宿醫王山東光禪梵刹上層明窻下非去來今參了畢以用回向 護法龍天善神時中冥助深恩云 喫茶本光盥焚畔睇參書

家常參註附錄

薦福雲語云亘古亘今家常。自爲道透古透今亦家常。親順面孔也。光陰不替動著早朝。喫粥午時飯。喫飯著衣斯日用斯日用者。佛祖家常。喫飯著衣。行佛威儀。去時不染汚。更無餘事敢應求文字。是非今略之可也。但念水草餘無所知此之謂宗門家常。異類阿誰向火裡望水相應法。其唯如是翻身自在。三昧時錯果然點則水火還親切。慕地難論親與警。家常無迹。因箇什麼。論親與警。親也。沒天去。踈也。盡地來。客孟弓。景現角韻。轉花梅。作麼生。是怎麼。消息道道。○畫樓沽酒

涉典錄

第四十三家常卷 ▲芙蓉問投子。續傳燈錄卷第十芙蓉道楷禪師傳出 ▲石頭無實。貝傳燈卷三十石頭和尚草庵歌出 ▲半年喫飯坐鞦韆峰。淨祖臺州瑞巖錄出 ▲黃金妙相。淨祖明州瑞巖錄出 ▲相邀來喫趙州茶。淨祖錄卷下冬夜小參出。

涉典續貂

園家常 家常茶飯△此語。已出盛唐。也又宋史。范仲淹傳云。公常曰。常調官好做。家常好做○太陽問投子△續傳燈十。芙蓉章。會元十四。投子義青章○寰中天子△穀梁傳。隱公元年云。寰內諸侯。非有天之命。不得出會諸侯。史記憑唐傳。有寰內字。說文云。天子封畿也。正字通云。宮周垣也○禹湯△史記本紀云。夏后氏禹。姒姓或云名文命。鯀之子。顓頊之孫也。舜舉之。在位二十七年。壽一百。子孫保天下。四百七十八年△殷王。成湯。子姓。名履。其先曰契。帝嚳之子也。去四面網。除七年旱。子孫保天下。六百二十九年○石頭曰吾△乃草庵歌。破題句也○先師曰記得△淨祖示衆。便天童入院拈則○百丈奇特△傳燈師章。載之○大雄峰△一統志四十九云。百丈山在奉新縣西。二百四十里。其勢出群山。故名大雄峰。唐宣宗有詩云。日月每從肩上海。山河長向掌中看○條々面々喫飯△楞嚴八云。如是世界。十二類生。依四食住。所謂段食。觸食。思食。識食。是故佛說。一切衆生

皆依食住。本綱云、蜻蟪食草根、蠶食桑葉、天牛食髮、螻食木根、衣魚食紙、蟬食風露、天漿食糞、啞臘食屍、蛇食蛙、蛙食蛤、蛤食蛇、蚯蚓食土、木頭△梵網經、故違聖禁戒中字、會元十七、山谷問本權善云、還知露柱生兒麼、權曰是男是女、山谷擬議、權打之、晦堂曰、不得無禮、權曰、這木頭不打、更待何時、○頑石△中吳紀聞云、虎丘山無人座傍、有點頭石、十道四蕃志云、道生法師、講經於此、無信者、乃聚頑石、與談至理、頑石皆點頭、一統志八、蘇州府、有虎丘山、有白樂天蘇東坡詩、又有虎丘寺、晉司徒王珣、與弟珉捨宅為寺、傍有點頭石、○無底△列子湯問云、勃海之東、有大壑、實惟無底之谷、趙州錄十二時、頌云、棍無口袴無底、○先師曰飢來△淨祖、住瑞巖踞方丈語云、二亘天下、有莫有透鉗鎚底麼、咄、倒退三千、之十三字、傳燈南岳懶瓚歌云、饑來喫飯、困來乃眠、愚人笑我、智者知焉、○先師曰、半年△淨祖、退瑞巖偈、○鞠峰△臺州府、瑞巖寺、別峰、○先師曰、黃金△淨祖、住明州瑞巖佛殿語、安樂品云、諸佛身金色、百福相莊嚴、○大安上堂△乃後大滙也、已出于行持篇也、○帝鄉△莊子天地云、乘彼白雲、至于帝鄉、陳江總詩云、三春別帝鄉、五月度羊腸、○因我禮備△續傳燈一、蒙菴上堂舉玄沙見僧禮拜話云、因我禮備、自頌云、因我禮備、爾莫放屁撒尿、帶累天下人、錯認自家底、○我飯備揖△傳燈龍潭章云、汝行飯來、吾為爾受、爾和南時、吾為爾低頭、○滙山上堂△出于行持篇、○犯人苗稼△佛遺教經字、天下人知焉、○露地白牛△字出于華嚴、法華、合論云露地白牛、方明、至無依處、露地即佛地、白牛即法身、○趙州問新到△趙州

錄下、會元師章、○畫樓沽酒△本、法昌遇偈語、輿地志云、黃鶴樓在縣界、述異記云、荀瓊憩江夏黃鶴樓上、望西南有物、翩躚而降、自白雲間、乃駕鶴之賓也、賓主歡對辭去、跨鶴騰空、眇然湮滅、唐閻伯里、黃鶴樓記云、州城西南隅、有黃鶴樓、費禕登仙、嘗駕黃鶴、返憩于此、列仙傳補云、昔有一叟、飲酒樓者、三年不缺、一日、樓主不促債、一日叟以橘皮、畫黃鶴於樓壁、後有飲于此樓者、則畫鶴飛鳴而舞、人聞之爭飲于此、數日得金、過于三年之酒債、一日叟來、駕鶴而去、黃鶴樓名、始于此、今畫樓沽酒者、有所以哉、○義雲著語云、亘古亘今、○又頌云、著衣喫飯斯日月、更無餘事敢應求、阿誰向火裏望水、慕地難論親與讐、家常畢

正法眼藏家常註解畢

正法眼藏龍吟

龍吟

【義雲頌著】 第五十一龍吟 是什麼章句、

吟曲不曾落五音、花開枯木帶春心、宮商角羽同和處、此引調高誰敢侵、

【面山述贊】 第五十一龍吟 述云、三十二相是枯木、六十四音是龍吟、了之回光、

則六凡四聖無分外底法、贊言 一代時教、枯木龍吟、鴉鳴雀噪、總是梵音、機輪撥轉上中下、言語道斷古來今、

【開解】 正法眼藏龍吟卷開解 佛の境界でいへば、三十二相八十瑞好が枯木なり、衆生では五蘊の境界が枯木なり、今日が直に幻化空身なる故に、佛の相好も衆生も四大もみな枯木にして身心脱蘊なり、龍吟とは、如來に在ては六十四音、衆生の分上では、五處三内より出る、言談戲笑、みな龍吟なり、この道理を返照して明了する時は、六凡四聖不爲分外皆枯木龍吟なり○龍は萌也、ささすと訓ず、吟は呻也のぶると訓ず、枯木龍吟とは、枯木が春になつて芽を出すこと、世間では龍吟といへば、死に馬が尻をひりたと云ふことの様に見えるは、笑止なことなり。

【那一寶】 龍吟 那一寶曰、空劫不始、來際不終、枯木裡歌鬪體裡舞、不知何章句、奇々妙々。

舒州投子山慈濟大師、因僧問、枯木裏還有龍吟也無、師曰、我道鬪體裏有、

△辨、那、道
下翻云、二乘
等

師子吼。枯木死灰の談は、もとより外道の所教なり、しかあれども外道のいふところの枯木と、佛祖のいふところの枯木と、はるかにことなるべし、外道は枯木を談ずといへども、枯木をしらず、いはんや龍吟をきかんや、外道は枯木は朽木ならんとおもへり、不可逢春と學せり、佛祖道の枯木は海枯の參學なり、海枯は木枯なり、木枯は逢春なり、木の不動著は枯なり

【聞解】 投子山……これは投子山の開祖大同禪師なり、今此の僧の問は大死底の枯木裏に還て龍吟し活すること有りやと、これは好い問なり、枯木計りでは二乗の空無灰心滅智になる、龍吟計りでは凡夫の妄有になるから、兩方を透脱し兩方を捨てぬ、これで一人前全い境界になる、故に投子の答話に○罽𑖅のこの答話は問は在答處、答在問處、問答一枚の答なり○枯木死灰……出莊子、枯木朽木なりと……二乗は灰心滅智して一向に朽木なりと思ふ、春に逢ひ芽を出すことは無いと思ふなり、涅槃の道理槃經に二乗外道とある○海枯枯て不見底究盡無し、枯木が枯木ざりて盡きぬ、露柱懐胎して斷滅なあり、其の海枯といへば一滴も無いやうに思ふから、走思はせぬ爲に木が枯れても春に逢へば芽を出す斷滅ならざるなり、こゝは佛祖の枯木逢春なりと字を入れて見る○木の不動著……たとへば、桃は桃の儘で不動、春なれば花開き、秋は果が成る、これを不動して有りの儘がやはり枯木なり、これは生は不生の生と云ふ道理、木のまゝが不生の生なり、五蘊集る境界が全體空身で何も無い、佛の三十二相は一相々々を集めて三十二相なり、一相々々はなせば何も無い、全體空身故に、木の不動著枯なりと云ふ。

【私記】 とは 影室いはく、所詮此枯木、今は以佛祖其姿とすべし、盡界枯木なるべし、盡界龍吟なるべし、枯木與龍吟不可有差別一物なり、一體なりと、可心得なりと、參本いはく、海枯參學、謂佛祖海、一面未見、徹底無涯岸、故道席上高瀑流、木枯亦爾、と、佛祖道の枯木は、海枯なり、木枯なり、山河大地日月星辰枯ならざることなし、春夏秋冬の生成するこれ枯なるがゆゑに逢春なり、桃李梅柳みな枯なるがゆゑに不動著といふ、佛祖道の道は言なり

【御抄】 凡祖門に所談の法門を人の心得ぬ事尤有其謂、ゆへはいかむ先凡夫の舊見と云物を不失して談之、佛祖は舊見と云事をはよせてすして、一向法の方より談之、ゆへに直指單傳と稱す、此凡見の執をはなれずして佛祖の詞を我情に引なして、心得むとすれば方なる穴に圓木を入むするに不異なり、我今佛祖の方より枯木と談するはいかなる物、何程の分と云事を能々可心得事也、迷と云も、悟と云も善も悪も邪も正も生死去來動搖進止、一物として佛祖所談の詞心と打任たる談とひとしかる可らざるなり●今の枯木云詞、御釋に聞たり、二乗外道等は、枯木と云へばかれたる木、今はいたづらなる物、はなもさくべからず、ゆへに不可逢春と心得たり、今祖門所談の枯木は不可有、奥に委細可被釋之、有佛性やと云詞と枯木裏有龍吟やと云詞と只同詞也、聊不可違與衆生有佛性やと云詞は、きゝなれたるやうに覺ゆ、枯木裏有龍吟やと云へば、驚耳やうに覺ゆ、是は舊見の不脱落によりてなり、我道罽𑖅裏有獅子吼やと云詞は、清淨本然ならむに、如何忽生山河大地と云し詞に、只同詞を以て答、又いかなるが佛といひし詞にいかなるが佛と云しに聊も不違なり、只所詮此道理の所落居は、枯木裏に枯木あり、罽𑖅裏に罽𑖅ありと云程の理なり、又狗子有佛性やと問程の詞と、枯木裏龍吟ありやと云詞も同心なるべし、先今の僧問の枯木裏、還有龍吟也無と云詞をかゝるいたづらなる物の中に、有龍

吟やと問したやうに心得よりして、大に相違し不當也、今の所談の様は此枯木與龍吟、全非別體、此枯木の當體を則龍吟と云也、其に師曰我道獨體裏有獅子吼と被答、是も答話にあらず、我とは大師の事歟、此獨體と獅子吼と、又と又只前に云つる枯木裏と龍吟と程の詞だけなるべし、所詮僧與師二度法の理をのべられたる也、更非問答詞也、所詮此枯木、今は以佛祖其姿とすべし、盡界枯木なるべし、盡界龍吟なるべし枯木與龍吟、不可有差別、一物也一體也と可心得也、然者今の體獨獅子吼も、又是様に可心得なり、ゆへに二たび法の道理をあらはさるゝなりと云也、全枯木なる理を以て今は不可逢春とは可談也、外道は枯木はかれぬる、不要の物とて嫌て、不可逢春といふ、佛祖は盡十方界全枯木なる道理の方より、不可逢春と談ず、故に詞をなじけれども、其理はるかに異也と云は是なるべし。如文、海枯の參學也とは、世間に海のかると云事、總不可有歟、海枯波浪打天なむと云しやうに全海の道理を以て海枯とは可談也、此木の不動著と云は、木を置てかゝるとは不談、やがて此木の當體を枯と談するゆへに、木の不動著は枯也とは云なり。

【辨註】 辨曰、木の不動著とは、松は松、柏は柏にして不_三變動_二を云ふ。

【那一寶】 木の不動著とは、松は松、柏は柏にして不_三變動_二を云ふ、枯椿非_レ枯、椿は疎山の語法身與_三法身向上事の答なり。

いまの山木海木空木等、これ枯木なり、萌芽も枯木龍吟なり百千萬圍とあるも、枯木の兒孫なり、枯の相性體力は、佛祖道の枯椿なり、非枯椿なり、山谷木あり、田里木あり、山谷木、よのなかに松柏と稱す、田里木、よのなかに人天と稱す、依根葉分布、これを佛祖と稱す、本末須歸宗、すなはち參學なりかくのごとくなる枯木の長法身なり、枯木の短法身なり、もし枯木にあらずれば、いまだ龍吟せず、枯木にあらずれば、龍吟を打失せず

【開解】 山木も海水も皆此れ箇の枯木じや、それのみで無い、十界六道盡十方諸佛の發心修行菩提涅槃もみなこの枯木の生中死じや、一切草木の萌芽生ずるも、みな不動の枯木と參學するなり○百千萬圍の大木も不生のもの、生來たので、この人々枯木の兒孫なり○其枯るゝと云ふ相性體力は外の事無し○佛祖道の……是は疎山の公案なり、常に知る通り今用る心は佛祖道取し來る枯木龍吟は、枯椿なり、全體枯れて一物も無き清淨身なり、今日の幻化空身が枯椿じや、そこを一超して非_三枯椿_二なり○これより法身透過して、法身枯椿を不_レ守が龍吟なり○椿は側霜切、音莊樞機也○山谷木あり……是から枯木について、廣いことを明す○松柏と稱すの松柏に限りはせぬ、一切みな枯木なるぞ○田里木、より中に人天と稱す○人をも枯木と云ひ天をも枯木と云ふ○依_レ根葉……これも枯木の事、樹があれば根あり枝葉あり、其の葉は根によりて分れた故に、二つ離れず、久遠今時一枚、根は枯木葉は龍吟なり○本末……本末長短ともに宗じや、いつも法身ははなれぬから取ることも捨ることも無い、長短其儘甚大久遠より、今日_至不盡なる枯木の法身なり○一度枯木にならねば、龍吟はをこらぬ○龍吟を打失……龍吟を捨て、法身を透過するを云ふ。

【私記】 とは、山木なるかゆるゑに海木なり、性相體力は、枯木なり、枯椿なり、非枯椿なり、山谷木あり、田里木あり、松柏人天と稱せざらんや、根葉本末あに它物ならんや、佛祖は枯木の弟子なり、

△辨、那、れ、下割云、ミナ、下割云、是什、枯木ノ、
△辨、那、れ、下割云、ミナ、下割云、是什、枯木ノ、
△辨、那、れ、下割云、ミナ、下割云、是什、枯木ノ、
△辨、那、れ、下割云、ミナ、下割云、是什、枯木ノ、

△辨、那、れ、下割云、ミナ、下割云、是什、枯木ノ、
△辨、那、れ、下割云、ミナ、下割云、是什、枯木ノ、
△辨、那、れ、下割云、ミナ、下割云、是什、枯木ノ、
△辨、那、れ、下割云、ミナ、下割云、是什、枯木ノ、

參學せざるべけんや、このゆるに長短法身枯木なり」龍吟あるは枯木なるがゆるに、枯木にあらざればいまだ龍吟せずといへり」龍吟は枯木に吞盡せらるるをもて、枯木にあらざれば龍吟を打失せずといへり」打失とは、四河入海して本名を失するがことし、異端ながくたへたるなり」

【御抄】は山も海も、空も皆枯木なるべき道理を如此被釋なり、萌芽と云も、枯木の上の莊嚴なるべし、百千萬圍とは水のはたはり大なるも、枯木の兒孫也と云、此木の上の無盡の詞共も、木の兒孫ととるべき歎。

如文、枯の相枯の性枯の體枯の力は、佛祖道の枯椿非枯椿と云古き詞あり、其詞を被引出歎、此心地は相も性も、乃至體力皆佛祖道の相性體力は枯椿非枯椿と云はるるの程の枯の理也と云也、又如前云、山谷田里皆枯木なるべし、其中にも松柏とも云ひ、人天とも稱すと云は、枯木の道理が如此百千無量に被談所を如此云也、所詮此理の依根葉分布是を佛祖と稱すとあり、今は枯木の根葉分布するより、佛祖もいでたる也と云なり、分布といひ、或依根葉なむと云へば、猶常の詞にまがひぬべし、只今は枯木を松柏とも人天とも、依根葉分布とも可談所を如此云なり、又本末須歸宗とは、本末と云沙汰もなし只枯木の道理の外は、餘物なき所が歸宗ともいはべき也。

枯木の上の長短如先沙汰、以今朽木龍吟と談する所が、枯木に非れば、未龍吟とは云はるゝなり、枯木と龍吟と無差別、枯木が龍吟なる所を打失せずとは云なり、是は打うしなひて物もなく成りたるにはあらず、達磨の眼睛を打失すなむと云しやうに枯木を龍吟と談すれば龍吟を打失せぬ道理は聞ゆるなり。

【辨註】辨曰、枯椿非枯椿は疎山の語法身與法身向上事の答なり。

【那一寶】上山谷木田里木人天佛祖山河大地渾枯木の龍吟なり、打失と不變と二眼を著よ、不枯の枯不變の變なるぞ。

幾度逢春不變心は、渾枯の龍吟なり、宮商角徵羽に不群なりといへども、宮商角徵羽は、龍吟の前後二三子なり、しかあるに這僧道の枯木裏還有龍吟也無は、無量劫のなかに、はじめて問頭に現成せり、話頭の現成なり、投子道の我道髑髏裏有師子吼は、有甚麼掩處なり、屈己推人也未休なり、髑髏徧野なり。

△辨、春下割云、花サケド
△辨、割云、抽葉開花ド
△辨、變下割云、枯木
△辨、り下割云、此龍吟ハ
△辨、なり下割云、ト讀シ玉フ
△辨、休なり下割云、這裡無休歇的惜哉
△辨、り下割云、多是半死生人ノミ只能人々髑髏裡ニ獅子吼アルコトヲシルベシ

【開解】幾回逢春……摧殘せる枯木倚寒林、春に逢て花咲といへども、枯木は枯木で心を變せぬは、渾枯の龍吟全枯木之龍吟で華さくといへども、枯木は變せぬなり、打失と不變とに目をつけよ、不枯の枯、不變の變ちや○この龍吟は宮商の五音の調に落ちぬといへども、五音の調子の爲には父也、五音も龍吟から出たる子孫で外の者で無いと見る○或師は二三子の子は嗣也、相續不斷の義に取る○有甚麼掩處なり……掩ひ藏す處なし凡有耳者は皆この獅子吼を聞ぬ者なし、屈己手前をば屈しかめて、この僧に推しゆづるなり、己をすてて、爲人すると云ふこと、問處と一般に落ち合ふて手前のことは、何にも言はぬ、此僧の問來る處に推し讓て答ふ○髑髏徧野……一度髑髏にならねば、獅子吼は知れぬから、遍野の道理を知るがよい。

【私記】とは、參本いはく、入門見額、入郷問俗、是不變心、開殿見佛、入堂兀坐、幾度逢春、渾枯根莖枝葉不無、只此不染汚也、と、生死去來の龍吟なるを渾枯の龍吟なりといへり」枯木裡還

有龍吟也無と進歩せるは、直に龍吟の活出なるがゆゑに問頭に現成せり、話頭の現成なりといへり、ただ龍吟のみひびきて、この僧はみへざるなり」無量劫のなかと、希有なるをいふ」鬻體裏とは、師子吼の無邊際をいふ、有情非情の彼此つづれをしばらく鬻體裡といふ、ゆゑに有甚麼掩處といへり、かくれざることをしるべし」己をかゝめて師子吼とし、人をおして師子吼とす、なんのかぎりかこれあらん、ゆゑに也未休といへり」盡界ことごとく喪身失命なるがゆゑに鬻體遍野なり、師子吼の分」

【御抄】 幾度逢春不變心とは法常禪師の詞に、摧殘枯木倚寒林、幾度逢春不變心と云ひし詞を被載也打任は木の春に逢は、やうやう葉はり、花なく、佛道の春は三世盡界始中終にかゝらぬ道理を以て不變心とは談也、全春の理を以て不變心とは云べし、渾枯の龍吟也とは、盡界が枯木龍吟なる道理なり、宮商角徵羽に不群なりと云へども、宮商角徵羽は龍吟の前後二三子也とは、龍吟の詞に付て、此五音の詞もいでくるか、此五音又尋常に心得たる、五音なるべからず龍吟の上の宮商角徵羽なり、ゆゑに龍吟の前後二三子也といはるゝなり、此理は以龍吟、宮とも商とも、角とも徵とも羽とも、談するゆゑに如此心得也。

是は今の僧問の詞は、無量劫にもいまだなかりつる詞をはじめて此僧の云出したるやうに聞ゆ非爾、此無量劫の間は、いたづらに此詞のあらはれざりつる時分にてのくべからず、今の無量劫とさす時節も、此僧問の枯木裏龍吟の理の外なるべからず、問頭がやがて、話頭の現成なるべし、此理不始于今事也。

有甚麼掩處とは、前の投子道の詞は、總かくれざる所也と云心地なり、なにのををふ所かあらむと云はのこらず云あらはしたりと云心也、屈己推人也、未休也とは、たとへば一方を稱すれば、一方はくらしと云程の心地なるべし、屈己己の外は、又人あるべからず、鬻體遍野とは、鬻體遍法界なる也と云程の心也、鬻體盡十方界也と云程のたけなるべし。

【辨註】 辨曰、此句は傳燈第七大梅の偈の句なり、古佛の玄旨別なり、前の海印三昧篇に出づ、可併見、打失と不變とに眼を著よ、不枯の枯不變の變なるぞ。

辨曰、二三子とは、子は嗣也息也、華々無已也、都無異音子受父業一如くの意なり。

辨曰、枯木裡龍吟我道爾諸人の鬻體裡に獅子吼あることをしれ、什麼の掩覆すべきことあらん、莫作篇の娘生下有獅子吼亦是なり。

【那一寶】 此句は傳燈第七大梅禪師の語なり古佛の玄旨用處別なり、海印三昧篇可併見。此龍吟は五音六律に不群なりといへども、此五音も龍吟前後の二三子とは、子は嗣也息也、華々乎無已也、都無異音子如受父業の意なり○說文聲生於心、有節於外謂之音、宮商角徵羽聲也、金石絲竹匏土革木音也。

這僧の問頭即枯木龍吟の話頭の現成なりと讀し玉ふなり、有甚麼掩處下は、徧界不藏枯木龍吟なり、屈己推人也未休とは、投子の這僧の問頭に一任して、不休息去を云ふなるべし、更に龍吟無休歇の響ありて、問答一般なり、鬻體遍野は、遍法界鬻體の獅子吼なり、渾枯の龍吟と同意なり、只能人鬻體裡、獅子吼あることを知るべし、莫作篇、娘生下有獅子吼亦是也。

香巖寺襲燈大師、因僧問、如何是道、師云、枯木裏龍吟、僧曰、不會、師云、鬻體裏眼睛、後有僧問石霜、如何是枯木裏龍吟、霜云、猶帶喜在、僧曰、

如何是髑髏裏眼睛、霜云、猶帶識在、又有僧問曹山、如何是枯木裏龍吟、山云、血脈不斷、僧曰、如何是髑髏裏眼睛、山云、乾不盡、僧曰、未審、還有得聞者麼、山云、盡大地未有一箇不聞、僧曰、未審、龍吟是何章句、山云、也不知是何章句、聞者皆喪、いま擬道する聞者吟者は、吟龍吟者に不齊なり、この曲調は龍吟なり、枯木裏髑髏裏、これ内外にあらず、自佗にあらず、而今而古なり、猶帶喜在は、さらに頭角生なり、猶帶識在は、皮膚脱落盡なり

△辨、那、に、裏下割云、ハ
△辨、す下割
云、是什麼所
在頭戴天脚
踏地豈有別
人哉
△辨、らず下
割云、シテ然
モ△那、割云、
是什麼所在頭
戴天脚踏地
△辨、那、古
下割云、不變
不異
△那、生下割
云、南泉語
△辨、は下割
云、髑髏裏ノ
眼睛ハ
△辨、盡下割
云、ストイハ

【聞解】香嚴……枯木裏龍吟とは、大道は生不生に不落を明す、枯木の不生が龍吟の生で、久遠今時不落萬法を究めた一句なり○この次に如何是道中人と問て來た、そこで髑髏裏のこの道中に住する人は、髑髏裏の眼睛で、不見有不見無不見迷悟、枯木龍吟と同じ○石霜の家風が學者を殺す家風なり、今も其意で龍吟とはまたこゝじや、してやつた喜びと思ふ處が、有て死にきらぬ○眼睛と云ふもまた識がのこり、死にきらぬ○山、曰、血脈不斷とは、斷滅ならぬ道理を示す○乾不盡……乾ても不盡な處あり○この龍吟を聞者ありや○盡大地に一人も不聞者なし○いか様な章句でござる、其文章言句が承りたし聞く處が有らば、文章にあはるゝはづ○答ふ、龍吟は元より聲塵に涉らねばいかなる文章とは知らねども、聞者は失命す枯木にあらねばならぬから、すべてこれを聞者は皆失命し枯木になる○いま擬道するに……今兩尊の答話を擬道するに、龍吟の聞者は所で龍吟する者は能なり、

下モ猶識ノア
ル△那、割云、
髑髏眼

これぎりでは眞實の龍吟の吟といはれぬ、齊から相手對待がある、故に龍吟は能所彼此無きものなり○或師曰、此僧の擬し問處は三師の云ふ、眞實の龍吟とは違ふとなり○此の曲調は龍吟なり……この龍吟は、能所彼此無いほんの龍吟なり○枯木裏……世間では枯木裏髑髏裏と云ふけれども、内外のうちと云ふことでない、枯木が其儘龍吟じや、又内は自外と云ふにもならず、今を仕直して右にするでも無い、今が即古で枯木が其儘龍吟なり○頭角生……まだ死に切らぬ、故に頭角が生じて見苦しい○皮膚……皮膚脱落盡せよとのおぼしめしなり。

【私記】とは、擬道するとは、おかに立て談するものをいふ「聞者吟者は、吟龍吟者に藏身するがゆゑに不齊なり」この曲調は、有の曲調あり、無の曲調あり、ひとしくこれ龍吟なり「内外にあらず自他にあらざるがゆゑに、古今はみな枯木裡なり、髑髏裡なり」枯木裡髑髏裡の虚妄不實にあらざるを猶帶喜在、猶帶識在といへり、喜識の外來底にあらざるがゆゑに、猶帶在といふ、喜識は、枯木髑髏の無其形にして、龍吟眼睛の頭角生なり、一眞實のみなるがゆゑに、皮膚脱落盡なり、影室いはく、龍吟を喜とも識とも、可談なり、と」

【御抄】此香嚴寺製燈大師の詞如文、枯木裏龍吟の詞、先段に談舊了、其心又不可達、髑髏裏獅子吼と前にはあり、今は髑髏裏眼睛とあり眼睛の詞違したる様なれども、其意趣只同事也、又就今僧問答石霜の詞に猶帶喜在、又猶帶識在とあり、喜與識の詞替たり然而只同詞同理なるべし、依此詞違、其心不可達也、枯木裏龍吟の上に、喜とも識とも仕む更不可達今理也、龍吟を喜とも識とも可談也、又曹山の詞に血脈不斷といへり、血脈と云事は佛祖より次第に系圖を引て昔より過去七佛より、佛祖等を次第に連て書たるを血脈とは云也、佛祖の血脈は不爾、是は以佛血脈と名け、以祖血脈とは云べき

也、努々彼より此に至とは不可心得、以今曹山名血脈、さればこそ不斷の詞も不斷なれ、曹山の血脈不斷と被仰たる心地はやがて曹山の血脈なるが、血脈と曹山とは二物なるべからず、此道理を語脈裏の轉身とは云なり、佛經の道理も又如此なるべし、又山曰乾不盡、是は海枯程の乾不盡也、又僧の詞に、未審還有得聞者麼と云に、山答に盡大地未有一箇不聞文此得聞と云詞も、能聞所聞に對して得聞と云にあらす、聞不聞の得聞なるべし、盡大地未有一箇不聞と云は、不聞ものはなしと云へば、諸人聞と云詞に似たり、此盡大地未有一箇不聞の詞は、この盡大地を指て聞とも不聞とも可談也、又僧詞に未審龍吟は何章句文、是も龍吟のやうに不審に相似たり、然而龍吟の道理如此いはるべき也非不審如何佛と云し詞に不可違、就之山曰也不知は何章句、此詞知不知にかはらぬ詞と聞たり龍吟の外に知人あるべからず、ゆへに此詞も出くるなり、聞者は皆喪文此龍吟の道理皆喪の理なるべし、龍吟の外に物なき所を皆喪とは云べき也、喪身失命なむと云し程のたけなり、又擬道する聞者吟者は、龍吟の吟者に不齊也とは、吟と聞者とは打任ではいかにも各別なるべし、今者不爾、以今龍爲吟一體なるゆへに、龍吟に龍とは談也、聞者は吟者とは一物なり、然者吟龍をば、吟者可聞、吟者は吟者可聞なり、ゆへに不齊なるなり、詮は能聞所聞あるべからざる道理を示さむ爲也、此曲調は龍吟也とは、此道理を以て龍吟とは云べき也と云心也。

今枯木裏の字、實内外にも自他にかはらず、而今而古とは亘古亘今なむと云程の詞なり、始中終にかはらぬ心なり、以盡大地爲龍吟なり。

是は猶帶喜在、猶帶識在等の詞は、枯木龍吟の上の莊嚴功德なるべき心地を頭角生とは云也、皮膚脱落盡の詞も、解脱の姿なり。

【辨註】 辨曰、此處脫簡寫誤あるか、問者吟者吟龍吟者の八字不穩、按此僧の如く、有得聞者麼、龍吟は何章句と問話して、聞者吟者を問著し回るは、龍吟の吟には不齊、今此諸師の商量の曲調は龍吟にして、此僧如き臭口の曲調にはあらずとなり。

辨曰、枯木龍吟猶喜を帶ることあれば、南泉所謂知不到の處道著則頭角生するなるなり。

【那一寶】 今擬道する聞者吟者とは僧の還有聞者麼、龍吟は何章句と聞者、吟者を分て能聞所聞ありやと問擬するは、吟龍の吟者に不齊なり、吟龍の吟者は盡大地なるが故に、聞不聞にあらざるなり、此道理を諸師の商量し、決擇あるこの曲調は龍吟なり。

龍吟の詞に因て猶帶喜在と、道取あれども、此喜は更に龍の頭角の生するなれば、龍吟の全體現なり、眼睛の語に就て猶帶識在と道取あるとも、此識は皮膚脱落の獨體なり、然れば香巖石霜二師の道處、詞異として宗旨一般なり。

曹山道の血脈不斷は、道不諱なり、語脈重轉身なり、乾不盡は海枯不盡底なり、不盡是乾なるゆるに、乾上又乾なり、聞者ありやと道著せるは、不得者なりやといふがごとし、盡大地未有一箇不聞は、さらに聞著すべし、未有一箇不聞は、しばらくおく、未有盡大地時、龍吟在甚麼處速道速道なり、未審龍吟は何章句は、爲問すべし、龍吟はおのれづから泥裏の作聲擧拈なり、鼻孔裏出氣なり、也不知は何章句は、章句裏有龍なり、聞者皆喪は、可惜許なり

△辨、諱下割云、諱、諱忌也
 隱也又諱短曰諱△那、割云、諱、諱忌也
 △辨、り下割云、コレ
 △辨、なり下割云、枯木龍吟眞見道ノ處ノ獨體ノ眼睛

△辨、那、に
下割云、乾不
盡不盡即是乾
故云
△辨、り下割
云、乾者アリ
ヤ不乾者アリ
△辨、は下割
云、但此道理
△辨、得下割
云、聞
△辨、那、聞
下割云、此僧
聞者一本作
聞者
△辨、那、問
チ聞ニ作ル
△辨、べしは
下割云、ソレ
△辨、那、ら
△割云、如淨
所謂蚯蚓鳴
蝦蟇啼等
△辨、拈下割

【開解】 道不諱……案事こと無い、道ひ分じやと云ふ……○石霜では死にきらぬと云ふ語脈より、身を轉じて其嬉うれいが佛祖の慧命衲子の血脈と、身を轉ずるなり○海枯……の斷滅ならぬ、こゝは佛祖も究盡ならぬ處、不盡是……不盡法と乾き盡ると云ふ一つなり、虚空は盡きぬものなれば、又全體盡て何も無い、不盡是乾乾、是不盡なものなり○乾上又乾は性空は空亦空の道理、般若二十空で知れる○不得者ありやとは不得聞者ありやと問ふなり○未_レ有_レ盡大地一時……盡大地の者、みな龍吟を聞といへば、盡大地と龍吟と、二つ無く盡大地是、龍吟龍是盡大地なることを明す、曹山に問て自分の本意をあらはすなり○爲問すべし……この僧爲に問うて未だ、又或る本には爲聞すべしとして、或師説に實はこの僧も聞べき處は聞たぞ○龍吟……泥裏で聲をなして鳴く、蝦蟇等みなこれ皆龍吟の擧拈なり、人々今日鼻孔裏に氣を出し出息不_レ涉_レ衆緣、これ龍吟なり○也不_レ知_レ是何章句は龍吟章句裏の龍吟なり、何章句と云ふが龍吟なり、は何と見れば蝦蟇鳴くも、章句裏の龍吟なり○聞者喪は可惜許……あゝ残り多いことじや、聞けば喪身失命する有るべきに、此の僧言下で轉身の働きが無かつた、これ龍吟を聞くには一び失命して枯木死底にならねばならぬ、肯て明す。

【私記】 とは 有語無語にさしつかへなきをもて道不諱なり」有無の語脈裡を龍吟の轉身處となすなり」盡界は海底なるを海枯不盡底といふ、眼睛の霹靂これを乾といふ、獨體のかはけるなり」盡界にあらゆる盡有は、つらなりながら、眼睛なるを不盡是乾といへり」是乾にあまれる一塵なきがゆゑに乾上又乾といへり、一隻眼しるべし」得聞者ありや、不得聞者ありやは、龍吟の二三子なり」一箇不聞の未有のみにあらず、盡大地未有なり、このとき龍吟のみにして和するものなきをもて龍吟在甚麼處といへり、これすみやかなる道得なるがゆゑに速道なり」未審龍吟は何章句と、直に龍吟のおどり出でたるなり、爲問のほか龍吟なきがゆゑに、爲問すべしといへり」泥裡の作聲これ龍吟なり、鼻孔の出氣これ龍吟なり」擧拈とは、一切の聲色を龍吟にとらへおさめるほどの意味なり」章句がそのまま龍吟なるを章句裡有龍といへり、影室いはく、是は、也不知是何章句とは、龍吟のほかに知るものあるべからず、ゆゑに聞者皆喪といはるべきなり、章句裡有龍なりとは、此章句がやがて龍なる理、別に不相對處如此云なり、と」參本いはく、句之與_レ論_レ彼_レ、不知親切、と」可惜許とは、參本いはく、慎勿_レ放捨_レ、可惜許者、守如_レ眼睛、保過_レ於_レ命、と」影室いはく、全龍吟の姿を可_レ云_レ皆喪、ゆゑに此吟聲を可_レ聞者なし、此聲を聞ものなき道理が、しばらく可惜許とは云はるるなり、と、春蘭秋菊なり、可惜許は龍吟の二三子なり」

【御抄】 血脈不斷の詞委注先の道不諱の詞は、此道理をとくに不忌と云、義理を述あらはす心なり、語脈裏轉足とは、語の内に轉身すると也、其と云は如前云、血脈と云語がやがて佛とも祖とも人々を置て不云やがて以曹山爲血脈道理が如此語脈裏轉身とは、いはるべき也。如前云、乾不盡の乾は、海枯不盡底程の心なり、所詮全乾なるべし、此理が乾上又乾といはるゝなり悟上得悟、迷中又迷の詞とをなじかるべき也。聞の詞先々沙汰舊了、是は此聞者ありやとはえざるもの有やと云程の義也となり、所詮龍吟ならぬ物なき道理を如此いふなり。是は盡大地は別にて、其中に聞著するもの有様に覺ゆ、但是はしばらく置、盡地あらざらむ時、龍吟いづれの所にあるべきぞと云也所詮盡地與龍吟非別、以盡地爲龍吟、以龍吟爲盡地ゆへなり。是は泥裏の作聲鼻孔裏の出氣なむと云へば、何事ぞと、事々教やうに覺たれども、所詮龍吟ならぬ所

云、スル
△辨、なり下
割云、爾が
△辨、那、龍
下吟字アリ

が、今はなしと云心なり、其を古き詞を引寄て、被書出たるなり、只盡地盡界龍と可心得也。是は知是何章句とは、龍吟の外知るものあるべからず、ゆへに問著皆喪とはいはるべき也、章句裏に有龍也とは、此章句がやがて龍なる理、別に不相對所を如此云なり。全龍吟の姿を可云皆喪、ゆへに此吟聲を可聞ものなし、此聲を聞ものなき道理かしばらく、可惜許とは云はるゝ也。

【辨註】 辨曰、石霜曹山家風表裡することを知るべし、石霜は枯木龍吟も猶帶喜在、獨體裡眼睛も猶帶識在と、十成を諱む、曹山は枯木龍吟の時、即血脈不斷の長處あり、獨體裡眼睛乾不盡、勿レ死却無心地、是則道取不諱の處なり、故頌曰、枯木龍吟真見道、獨體無識眼始明、眼睛篇、所謂億千萬劫我本行菩薩道の參學の團圓せしむるは、八萬四千の瞎眼睛の明白なり、如是喜識盡時一切佛法邊消息、盡正當恁麼時、當人難辨、濁中清、邪正清濁、一切無二、分辨の見るべきあらんや、當人とは是誰、諸人者無知音麼、是以兩師の表裡を參究すべし、會元第六、九峰度傳曰、休去歇去、冷湫々地去、一念萬年去、寒灰枯木去、古廟香爐去、一條白練去、是謂石霜七去、今時を盡却底の功勳を表示す、曹山辭洞山一時山問、什麼處去、師曰不變異處去、洞山曰不變異豈有去耶、師曰去不變異、遂辭去、隨緣放曠是則那邊を退得し這裡行履するを以て表示す、石霜は門裡出身、曹山は身裡出門なり、如是二師の行履表裡して間不容間、審細に參究せよ、末の聞者ありやと道著せるは不得者ありやと云ふが如しとは、此龍吟聞ものと不得聞ものと別ありやと云ふが如しとなり。

【那一實】 血脈不斷は道不諱なりとは、二師の道取は猶不犯諱に似たり、然るに曹山の道取は、四

大五蘊の色身血脈不斷は枯木龍吟と直示あるは、不諱不隱の道取なるべし、語脈裏轉身とは、曹山恁麼道取龍吟の語脈裏に轉身轉腦して、無廻避處なり、乾不盡八海枯不盡底とは、全海全枯の道理なり、不盡是乾なるがゆゑに、乾上又乾とは乾者ありや不乾者ありや、實是獨體の遍野なり、石霜曹山の語路家風表裡するに似たり、石霜は語十成を諱なり、曹山は道不諱の處あり、然れども二師不問容髮、共是宗乘の談なり、曹山頌曰、枯木龍吟真見道、獨體無識眼始明、獨體盡時消息盡、當人何辨濁中清、當人は誰、諸人無知音麼、尙又有不變異去來話、併照看、石霜遷化後、九峰問首座曰、休去、歇去、冷湫々地去等明什麼邊事、首座曰明一色邊事、乃至九峯不肯曰、坐脫立亡則不無、先師意未夢見在、由是觀之、石霜七去非門裏出身一色功勳邊事矣。不得者ありやとは不得聞と云ふには非ず不得龍吟者ありやと云ふが如し、未有三盡大地時龍吟在甚麼處とは盡大地と龍吟と前後ありやなしや蓋大地即龍吟なりや、速道となり、未審龍吟は何章句は、實に這僧可問取を問取す、爲聞し可聞屈處、不知は何章句と道著ある、この章句即曹山の龍吟なりと、聞者皆喪は可惜許との玉ふなり。

いま香嚴、石霜、曹山等の龍吟來、くもをなし、みづをなす、不道道、不道眼睛獨體、只是龍吟の千曲萬曲なり、猶帶喜在也蝦蟇啼、猶帶識在也蚯蚓鳴、これによりて血脈不斷なり、葫蘆嗣葫蘆なり、乾不盡のゆるに、露柱懷胎生なり、燈籠對燈籠なり。

【聞解】 香嚴石霜曹山いづれともに雲をなし雨をなして、優劣なしそれ頭上を看よ、脚下を看よ、雲な

福本無來字、
△辨、那、道、
下割云、是道、
ト問フニ尊宿、
ノ商量ハ而今、
此話ノ初問ハ、
如何、
△辨、那、曲、
下割云、チナ、
ス

△辨、那、斷
下割云、相續
△那、蘆下割
云、全無二
種

△辨、生下割
云、ニシテ沈死
セザル△那、
割云、不_レ沈_二
死地_一

△辨、り下割
云、其所以イ
カン

△辨、龍下割
云、了無_二對
待_一

△縫、なり下
割云、這什麼
ヲカ對識ス諸
人者傾耳聽之

り水なり、外物はないぞ○道取不道取なれ、優劣を云ふなこの三師のいはれる、眼睛も觸體もみな無量の龍吟なり、或師説に如何是道と問に、三師ともに道とも云はず、不道とも云はず眼睛觸體只是龍吟の千曲萬曲のことじや、目を見出て看よ、月を開て聞け○蝦蟇啼……識を帯るは蝦蟇啼處の龍吟なり、此の龍吟斷へぬから血脈たへぬ、故に葫蘆は葫蘆に嗣ぎ、佛祖は佛祖に相續するなり、乾不盡のゆるに渾沌未分時露柱懷胎して斷滅ならぬ、露柱の不生なものが、生の道理を含で居る○燈籠對_二燈籠_一……燈籠計りで無い、燈籠に相對して斷滅ならぬ、不生に其儘生の道理を含んで居る、この時は對する義理を重く取る、或師説には露柱懷胎と云はれて、何ぞいかめしいと思ふな、やはり燈籠對_二燈籠_一となり、この時は二つもの無いと云ふを重くとる。正法眼藏龍吟卷聞解終

【私記】とは 香巖石霜曹山等は龍吟なり、ゆるに雲をなし水をなすといへり「雲水はおほきをいふ、參本いはく、無_レ有_二邊際_一、遍界不藏、と」不道道、不道眼睛觸體とは、不道は不言なり、道は、如何是道と進歩せる道なり、道ともいはず、觸體眼睛ともいはず、ただこれ龍吟のみなり、參本いはく、近代老宿敢加筆云_二不道道、不道不道、不道眼睛等_一、無_二智_一於無智_一、更有_二沿襲者_一、嗚呼悲哉、不道道、不言道也、只是已下、龍吟、自爲吟而已、と」蝦蟇啼、蚯蚓鳴この龍吟の血脈不斷なり、葫蘆は、龍吟の二三子なるをもて葫蘆嗣葫蘆といへり、龍吟の纏葛藤をいへり「諸法ありのまゝにのこりなきを露柱懷胎生といふ」そればかりにして、餘物のまじらざるは、燈籠對燈籠なり

【御抄】今の詞は龍吟と云に付て、雲水等の詞たよりある上、所右擧の、祖師等の詞をほむる詞なるべし、彼面々詞不道道不道、眼睛觸體等の詞も、皆是龍吟の上の千曲萬曲なるべしと云也、祖師の道詞のかはりたるやうに、面は見れども只龍吟の道理を、重て被述と云心なるべし。

此詞眼睛の草子にも被出たりき、所詮此猶帶喜在、蝦蟇啼、猶帶識在、蚯蚓鳴枯木裏龍吟の詞にをなじ、がまていの啼、蚯蚓鳴の鳴、龍吟の吟、不可差別、又龍吟はまさる物にて、かへるみ、すは劣也なむと、勝劣を立て、不可差別、蝦蟇も蚯蚓も、龍も參學の方よりは、一體也、一物也、其理不可違也以此道理、血脈不斷とはいはるゝなり。

右の祖師の問答、無盡に入くみれども、只其理は、葫蘆は嗣葫蘆道理也、乾不盡の姿も只葫蘆嗣葫蘆の理也露柱懷胎生と云はむも、露柱の胎生は燈籠なるべし、燈籠對燈籠の理なり、又餘物不交其が其なる理外又別の義なきなり。

【那一寶】三師の道取各々龍吟し來て、如_レ作_レ雲作_レ水、這裡不論_二不道_一、皆是一般の道理なり、故に石霜の帶_レ喜帶_レ識は蝦蟇啼蚯蚓鳴、雨竹風松乃至鼻孔裏出_レ氣、眼睛裏放_レ光なり、此道理によりて曹山の血脈不斷と道取あるなり、乾不盡も亦同意なり、これを葫蘆嗣_二葫蘆_一とも、露柱懷胎生とも、燈籠對_二燈籠_一とも云ふなり。

【御聽書抄】▲外道の枯木は灰身滅智なり、二乗の枯木は滅盡定無餘涅槃也、佛は是をきらはせをばしまして枯木再花さくべからず、永不成佛とは被仰也▲菩薩を談するに單提の菩薩とて、衆生を度しはてずば、永不成佛と願する也、是は又佛の二乗を嫌はせをばします永不成佛には不可似、佛法にはすでに衆生佛也と談ず、此時は菩薩の願已前佛にはなるかとも聞ゆ、又三界唯一心とも、諸法實相とも談するときはいかなるべきぞ、能々可了知ものなり、外道もし今の枯木の義をしるといはい外道とは名づくべからず▲爾前の教には二乗の成佛をゆるさぬ也、しかればいりたるたね、かれたる木にたとへらる法花開會しぬれば、いりたるたねもきざし、かれたる木にも花さくと覺ゆるこのゆへに、

枯木裏龍吟ありと云も、いはれたり、此上又鬪體裏獅子吼ありといふ、をなじこと、覺へたれども、僧の問につきて答あるべくば、龍吟ありともなしともたへらるべきに有無の詞はなく鬪體裏有獅子吼とある、不心得、然而祖師の言語如此、只有無の語許ならば、二乗を枯木にたいし、龍吟を成佛と心得ぬべし、非本意、成佛のときは、無二乗都彼是能所なきこそ、祖師の本意なれ、枯木をやがて龍吟と心得たり、鬪體が獅子吼なるいはれを心得よとなり▲外道は枯木を朽木ならむと思へり、不可逢春と學せりと云ふ、枯木とてもなじかは不可逢春哉、生木も枯木も、春には逢べし、但かれながらあはむは、非本意所をいふ、人の佛法に逢とはいへども、不知佛法はあはざるが如し、今の枯木をこそ、萌芽枯木龍吟とはいへ、百千萬圍とあるも、枯木の兒孫也、枯の相性體力は、佛祖道の枯椿也といふ、このゆへに田里木、よのなかに人天と稱すといふ、世間の詞にもこれあり▲我道體鬪裏有獅子吼といふ、さきに龍吟ありやいなやと云つる答かどぞ覺れども非爾べし、枯木裏龍吟をありと不答、無と不答、我道とて重て此詞あり、所詮さきの枯木裏龍吟の理をかさねてとかる、也▲海枯の參學也と云海枯盡る事あるべからず、枯木を是程に心得てこそ、龍吟の詞もかけあふべけれ、但海徳にてひろく大なれば、枯盡まじなむといはむは、又世間の心地なるべし、佛性海と談じ不宿死屍なむといふとき、海ならぬ所なければ、盡界を海ととく、枯れかれずといふ差別にも不及、たゞ海の上に、枯といふ詞のあるにてこそあれ、鏡の上に破ると云詞のあるが如し、海枯の詞人に對していは人作佛作祖すれば人身は破れずと云程の事也、かく云も又作業に似れども、其義にてはなし、身心脱落すると也、この時は何を棄て、脱落すと云はず、海枯の姿も如此▲枯木とて佛二乗をさらはせをしませども後には記別にあづかる、たとへば眼睛を談ずるとき、瞎眼と云が如し、破鏡不重照、落花難上樹と云も皆祖師の

詞なれどもさとりざるときはたゞ如文讀之、枯木を朽木と心得が如し。龍吟と云も、不群とあれば、宮商角徵羽の聲にあらず但かく心得ぬる上は又宮商角徵羽の聲にあらず但かく心得ぬる上は又宮商角徵羽の詞も、龍吟の其一二子なるべし▲木枯といふ、枯木の木枯と云は、一向枯をはりたる詞にはつかはず、木の一の姿をかれたりといふばかりなり、木の上の姿に枯るとも云也▲海木空木と云ふかゝる木もあるべき也、然而業力によりていまの人不見空木を見る業力の方にては、山木をもさこわば疑ふらめ、山谷木を松栢と稱し、田里木を人天と稱す、依根葉分布是を佛祖と種するゆへ也▲二乗三乗の事を佛は三草二木なむとも被仰、今の田里木人天と稱すべき歟▲本末須歸宗とは、今本末須歸宗と云時に本不對末、末不對本ゆへに須歸宗といふ、たゞ本末不相對と云までは、猶本末を置に似たり、歸宗と云ぬれば本末の詞もなし歸宗には本末あるべからず○有什麼掩處と云ふ、是は何としてかをさふる所あらむと云、實にもをさへがたし、鬪體裏と云は盡界なるべし、この獅子吼をさふべき人もなし、ゆへに如此とく也▲屈已推人也未休といふ、非汝非誰なむと云程の道理なり、をのれをば屈し、人をばをすといへばたれありとも覺ず、未休と云へば、又をばりもあるべからず▲鬪體遍野といふ、是は遍法界と也、鬪體の詞に付て野の字あり、獅子吼とは、盡十方界眞實人體と云程の詞なり▲香巖寺龔燈大師段石霜は青原流、石頭藥山、道吾、石霜四脈、曹山は青原、石頭、藥山、雲巖、洞山、曹山▲この枯木裏龍吟を如何是と問意趣は、如何是三界唯一心とも、如何是諸法實相とも問をなじ事也、枯木裏三界唯一心なるゆへに、諸法實相なるゆへに、又此問は大唐國裏と問程のこと也無正偏あまる所なきゆへに如何是日本國といはれ、六十餘國といはむが如し、枯木裏の裏は道理如此▲不會といふ、龍吟聞不聞による、會不會といはず▲猶帶喜在、猶帶識在は、流轉生死の時は、不拜佛面と云へども三界を一心と脱落の時は、喜在識在なり▲頭角生とはさし出てかく

れざる也、よき詞に仕ふ也、盡十方界眞實人體と脱落する、頭角生也▲血脈不斷とは獨體乾不盡のゆへに不斷なるゆへに葫蘆嗣葫蘆と云也▲皆喪とは、佛法を聞は皆喪なり、見佛の時我等は喪す聞法の時は藏身する程の道理也、一心欲見佛、不自惜身命の心なるべし、坐禪のとき喪身失命とも、又佛を坐ころすとも、皆同かるべし▲可惜許とは、三界唯心を惜と仕ひ、諸法實相を惜と仕なり▲蝦蟇啼、蚯蚓鳴は、枯木龍吟獨體獅子吼に引替ていふなり、枯木龍吟、獨體獅子吼等は、あるまじき事を強爲していふ様なるいまの蝦蟇啼、蚯蚓鳴は、やがてなきぬべきものに仰て云ふ是程に枯木龍吟をも可心得也、猶帶喜在也蝦蟇啼猶帶識在也、蚯蚓鳴といふゆへに▲乾不盡とは、露柱懷胎生燈籠對燈籠と云べし枯木には龍吟と云事あるまじき、心地のする所を海枯に喩へる上は、今又露柱懷胎生と同じ、心也又燈籠に燈籠を對るをなじ心なり、枯木は獨體と獅子吼とをなじきに對するなり▲海枯の心を引のせていださる、海の乾盡事あるべからずといふは、我等が見解にてこそ、海が廣大なれば、不可盡と思にてこそあれ、是は最少分の見解なり佛法には大海とつかひて、海ならぬ所なければ、乾不盡といふなり乾上又乾といふは、悟上得悟の漢、迷中又迷の漢と、いひしにて心得べき也。龍吟終

正法眼藏龍吟

于時寬元元年癸卯十二月二十五日在越宇禪師峰下示衆

却退一字參

正法眼藏龍吟 三日耳聾參 却退一字

△辨、那、下字ナシ

●舒州投子山慈濟大師、因僧問、枯木裏還有龍吟也無、師云、我道獨體裏有師子孔、枯木獨體什麼人、龍吟師吼百華新、祖師心印風空界、四大五蘊誰認神、神何認泥瓦合成身。

●枯木死灰談、固外道所教也、生無想默知幾劫、枯木死灰認涅槃、異道六師邪不識、葛藤纏脚、閑夢蔓其餘、事相更附錄。

●然外道所謂枯木、佛祖所謂枯木、應遙殊異、外道雖談枯木、不知枯木、況聞龍吟耶、外道者、枯木謂朽木學不可逢春也、佛祖道枯木、海枯參學也、海枯木枯也、木枯逢春也、木不動著枯也、海枯參學、謂佛祖海、海面未見徹底無涯岸、故道

席上高瀑流水枯亦爾、枯木堂中千百衆、枝枝葉葉一無搖、身心手眼都來密、氣息寂然我逍遙、須恁麼參。

●今山木海木空木等、是枯木也、萌芽枯木龍吟也、百千萬圍、枯木兒孫也、枯相性體力、佛祖道枯椿也、非枯椿也、有山谷木、有田里木、相性體力、參實相卷向佛祖道、道今言也、枯椿疎山法身邊事、非枯椿、即是透法身底、枯木龍吟也。

●山谷木、世中稱松栢、田里木、世中稱人天、依根葉分布稱之佛祖、本末須歸宗、即參學也、如是枯木長法身也、枯木短法身也、長法身依根乎、短法身歸宗乎、人天松栢各是枯木根矣。

●若非枯木未龍吟、未枯木不打失龍吟、打失如曇華梅華等、中參究、打失猶言坐忘乎。

●幾度逢春不變心、渾枯龍吟也支本、入門見額、入鄉問俗、是不變心、開殿見佛、

入堂兀坐、幾度逢春、渾枯根莖枝葉不無只此不染汚也、

●雖不群宮商角徵羽、而宮商角徵羽龍吟前後二三子也支本、一切色聲枯木子、龍吟

聾耳作家天、二三子是少林友、寂默怒雷佛祖禪、

●然這僧道枯木裡還有龍吟也無、無量劫中、始現成問頭、話頭現成也支本、問處力

究千萬劫、衲僧歷劫舌頭無、風雷霹靂龍吟子、枯木海枯誰敢慕、吾問汝、者裡有

龍吟也無、

●投子道、我道獨體裡有師子吼、有甚麼掩處也、屈己推人也未休也、獨體遍野也支本

有甚麼掩處者、即是奮迅無畏三昧響也、屈己推人也未休者、魏武有時於密響、蓋上

書一箇合字、即今百千衆圓相坐、誰讀箇投子合字者、又誰不讀者恁麼故道獨體遍

野、師子吼處在、未免此是末後一句、

●香嚴寺襲燈大師、因僧問、如何是道、師云、枯木裡龍吟、僧曰不會、師云、獨

體裏眼睛、後有僧問石霜、如何是枯木裡龍吟、霜云、猶帶喜在、僧曰、如何是獨

體裡眼睛、霜云、猶帶識在、又有僧問曹山、如何是枯木裡龍吟、山云、血脈不斷、

僧曰、如何是獨體裡眼睛、山云乾不盡、僧曰、未審、還有得聞者麼、山云、盡大地

未有一箇不聞、僧曰、未審、龍吟是何章句、山云、也不知是何章句、聞者皆喪支本

此箇話頭中、千古貶石霜、豈其可然邪、曹山答同口、

●今擬道聞者吟者、不齊吟龍吟者也、此曲調龍吟也支本、不齊者、批擬道底、吟龍

吟者者、渾然無內外、故道此曲調龍吟也、此是真箇不齊肩的也、

●枯木裡獨體裡非是內外、非自它、而今而古也支本、是即一時亘古亘今也、枯木獨

體同古今、面牆擔版是龍吟、虛曠寂寥色聲外、斷臂安心嗣少林、

●猶帶喜在、更頭角生也、猶帶識在、皮膚脫落盡也支本、猶帶在者、非爛誠辭、是

隨喜語、謂枯摧木無吟曲、而今龍吟、豈可不隨喜乎、故道更頭角生也、可知非頑

枯、謂故獨體無眼睛、而今眼睛明也、何不驚喜乎、是以道、皮膚脫落盡也、豈不言

其真實底耶、

●曹山道、血脈不斷、道不諱也、語脈裡轉身也支本、道不諱者、言不忌也、語脈、番身

者、番轉、滙石二師、語脈也、

●乾不盡者海枯不盡底也不盡是乾故乾上又乾也支本、亦是獨體眼睛霹靂、眼睛是獨

體乾也、未知海枯者、何知眼睛獨體、看末後句、

●道著有聞者麼、如有不得者麼支本、應永寫本其唯如是、通本作道著有得聞者麼、

如有不得聞者麼、今親勘破、七十五帖上無得字、下無聞字者、非是本色、意味甚

深長也、故從古本、不由通本、有聞者麼、有不得者麼耳、

●盡大地未有一箇不聞、可更問著、未有一箇不聞且置、未有盡大地時、龍吟在甚

麼處、速道速道也支本、速道速道、非問取道著、邪解非甚麼處、則無甚處也、龍吟

還吟破盡大地了也、更不吟出麼、作麼生、

●未審龍吟是何章句、應為問支本、其問甚諦當、故有如是讚歎矣、

●龍吟自泥裡作聲舉拈也、鼻孔裡、出氣也、當處大解脫、非自它彼此、只是言端語端而已。

●也不知是何章句、章句裡有龍也、句之與吟、不論彼此、不知親切、聞者皆然、可惜許也、慎勿放捨、可惜許者、守如眼睛、保過於命。

●今香巖石霜曹山等、龍吟來、作雲作水、無有邊際、遍界不藏。

●不道道、不道眼睛、只是龍吟、千曲萬曲也、近代老宿敢加筆云、不道道、不道不道、不道眼睛等、無智於無智、更有訟襲者、嗚呼悲哉、不道道、不言道也只是已下、龍吟自為吟而已。

●猶帶喜在也、蝦蟇啼、道帶識在也、蚯蚓鳴、由茲血脈不斷也、葫蘆嗣葫蘆也、乾不盡故、露柱懷胎生也、燈籠對燈籠也、蝦蟇啼、蚯蚓鳴、盈溢全機、死活循然、由茲以下、龍吟快活不徹、嗣無崩瀆血脈、不染汚耳、獨露相續、之謂露柱懷胎生、一法究盡、之謂光明對光明、脚跟下葛藤蔓。

正法眼藏龍吟 爾時寬元元年癸卯十二月廿五日在越宇禪師峯下示衆

明和七年庚寅仲夏十四夜黃昏戌、在東羽秋田仙北郡、版見內村、釋堂山靈仙禪梵刹、三日耳聾參了、回向 護法龍天善神守衛高德云、本光焚盟書

龍吟參註附錄

荐福語曰是什麼章句、龍吟亦不知章句何自知、擊竹悟道一見桃華是什麼、章句、調絃也是、即道得也、非疑著、舌端、吟曲不曾落五音、有嬰兒在、斯不能語言也、婆娑和和、有句無句終不得物語未

正故則總不落聲色塵坑、華開枯木帶春心、與時漏泄消息、則不變心、枯木乎、當處發生、隨處盡滅、是難上枝、故宮商角羽同和處、此引調高誰敢侵、同和正當、都忘己見、豈有侵犯者乎、此弄引者、固不風聲塵裡、胡為捏根境法中、乎啞

外道枯木。

涉典錄

永平正法眼藏涉典錄卷六 遠孫相州老梅菴主瑞方面山謹集

第五十一龍吟卷 ▲投子枯木龍吟 傳燈卷十五投子章出▲香巖龍吟 碧巖第二則 頌評出▲宮商五音 字書云、史樂書、聲成文調之音、說文、聲生於心、有節於外、謂之音、宮商角徵羽聲也、金石系竹匏土木水音也。

涉典續貂

龍吟 龍吟△本子投子則、不竣論也、馬融賦云、龍吟方澤、虎嘯山丘、唐書云、房瑄修學于終南谷中、忽聞聲如憂銅、父老賀曰、是龍吟也、聞者必進焉、○投子慈濟△已出于無情說法中、○投子龍吟△傳燈師章載之、○枯木△先洞山曰、欲知此事、直須如枯木生華、方與他合、博物志云、昔有人好道、而不知求道之方、朝夕拜跪、向枯木乞長生而不倦、枯木一日生華、○朽木△論語、公冶長云、朽木不可雕也、○枯木逢春△傳燈大梅章偈云、摧殘枯木倚寒林、幾度逢春不變心、韋應物詩云、桃萼復

逢前度春○百千萬圍△老子、有合抱木、淮南子有百圍木、有蔽牛木、西域記有數百圍木○枯椿△香嚴道話字、出于次下○依根葉分付△石頭參同契句○宮商角徵羽△說文云、聲也生於心、有節於外謂之音、宮商角徵羽者、聲也、金石糸竹匏土革木者、音也○不群△杜詩云、白也詩無敵、飄然思不群○二三子△述而云、子曰、二三子、以我爲隱乎、吾無隱乎爾○屈己推人△白虎通云、貢士於天子、進賢勸喜、前漢鄭當時傳云、每朝未嘗不言天下長者、其推轂士、誠有味也○獨體遍野△傳燈十八、福州長慶慧稜章、遊山話云、鼓山曰、孫公若無此語、可謂獨體遍野、又見于行持篇上、形骸遍野下也○香嚴龍吟△香嚴二答、見傳燈十一師章、其餘見于十七曹山章○而古而今△本韓文字、雪竇用頌焉○頭角生△傳燈道吾章云、藥山曰、智不到處、切忌道著、道著頭角生、唐書云、柳宗元、年少嶄然見頭角、隋文帝初生、皇妃抱之、忽見頭上生角、遍體起鱗、隨之地、有尼見曰、驚吾兒、令晚得天下○章句△唐書云、李靖曰、大丈夫、當以功名取富貴、何至作章句之儒、李白詩云、魯叟談五經白髮死章句○義雲師著語云、是什麼章句○又頌云、吟曲不曾落五音、華開枯木帶春心、宮商角羽同和處、此引調高誰敢侵、龍吟畢

正法眼藏龍吟註解畢

正法眼藏春秋

春秋

【面山述贊】 遺第二十春秋 述云、寒之不_レ住_レ寒也謂_レ之春、暑之不_レ住_レ暑也謂_レ之秋、離_レ春秋而無_レ寒暑、離_レ寒暑而無_レ春秋、祖訓妙密可參而熟、贊言 朗刹那際、時本非時、呼吸消息、入不思議、春秋元來非他物、寒殺熱殺是闍黎。

【問解】 正法眼藏春秋卷開解 永福老人述云、寒之不_レ住_レ寒也、謂_レ之春、暑之不_レ住_レ暑也謂_レ之秋、離_レ春秋而無_レ寒暑、離_レ寒暑而無_レ春秋、祖訓妙密可參而熟、贊言、朗刹那際、時本非時、呼吸消息入不思議、春秋元來非他物、寒殺熱殺是闍黎。

【那一寶】 春秋 那一寶曰、春秋是什麼時節ぞ、春無_レ春春、秋無_レ秋秋、寒時也、暑時也、春時也、秋時也、正時也、偏時也、悟時也、迷時也、時時也、箇々現する底の有時那處ぞ。

洞山悟本大師、因僧問、寒暑到來如何迴避、師云、何不向無寒暑處去、僧云、如何是無寒暑處、師云、寒時寒殺闍黎、熱時熱殺闍黎、この因縁かつておほく商量しきたれり、而今おほく功夫すべし、佛祖かならず參來せり、參來せるは佛祖なり、西天東地古今の佛祖、おほくこの因縁を現成の面目とせり、この因縁の面目現成は、佛祖公案なり

△那、黎下割云、字書殺又上聲俗謂大過曰殺

△辨、那、祖下の字アリ

【問解】 洞山悟本大師因僧問、寒暑到來如何迴避、師云、何不向無寒暑處去、僧云、如何是無寒暑處、師云、寒時寒殺、熱時熱殺、閻黎、古來この公案を商量するに多く寒暑と見て頌する、故に洞山の本意を失す○慧遠法師の念誦の文に、生死交謝、寒暑互遷とある、生死のことなり、生も一大事死も一大事で、佛々祖々の明め玉ふは生死なり、故に寒暑も一大事因縁、生死も一大事因縁なり、この心にて見るべし、今此の僧の間も全體生前が生死の中に居る心でやきつけて問ふて来た、今の息を轉ずればはや來生じやから、今が全體生死の到來する時節じや、如何どう迴避しよけませうと云ふ心なり、師云、何不……此の答は先づかう熱くおほせらるなれども、寒暑を去つて別に無寒暑が有るでは無い、其の意は後に知れる○僧云……其無寒暑處が所望でござる、はやく承はり度い○師云、寒時熱殺……殺は、そぐ、へらす兩訓あり、寒い時は閻黎を寒殺して、寒いと云ふものない程にするがよい、暑い時は暑いと云ふ者の無い程にするがよい、徳山圓明禪師の熱時普天普地熱、寒時普天普地寒といはれた、此の時は閻黎と云ふ者は無い、これ寒暑が其の儘無寒暑なり、洞山大師は答處は、この徳山の語で照し合すべし○この因縁おほく……師家が賣り學者が買つて商量り來れり、故に今日の人にも功夫し合點するがよい○佛祖必ずこの寒暑生死、到來の道理は參じ來るなり○參じ來るは皆佛祖なり○西天東地の佛祖多く、この寒暑生死到來の一大事因縁を現成の本面目とするなり、生死は佛家の一大事因縁なり、故にこの一大事因縁の面目を現成するは佛祖の公案で終に仕直しならぬもの。

【私記】 とは、この因縁かつておほく商量しきたれり、而今おほく工夫すべしとは、むかしもこの因縁なれば、いまもこの因縁なるべしとなり「佛祖はかならずこの因縁に參來せり、いまも參來せるは、佛祖なり、しかあれば西天東地古今の佛祖は、この因縁を現成の面目とせり、ここをもてこの因縁の面目現成せるは佛祖これなり、現成の語勢にうけて公案とつけたるのみなり」

【御抄】 祖師の佛法の詞にかゝはらぬと云は、則是等なるべし、此問答常義には寒暑到來せむ時はいづくへかざるべきと問たるを、寒暑もなき夏は深山深谷冷水なむどの暑をさりぬべき所、又寒時はあたゝかに、寒嵐もはげしからぬ所のあらむするに、向べしと被仰たるを、その寒暑なき所はいづくぞと、問たるやうに重々聞たり、如此心得は、非祖師問答只凡情なるべし、非佛法頗沙汰しても、不可有其詮事歟、此答に寒時寒殺閻黎、熱時熱殺閻黎とあり、此答の詞はすこし、不普通やうにきこゆる、但是も世間の情に仰て心得ば、寒が甚しくして殺閻黎、熱も難堪忍依殺閻黎とも、一旦は被心得ぬべけれども、是も頗風情過て聞ゆ、但皆是等の凡見を離たる上は勿論事也、奥御釋に委聞たり。

如文西天東地、古今の佛祖多、此因縁を現成の面目とせりとあり、此さきの高祖與僧問の道理を今は佛祖の面目と可談也、此因縁面目、現成は佛祖公案也とあり、非可疑。

【辨註】 辨曰、此因縁とは寒暑因縁なり、此公案を云ふにあらず、若公案の因縁と云は、上の西天東地の語不相應なり、可照看。

【那一寶】 此因縁とは此公案の旨趣寒暑の因縁なり、此商量の因縁を云ふにあらず、若公案の因縁と云は、上の西天東地の語不相應なり、古今の佛祖常に談する處の面目と云ふ底意なり、可照看。

しかあるに僧問の寒暑到來如何迴避、くはしくすべし、いはく正當寒到來時、正當熱到來時の參詳看なり、この寒暑渾寒渾暑ともに寒暑づからなり、寒暑

△辨、通下といふ三字アリ
△辨、那、リ

づからなるゆゑに、到來時は寒暑づからの頂額より到來するなり、寒暑づからの眼睛より現前するなり、この頂額上、これ無寒暑のところなり、この眼睛裏、これ無寒暑のところなり

下割云、如何
詳看セン
△辨、那、暑
下割云、盡十
方盡世界
△辨、那、は
ト割云、非
從別處來

【聞解】 しかるに……此僧の問ふ意は精く合點すべし、寒暑をいやに思ふて問ふて来たては無い、そこをくわしくすべし○いはく正當……僧問の本意はまづ正當さし向ひよけられた、寒到來の時、暑到來の時とこの僧の問はやりのばした事で無い、即今指し當つての參詳なり○この寒暑……寒暑づからとは寒暑ながらと云ふこと、此の寒暑とは僧問の寒を云ふ○下は今日渾全にそるふて到る寒暑を云ふ、僧問の寒暑も今日渾て全く到る寒暑ともにやはり、寒暑ながらで寒が外に有つてそれを持って来て寒と云ふでなし、故に到來時は寒は寒ながら、暑は暑ながら寒暑生死の頂額てつべんより、到來するなり、眼睛と云ふも同意、頂額と云ひ眼睛と云ふことは、寒暑の全體肝要とする處より、到來現前すると云ふ心なり○この頂額……此寒暑生死の頂額上が其儘無寒暑なり、寒は寒の位に任せぬ故に○眼睛の寒暑が其儘無寒暑、生死が其儘無生死なり。

【私記】 とは 參本いはく、是即問處力究也、謂正當至看也、則委悉也、と「正當寒到來時、正當熱到來時とは、寒熱到來の正當時なり、正當は、正面のごとし、寒熱到來を正面とするなり、寒熱到來をおきて、別に無寒暑處を覓めざるをもて參詳看といふ」寒暑は先師の煖皮肉なるがゆゑに、ものゝ觸犯するなきを廻避といへるなり、如何は不犯の宗なり、どうしてみても、さばるゝものなければ、如行廻避と進歩するなり」この寒暑、渾寒渾暑、ともに寒暑づからなりとは、この寒暑は、渾寒渾暑

なり、渾寒渾暑は、ともに寒暑づからなりと、渾寒渾暑を釋したる語なり、づからは、舉體なり、自體なり、寒暑の自體なり、生死去來眞實體なり」寒暑づからの頂額眼睛とは、寒暑づからを頂額眼睛といふのみ、寒暑づからの外に頂額眼睛あるにてはなし、到來は寒暑づからの頂額眼睛より現成するがゆゑに、到來現前に蹤迹あることなし、無寒暑處といひつべし、去來にあとなきなり、ここをもてこの頂額上眼睛裏これ無寒暑のところといふなり、萬象之中獨露身は、撥か不撥か、道へ道へ」

【御抄】 是は如前云、只寒暑到來せむとき、如何廻避せむと問たるとは、不可心得、此道理をくはしくすべしとはある也、正當寒到來時、正當熱到來時を、つまびらかにすべしと也、此寒暑、渾寒渾暑共に、暑寒づから也とは、此寒暑渾寒渾暑といはるゝ上は、寒も法界を盡し熱も盡法界の道理が、寒暑づからといはるゝ也、頂額眼睛を以て、寒暑と談也、此頂額上眼睛裏を、無寒暑とは云べき也、かゝる寒暑をさる所を不審したる問にあらざる條此詞已分明也、寒暑、渾寒渾暑と三句にかゝれたるを、只寒暑渾寒渾暑と二句によみてもありなむと云義もありぬべし、且かゝる沙汰もありき、但三句も二句も其理不可違、只同心なるべし。

【辨註】 辨曰、正當寒暑到來の時參詳なりとは、正當寒暑到來時を參詳看せよとありてよし、寒暑づからとは寒暑を避るにあらず、寒暑はをのづからの寒暑づからなる故に、外より到來せず、寒は寒の頂額より來り、暑も亦爾なり、頂額猶言頂上、眼睛とは如是、寒暑づからの此道理を見破する眼睛より現成しあらはるゝとなり、寒時は寒、熱時は熱、をのづからの時を寒暑づからと云ふ。

辨曰、別に無寒暑の處あるにはあらず、寒者熱者如何と參究せよ、古人云、諸佛出世して衆生をして冬は寒く、夏は暑きことを知らしむるのみと是なり。

【那一寶】 正當寒暑到來の時の參詳なりとは、正當寒暑到來の時を參詳看せよとありて好し、寒暑づからとは寒暑を避るに非ず、寒暑はをのづからの寒暑づからなる故に、外より到來せず、寒は寒の頂顛より來り、暑は暑の頂顛より來て來處なく去處なし、頂顛猶言頂土、眼睛とは如是、寒暑づからの此道理を見破する眼睛より現成しあらはるゝなり、寒時は寒、熱時は熱、をのづからの時を寒暑づからと云ふぞ、又自體を。づからとも和訓すべし。

別に無寒暑の處あるには非ず、寒者熱者如何と參究せよ、古人云、諸佛出世して衆生をして、冬は寒く、夏は暑きことを知らしむるのみと是なり。

高祖道の寒時寒殺闍黎、熱時殺闍黎は、正當到時の消息なり、いはゆる寒時たとひ道寒殺なりとも、熱時かならずしも熱殺道なるべからず

【聞解】 高祖道の……是から答處を示す、寒時寒殺闍黎と云ふは寒暑を外へ避るで無し、寒暑の燒きつけて到るまづ當の消息を示すなり、寒殺闍黎と云ふは正當の消息なり〇いはゆる寒時道、たとへ寒殺なりとも、熱時かならずしも熱殺道なるべからず……こゝは影略してある、故に前度の言葉を足して見るなり、たとへ寒時寒殺闍黎なりとも、熱時熱殺闍黎なりとも熱時は普天普地熱するから熱殺すべき闍黎無し、故に寒時たとひ闍黎を寒すとも寒時は普天普地寒、故に寒獨り立て寒殺すべき闍黎は無い、故に。

【私記】 とは 正當到時の消息とは、上の正當寒熱到來時と同じ、全體の寒熱なく、ここをもて寒時はたとひ寒といふべくとも、熱時は熱といはざる闍黎もあるべきなり、參本いはく、一著落在、藏身

△辨、那、は
下割云、コノ
△辨、那、當
下割云、寒暑
△辨、那、到
下割云、來ノ
△辨、寒、熱
下割云、ノ
△辨、那、殺
下割云、ト
△辨、からず
ナシニ作り其
下割云、異本
なるべからず
トアリ

露角也、須知不染汚行足佛威儀、と」太好矣、みるべし」

【御抄】 本の詞に寒時寒殺闍黎と云とも又かならず、熱時熱闍黎とあるを、熱殺といはずともと云心也、此時熱殺すべき闍黎もあるべからずと也、至て親切の義也、只熱時法界を盡心なるべし。

【那一寶】 寒時寒殺闍黎と云とも、必しも熱時熱殺闍黎と云はずとなり、何則寒時寒殺する闍黎あるべからざれば、熱時熱殺する闍黎あるべからずと云ふなり、寒暑影略互顯して見時は如レ此、然れども只寒暑の上更に寒殺熱殺するものなきの底意を知べし、下の徹蒂徹蒂との玉ふ語を以て見よ。

寒也徹蒂寒なり、熱也徹蒂熱なり、たとひ萬億の廻避を參得すとも、なほこれ以頭換尾なり、寒はこれ祖宗の活眼睛なり、暑はこれ先師の煖皮肉なり

【聞解】 寒や徹蒂寒なり、寒は寒の全機現で寒の外に法無し、寒は徹蒂、ぞつこんのこる處無い寒なり〇熱も亦同意、何でも二つ并ばぬと知るがよい〇たとひ百萬億の廻避を參得するとも以頭換尾になり、處がへはならぬ、寒も暑も全機現なれば廻避すべき餘地が無い、故に廻避したと云ふ、やはり頭を尾に換へ右の肩を左の肩へ擔ひ換へる様なもの、廻避したでは無い〇寒はこれ……上如是なる道理じやから、寒暑は祖宗の活眼睛なり、暑はこれ先師の不生不滅の煖皮肉なり、生死は佛の恩命なることを知るべし。

【私記】 とは 寒熱の徹蒂は、寒熱の傳會にあらざるをいふ、たとひそこばくの廻避處あるも、ただまさに寒暑裡を廻避するのみ、寒暑の外に廻避處あるべからず、ゆるに以頭換尾なりといへり、頭尾は、ことなる身體にはあらざるなり、たとひこれ寒暑の頭尾なるのみ、渾寒渾暑づからの廻避なり、影

△辨、那、り
下割云、是ヲ
以テ詳看セヨ
億清本作億
△辨、肉下割
云、傳燈二十
一福州惠球和
倫之傳出
△那、り下割
云、同上

室いはく、是は萬億の廻避の處を參得すと云ふとも、寒暑の外なる廻避の處あるべからず、ゆるに以頭換尾なる道理なるべし、と參本いはく、以頭換尾、雪寶明覺禪師瀑泉集中、於參同契一句句著語、蓋回而更相涉下如是下語、今言渾寒暑自廻避故斯道得也しかあるがゆゑに、寒暑は活眼睛煖皮肉と云ふ

【御抄】 是は無別子細、寒なる時節は、全寒なるべし、熱なる時節は全熱なるべしと云也、にがきひさは、ほぞをとをしてもにがき也、いづくまでもとをして、無際限事を如此云也、苦瓠連根苦と云此心なるべし。

是は萬億の廻避の所を、參得すと云とも、寒暑の外なる、廻避の所あるべからず、ゆへに以頭換尾なる道理なるべし、此理を以て思へば我等佛にあらず、はるかにへだてたる凡夫とこそ、てづからすまへ、へだつれども寒暑の廻避の所が、寒暑なるやうに、佛ならずと廻避するか時が、やがて佛なるべし、以頭換面の理にてもやあるらむ、返々貴憑敷事也、此道理能々閑可了見者也。

祖宗活眼睛、先師の煖皮肉、古き詞を被引寄たるなり、實凡見の寒暑を思付たる心地にてこそ、此詞も被驚、今の寒暑の所談の上にては、尤此寒、祖宗の活眼睛なるべし、此暑尤先師の煖皮肉なるべき道理不可驚疑者也。

【辨註】 辨曰、たとひ萬億世界に廻避處を參得求するとも、寒暑の外なる廻避の處あるべからず、若別によりとせば尻頭とりちがふること、更什麼をか變易し動轉せん。

【那一寶】 たとひ萬億世界に萬億の方便をもつて廻避の處を參得追求するとも、寒暑の外なる廻避の處あるべからず、若別によりとせば尻頭とりちがへたること、更に什麼をか變易し動轉せん、閑黎の

語は指當體の詞なり、此祖宗活眼睛、先師煖皮肉の二句返照參究せよ、盡十方世界眞實人體、莫眼華一

淨因枯木禪師詞芙蓉和尚諱法成和尚云、衆中商量道、這僧問既落偏、洞山答歸正位、其

僧言中知音、却入正來、洞山却從偏去、如斯商量、不唯謗瀆先聖、亦乃

屈沈自己、不見道、聞衆生解、意下丹青、目前雖美、久蘊成病、大凡行

脚高士、欲窮此事、先須識取上祖正法眼藏、其餘佛祖言教、是什麼熱盃鳴

聲雖然如是、敢問諸人、畢竟作麼生は無寒暑處、還會麼、玉樓巢翡翠、金

殿鎖鴛鴦、師はこれ洞山の遠孫なり、祖席の英豪なり、しかあるに箇箇お

はくあやまりて、偏正の窟宅にして、高祖洞山大師を禮拜せんとすることを

炯誠するなり、佛法もし偏正の局量より相傳せば、いかでか今日にいたらん、

あるひは野貓兒、あるひは田庫奴、いまだ洞山の堂奥を參究せず、かつて佛

法の道間を行李せざるともがら、あやまりて洞山に偏正等の五位ありて、人

を接すといふ、これは胡說亂說なり、見聞すべからず、ただまさに上祖の正

法眼藏あることを參究すべし

【聞解】 淨因枯木禪師……この僧問は寒暑到來の偏位より問ひ來る、洞山の答は無寒暑で正位に居す

△那、誠下割云、炯明也

△辨、那、の下割云、活眼睛煖皮肉ノ

○其僧知音でよく洞山の言中に音を聞き知るから如何は無寒暑處と、却て入正來つた、そこで洞山正位に居てはならぬから、寒時寒殺闍黎と偏位に隨ひ去ると世間で云ふ、それは洞山を誇り瀆すと云ふものじや○不見道……夾山の語なり、聞中生解、それを意識の下へ持つて來て、丹青し繪をかく様にさまざま分別して正の偏のと云ふ、それは目前は或は偏に落つ、或は正に居すといへば、美にうるはししといへども久蘊で持て居れば病になる、法は其時に臨でこそ其機に對して用あれ、それを持て居れば病になる故に○行脚の高士は先づ佛祖の正法眼藏を識るがよい、此正法眼藏より見れば佛祖の言教も、熱椀鳴聲でわけも無いことなり○玉樓巢翡翠、金殿鎖鴛鴦、翡翠赤羽、翠は青羽、雌雄二鳥なり、鴛鴦もめをとりあり、底意は玉樓は一つもの、翡翠は二つもの、赤青二色を玉樓に添へて、正不正、偏不偏、一とも異ともいはれず、又金殿に鴛鴦を繡にしたる帳を掛けて鎖す、これも一而二、二而一、正偏回互を云ふ、上下二句で正偏兩位を離れて、走して兩位を圓にする、爰が無寒暑の處○爛誠はあぶりむしつける様に、きびしくいましめること○たゞまさに上祖の正法眼藏あることを參究すべし……洞山大師の言葉に假設五位接學人といへば、五位が洞山の本意では無い、ゆるに洞山に五位ありと云ふなり○五位は臨時應機でこそあれ、洞山のおてまへにはない。

【私記】とは 參本はいく、枯木禪師云衆中商量等者、蓋張氏編集碧巖集中有似之語、豈不斥之、不見道者、指夾山語耳、玉樓金殿句、焉偏頗見、行李是行李往來也、田庫田舍也、上祖七佛祖宗而已、とこれは震旦日域の後代、五位偏正の筈を執し、上祖の正法眼藏に味然たるものを誠勗したまふなり、後代の淺智、五位偏正を、易經の卦爻のごとく心得て、この語は偏なり、この語は正なり、これは君位なり、これは臣なりなど、情謂のあてくらべにのみなりて、その宗をしらざるを、

ふかくなげきたまへて、かくのごとく提耳したまふなり、ゆるに永祖の録中、一言の五位偏正におよべるなし、これ狂瀾をかへすの巧便なり、つつしんで遵行すべきなり」玉樓金殿の句は、無寒暑の作麼生是なり、不染汚といふべきのみ」

【御抄】 是は洞山の詞に付て、五位と云事を立て談之、此事を大に被嫌也、洞山の在世に全不被立五位、末師共是に注釋を下して、立五位不可用也、其を枯木禪師の示衆に此事を被示也、縱洞山の詞五位の淺深あるに似たりとも、今の了見には不可似者也、其と云は、所詮正をは君にたとへ偏をば臣にたとへむは、淺深輕重等を談ずる也、是を被嫌也、誠爭祖師の佛法に、淺深輕重あるべき●又此洞山五位をあしく心得所を不唯謗瀆先聖亦乃屈沉自己すとは被嫌也、次第淺深を立る事は、實打聞はうつくしう、心得安き様なる所を聞衆生解、意下丹青、目前雖美、久蘊成病とさけらる、いろどりうつくしき様なれどもつもりては、病に成るとは、遠解脫理所を如此被釋也、先須識取上祖正法眼藏とは、洞山の寒時寒殺闍黎、熱時熱殺闍黎の道理をしるべしと也、又熱椀鳴聲なむと云詞、何ぞやと覺たれども、椀にあつき湯を入れて、鳴聲何ともなき體也、今五位を各々立る事は程事也と被嫌詞也、玉樓巢翡翠、金殿鎖鴛鴦と云詞、又不審なる様也、御釋も不分明は、をぼつかなし、但玉樓翡翠の姿も、金殿鴛鴦の姿も、正に端嚴殊勝なれども、うつくしきすがたは只同事也、其心地欺、又今玉樓翡翠、金殿鴛鴦を、無寒暑の處と談せむ、更不可相違、如何祖師西來意と問せしとき、庭前柏樹子と答せしに、聊も不可違道理なり。

是は法成和尚を讚嘆詞也、已下如文、返々偏正の局量を被誠也、野猫兒田庫奴とは、いやしき物の事也、文に分明也、無殊子細、只上祖の正法眼藏を參究すべしとなり。

【辨註】 辨曰、枯木禪師の烟誠は偏正に窟宅して洞山を見るべからずとなり、結句の玉樓巢翡翠、金殿鎖鴛鴦、到這裡佛法論談、是什麼熱椀鳴聲。

【那一寶】 枯木禪師の烟誠は偏正に窟宅して洞山を見るべからずとなり、結句の玉樓巢翡翠、金殿鎖鴛鴦、到這裡佛法論談、是什麼熱椀鳴聲。

慶元府天童山、宏智禪師嗣丹霞和尚云、若論此事、如兩家著碁相似、爾不應我著、我即瞞汝去也、若恁麼體得、始會洞山意、天童不免下箇註脚、裏頭看勿暑寒、直下滄溟瀝得乾、我道巨鼈能俯拾、笑君沙際弄釣竿、しばらく著碁はなきにあらず、作麼生是兩家、もし兩家著碁といはば、八目なるべし、もし八目ならんば著碁にあらず、いかん、いふべくは、かくのごとくいふべし、著碁一家敵手相逢なり、しかありといふとも、いま宏智道の爾不應我著、こころをおきて功夫すべし、身をめぐらして參究すべし、爾不應我著といふは、なんぢわれなるべからずといふなり、我即瞞汝去也、すこすことなかれ、泥裏有泥なり、踏者あしをあらひ、また纓をあらふ、珠裏有珠なり、光明するにかれをてらし、自をてらすなり

【開解】 宏智禪師云、若欲論此事、如兩家著碁相似、爾不應我著、我即瞞汝去也、若恁麼體得始會洞山意……先づ此生死の一大事を論じ吟味せば兩方よりて碁を著に似たり、碁うつには、汝敵

△那、竿下割云、出水錄第四上堂部、△辨、那、傍、△下割云、傍、△辨、那、人、△下割云、眞、行、不應清本作、應不、

手は此方の我を負さんとして、我が著に應せず、背いてくる、此方の我は、汝を負さんと思ふから、汝を立てず、瞞してばかにする、汝は不應我、汝ぎり、我は汝を瞞じて我ぎり、汝を見ぬ、寒時は普天普地寒、獨り死の時は死ぎり、熱時は熱計り、生の時は生の全機現で、并ぶ法は無い、我は我で、唯我獨尊、死也全機現なり、かう合點せば、洞山の本意が知れるで有らう○これで合點せば洞山の本意は知れるで有らうが、これでも合點せまいから願して示人、裏頭看勿暑寒、裏頭はこと云ふ、人坐蒲團上の心地、こゝには寒暑生死は無い、直下滄溟瀝得乾……直下そこで大海に一滴も無いから立波べき水が乾いた、故に生の波も死の波も、寒の時なる波も、暑の波も起らぬ、波は水より生ず、心水が空なれば一切皆空なり○これから見れば、我道巨鼈能俯仰と、大海の水がよく乾いたから、海底にあるものを俯仰して自由に何でも拾ひ次第で、一大事因縁の巨鼈を其儘拾ひ取る、然るにをかしいことには笑、君沙際弄釣竿、一切の君學人が沙際の法水も無い、生死の中に立つて釣をとる、それでは一生この大事因縁の魚は得られぬなり、それが宏智が目からは笑しくもあり、氣の毒にもあるとなり○著碁はなきに非ず、有るけれども、兩家と云ふには、解し違ひが有りそうだから、もし兩家并んで敵身方と、向ふに相手を見てはいは、八目なるべし、それはほか目八目で、外から見るのじや、直に手を取つてうつつでは無い、いかんどうじやと責める、これは唯兩家と云ふ二字をとがめて、學人に寒暑でも、生死でも、もの、二つ并ばぬことを示すなり○いふべきを正直にいは、著碁一家敵手相逢なり、敵身方、上手同士とうつなれば、二人で無い、相手を不見一家なり、敵手相逢して互に相手を見ず、生は生ぎり死は死ぎり、相手をはなれて居る、かう云ふべきはずなり、然れども宏智の道取せらる、汝不應我著の心は意をおいて、丁寧に功夫すべし、爰を知れば兩家と云ふも一家と云ふも、

あやまらざるなり、汝は汝ぎりの道理を身をめぐらして知るべし○心をおいて功夫し、身をめぐらして知れと云ふは、身心の上で精く参究せよと云ふこと○われなるべからずと云ふなり、……汝は汝きり、我を立てぬから、われなるべからず、われでは無いと云ふこと○泥裏有泥……備と我との間、外の物をませず、二人無い道理をいはい、泥裏には、やはり泥あり、外のものなし、向ふの敵手をおとさんとする泥裏に泥あり、もし其泥裏に踏著し落ちなば、足を洗ふべし、好い手をうたば、纓を洗ふべし、外のものませぬ○珠の光明の自他を照すも、二つ無い道理を示す。

【私記】とは 宏智録第四^{四十}上堂の語なり、備不應我著、我即瞞汝去也とは、我汝は黑白の寒暑なり、不應は、相手にならぬをいふ、黑白寒暑の獨立なるなり、参本はいく、裡頭看者、向寒暑自頂顛眼睛上是也、故道勿暑寒其宗旨現成、謂直下滄溟瀝得乾、豈非渾寒渾暑渾廻避乎、以頭換尾、以尾換頭可知、我道句、是即寒暑自渾廻避也、而不行李此是道闡者、立正偏等沙際弄釣竿、則羽山山下笑具、天童亦胡蘆笑、と作麼生是兩家の謔語、はやくこれ廻避の消息を得たるかなもし兩家著碁といはい、八目なるべし、もし八目ならんは著碁にあらずとは、八目といふことしるべからず、影室の辨くだらず、参本は一向に辨なし、面山師の涉典録にもさたなし」恐按するに、和の後代著碁家のことばに、おかめ八目といへるあり、これなるか、しかあれども永祖の時代にこの語のありけるやらんしるべからず、しばらくこれによりて辨せば、いはく、黑白兩家の著碁といはい、寒暑は祖宗の活眼睛にして、寒暑づからなるがゆゑに八目なるべし、八目は傍觀者なるをもて對局者にあらず、これ對局者の外、傍觀者なきの宗なり、いはゆる備不應我著の獨立なり、こゝをもてもし八目ならんは著碁にあらずといへり、寒暑裡廻避しるべし」いふべくはかくのごとくいふべしとは、宏智の

道不是なりといふにはあらず、たゞ兩家著碁、備不應我著の一隅のみにあらず、著碁一家、敵手相逢の道理あることをあばき出すなり、黑白寒暑の著碁、もとこれ無寒暑の一家なるがゆゑに敵手相逢なり、敵手相逢は、いづれ優劣なき、渾寒渾暑の難兄難弟なり」なんぢわれなるべからずとは、なんぢわれは寒暑なり、われなんぢの獨立廻避なり」すごすことなかれとは、われのときなんぢを活捉し、なんぢまたわれを生擒するなり、すごすことなかれとは、放過せざるなり、好與三十棒なり、我瞞汝しるべし、寒暑すなはち廻避なり、寒暑の外に無寒暑處なし、われとなんぢの藏身露角は、一著落在なり、あだに我備に隱顯出沒をみるることなかれ、神出鬼沒なり、隱顯俱成なり」泥裡有泥は寒なり、珠裡有珠は熱なり、寒時寒殺なり、熱時熱殺なり、泥裡には泥を面目とするをもて有泥といふ、踏著とは、泥といふより縁をとりてふむといふのみ、泥裡の全身なり、すでに觸處生涯なるがゆゑに寒のとき暑をのこさざるか、こゝをもてあしをあらひまた纓をあらふといへり」珠裡有珠もまたしかり、珠裡を全體とするをもて有珠といふ、光明とは、珠といふより縁をとりていへるなり、これまた諸法實相なるがゆゑに、熱のとき寒をあまさるか、このゆゑにかれをてらし、自をてらすなり、いづれの處にか廻避するや、合取狗狗」

【御抄】若論此事と云、此事は洞山の五位を指なり、如兩家著碁相似と云詞ふと出きたり、被驚やう也、著碁とはご也、所詮此心地は、こは二人してうても、只八目也とは、八の字ぞ心得られぬやうなれども、只二人打とも、目は一つ也と云方を取なり備不應我著、我即瞞汝去也とは汝は汝なるべし、我即瞞汝去也と云時は、我外に汝なく、備不應我著なる時は、汝外に我なき道理也、如此體得すれば、始會洞山意とある也、寒時寒殺關黎理に符合者也、天童不免下箇註脚とは、天童と宏智の事を、

てづから、なのらるゝ歟、所詮我此事を註脚する事、免べからずと被仰也、仍此詞を被下なり、裏頭看勿暑寒、直下滄溟瀝得乾、我道巨鼈能俯拾、笑君沙際弄釣竿とは、裏頭を見にとは、此理を見ればと云詞也、直下もかはきて水もなし、沙際に弄釣竿とも、すくうべき物もなしと云也、是解脱したる心なるべし。

如前云、兩家著碁の道理、兩人相對に似たれども、只打時は目一也と云方を取なり、八目ならむば著碁に非すと云は、八目の方を談せむときは、著碁と云義はあるべからずと也、例一法獨立の姿なり、爾不應我著、我即瞞汝去也の道理なるべし、抑云べくは如此云べしと云詞をば、上に可付歟、下に可付歟と云事、先々沙汰ありき、下につくべき定に落居せり、然者いふべくは如此云べし、著碁一家敵手相逢と可談なり、但私に案之、上も下も其理不可違歟と覺ゆ、先に如此被定上は勿論事也、兩家著碁の理は、定前云、著碁一家敵手相逢の心地は、兩家の時は只目なる方の理を取、今は一家にて敵手相逢の姿を以て、法をあはさるゝ道理なるべし、但兩家と云ひ、一家と云ひ、八目といひ、敵手相逢と云へばとて、努々其義不可各別、只一法の上に兩家八目を談也、一家敵手の詞を談也、見不見、悟不悟、會不會程道理なるべし。

如前段云、汝は汝、我はわれなる道理を如此云なり。

此喩は汝與我、泥裏有泥とは云はるゝ也、足をあらひ、纓をあらふも泥也、所詮一物の外又餘物不交道理を云はむため也、珠裏有珠也と云も、只泥裏有泥の理なり、光明するにかれをてらし、自をてらすと云も、全光明の道理なるべし、凡今の正法眼藏の詞に如此喩共をひかるゝ事もあり、又世間出世の詞に渡て被書載事多之、其文に向て假令直下滄溟瀝得乾我道巨鼈能俯拾笑君沙際弄釣竿と云詞を、

此一一の文字に向つて、一づゝ是はいかなる事ぞと心得むとすれば、中々障礙ともなりぬべし、又其煩もありぬべし、只直下滄溟瀝得乾と云も、笑君沙際弄釣竿と云詞も、所詮一法究盡の道理を云詞ぞとをしひたたけて心得れば、無煩事也、所詮能々閑可功夫參學事也、返々不可倉卒事也。

【辨註】 辨曰、因_ニ什麼_ニ 自他師學隔別するやと工夫すべし、著の字は碁の一手を著と云ふ、宗門に一著子と云ふは宗乘の一手の事なり、一物禪の師は決して一著子と云ふ物ありと思ふ、愚哉。

辨曰、爲_ニ什麼_ニ 遭_ニ師瞞_ニ 那、自己を返照して參究せよ。

辨曰、此語脱簡あるか、如今辨するに水裡有泥則足を洗ふべし、泥裏有_レ水則又纓を濯ふべし。

辨曰、自他なんぞ隔別せん、已下は洞山の本意不通、逐語句族を抑下なり。

【那一寶】 因_ニ什麼_ニ 自他師學隔別するやと工夫すべし、著字は碁の一手を著と云ふ、宗門に一著子と云ふは宗乘の一手の事なり、一物相似の師は決して一著子と云ふ物ありと思ふ、愚哉。

爲_ニ什麼_ニ 遭_ニ師瞞_ニ 那、自己を返照して參究せよ、一説爾不應_ニ我著_ニ は爾の外に我なり、我即瞞_レ汝去は我の外に爾なり、一家著碁の宗旨と見るなり。

上章に宏智の汝不應_ニ我著_ニ、我即瞞_レ汝去と云ふごとく、無寒暑の宗に通せざる輩は、却て洞山宏智に瞞じ去らるゝなり、然れども其瞞去の正當恁麼時、甚麼邊の道理現成すとすごさず、返照すれば泥裏只有_レ泥て纓を濯ふにも足を洗ふにも是を用て盡界餘物なく、瞞は瞞に任せて通天の活路あるべしと、古語を轉換して用ひ玉ふ、珠の時も亦爾り、彼を照し自ら照して、自他なんぞ隔別せん、著碁一家敵手相逢、餘人所不見の一著子なり、古佛弄處の活手段を參究せよ、是より已下の章には不通_ニ洞山本意_ニ、逐_ニ語句_ニ 族を抑下し玉ふなり。

踏福本作踏
△辨、取踏ヲ
踏踏△那、取
踏ニ作ル

夾山圓悟禪師詞五祖法演禪師諱克勤和尚云、盤走珠、珠走盤、偏中正、正中偏、上句は定慧一枚の句、正偏宛轉の義にもなる、下句は正偏一枚、偏中の寒暑が其儘、正中の無寒暑、其儘偏位寒暑を具へて居る、洞山大師寒暑正偏宛轉無礙なる行李は、羚羊掛角無跡、有にも無にも、跡が無いから、無寒暑の正位からも、寒暑ある偏位からも、どうも窺はれぬ、それ故に其羚羊を目がける獵狗遠林究蹤踏す、蹟は蹟踏とついで、つまづきたるゝなり、底意は獵者の使の狗の參學人が、林を遠り尋ても、正からも偏からも見へぬから、手前で、疲れて蹤踏とつまづきころぶなり○林いま獵狗を遠……所の林が、能の獵狗を遠る、能所一枚を明す、底意は能所一枚の洞山の行李は、能所を見る境界からは、窺はれぬと云ふ心なり。

【聞解】 圓悟禪師云、盤走珠、珠走盤、偏中正、正中偏、上句は定慧一枚の句、正偏宛轉の義にもなる、下句は正偏一枚、偏中の寒暑が其儘、正中の無寒暑、其儘偏位寒暑を具へて居る、洞山大師寒暑正偏宛轉無礙なる行李は、羚羊掛角無跡、有にも無にも、跡が無いから、無寒暑の正位からも、寒暑ある偏位からも、どうも窺はれぬ、それ故に其羚羊を目がける獵狗遠林究蹤踏す、蹟は蹟踏とついで、つまづきたるゝなり、底意は獵者の使の狗の參學人が、林を遠り尋ても、正からも偏からも見へぬから、手前で、疲れて蹤踏とつまづきころぶなり○林いま獵狗を遠……所の林が、能の獵狗を遠る、能所一枚を明す、底意は能所一枚の洞山の行李は、能所を見る境界からは、窺はれぬと云ふ心なり。

【私記】 とは、これ寒暑にあとなき宗なり、盤走珠珠走盤、珠盤同走してあとなし、偏正ともに中なるをもて偏中正、正中偏なり、寒暑づからの没蹤迹なり、獵狗が鹿などのあとを逐失ひ小足をひらう體たらくを空蹤踏といふ、ともにあとなきなり、羚羊いまは空に掛角せりとは、空これ羚羊角なり、林いま獵狗をめぐるとは、獵狗のめぐるとは、林のめぐるとは、みな影象なきなり

【御抄】 至てよき珠は盤上に住著なしとて、留事なくまわるなり、其を云詞に、珠盤に走と云を今夾

山は盤珠にはしると云詞を被云出、是を光前絶後古今罕聞也とは被讚嘆也、いかにも正はまさり、偏は劣也と思所を、返々被嫌なり、偏中正、正中偏とは只偏正共に無差別所を如此云也、羚羊掛角無蹤迹獵狗遠林空蹤踏とは、かもししと云物は、跡を人に知せしとて、角をいわ木なむどに掛るなり、是はあとなき、解脱したる心地に仕詞也、獵狗遠林空蹤踏と云も、たとへば獵師の狗なむどが、鳥鹿等を、かきめぐれども、あたる物なき風情を云詞也、是も同解脱の詞なるべし。

是は先師御詞也、盤珠に走と云程の道理なるべし、實羚羊空に掛角せる姿も狗こそ林を廻つるに林いま獵狗をめぐると道理、尤盤走珠同心なるべし。

【辨註】 辨曰、洞山の偏正の語句、尋常に不可見示さるのみ。

【那一寶】 洞山大師の偏正の語句、尋常に不可見示さるのみ、不可鑿解。

慶元府、雪竇山、資聖寺、明覺禪師嗣北塔祐和尚諱重顯和尚云、垂手還同萬仞崖、正偏何必在安排、瑠璃古殿照明月、忍俊韓獪空上階、雪竇は、雲門三世の法孫なり、參飽の皮袋といひぬべし、いま垂手還同萬仞崖といひて、奇絶の標格をあらはすといへども、かならずしもしかあるべからず、いま僧問山示の因縁あながちに垂手不垂手にあらず、出世不出世にあらず、いはんや偏正の道をもちあらんや、偏正の眼をもちあざれば、この因縁に下手のところなきがごとし、參請の巴鼻なきがごとくなるは、高祖の邊域にいたらず、佛法の大家

を覷見せざるによれり、さらに艸鞋を拈來して參請すべし、みだりに高祖の佛法は、正偏等の五位なるべしといふことやみね

【開解】 雪竇禪師云、垂手還同萬仞崖、同山の垂手し爲人する如は萬仞崖にして、足向けがならぬ、偏位に其まゝ正位を兼て兩位を圓にする、それゆゑに正偏何必在安排、正偏と云ふが何ぞどうして、前方より安排し考へ定めて、是は偏、是は正と位を定めて置くことなし、其場に臨んで正も偏もあるなり○洞山の安住せらるゝ處は、瑠瑠古殿照明 ……瑠瑠の正位を偏位の明月が照す、正偏回互自在自然の道理安排を離れたものそれを知らず、忍俊韓獝空上階 ……忍俊は俊利な處を、忍びこらへて、藏して出さぬことなり、これ程利根な韓家の犬なれども階を照す瑠瑠殿の、月影を見て人かと誤て吠へる、其如く學人が正の偏のと月影計りを空くむだにとらへて、洞山の本意を知らぬ○偏正の眼を用ゐざればこの因縁に下手の處なきごとし、參詳の巴鼻なきか、高祖の邊域にいたらぬ ……洞山の方で偏正の眼を用ゐざれば、どうも此因縁に手が付かぬ様に思ひ、又偏正をいはねば此公案に取りつきはの、巴鼻が無うて參じて詳にすることがならぬと云ふは、洞山高祖のかた邊へもつくことはならぬ○佛法の大家 ……佛法なめての括り目をしならした處を見ざるによりて、洞山の佛法は五位に在るなど、妄計す。

【私記】 とは 參本いはく、此箇一頌、從來無_レ答、而今_レ舉_レ之、云云批評、無_レ佗、宋禪及本邦參學、往往惑_レ張本等、碧巖集評唱、而邪解紛紜、今爲_レ之故、曰破斥恁麼、とまたいはく、明覺禪師豈其爾乎、豈其爾乎、今是爲_レ欲_レ相_レ見雪竇山、親言親口、謂出世下出世等言、則存_レ評唱中、豈明覺圖悟本分乎、嗚呼

【御抄】 はじめの詞は雪竇を被讚嘆なり、垂手還同萬仞崖と云事は、たとへば垂手は物を道引心地、又衆生を濟度すなむと云心地と聞ゆ、萬仞崖と云は、高き岸なむと云べき歟、是則引導の心地にあたるべき歟、然而今の所談しかあるべからず、垂手の詞も、能々可存知事也、垂手も只手ををろして、衆生を引導するとは不可心得也、垂手の詞も、無邊際道理なるべし。

僧問山示とは、僧の問_{寒暑到來如何}、山示とは洞山の答の詞を云也、是は寒暑到來の詞を、只普通の問の詞に不可心得、今の垂手不垂手の詞も出世不出世にあらずと云も、今所談の寒暑の詞に同く可心得と云也、又偏正の道を、差別淺深を立て、不可心得となり。

是は洞山の偏正の詞は、淺深差別なると心得て、此偏正の眼を用ざれば、この因縁に下手の所なきが如しと心得は、參請の巴鼻なき也、高祖の邊域にいたらず、佛法の大家を覷見せざるによれりと彼嫌なり。

草鞋を拈來してとは、只能々不等閑可參學と云心地也、已下如文、正偏等の五位の淺深差別あると云ふ見解を大に被嫌也。

【辨註】 辨曰、此雪竇頌、古佛註解甚疑し、教缺_二辨註_一耳。

【那一寶】 此雪竇頌古佛註解、書消書添ある本を寫誤するか疑耳、雖然然強力解説するに、雪竇垂手還同萬仞崖とは、洞山の如今の答處超佛趣祖奇絶の標格あることを、あらはさるといへども必しも當時學人しかの道理を知らず、洞家には偏正五位を以て向上の宗乘とするのみ覺へて、如今僧問山示の因縁には強ちに垂手不垂手、出世不出世、言句をも不用、況や此答話に偏正の眼をも用ひざれば、此問

答の因縁には匠師、爲人下手の處なきが如く思ふ、偏正の眼とある眼、字は語、字の寫誤ならんか、語、字にて好し、恁麼の人は眞實洞上の參學請益の巴鼻なきが如なるは、高祖の邊域に至らず、まだ佛法の大家を觀見せざるによれり、故に夫底は草鞋を買來、捨得して審細に參究請益すべし、みだりに高祖の佛法は偏正の五位にありとのみ云ふこと止、この故に雪寶も正偏何必在安排、今の學人の偏正を以て計較卜度することは瑠璃古殿照明月、忍俊韓獺空上堵となり。

東京天寧長靈禪師守卓和尚云、偏中有正正中偏、流落人間千百年、幾度欲歸歸未得、門前依舊草芊芊、これもあがなちに偏正と道取すといへども、しかも拈來せり、拈來はなきにあらず、いかならんかこれ偏中有

【開解】天寧禪師云、偏中有正、正中偏、……法の道理は、かうしたもの、先づ偏位からいへば、流落人間、一百年、此僧寒暑廻避を問來せるは、人間今時に流落するなり○幾度欲歸歸未得、此僧無寒暑の處へ歸らんと欲するは正位、歸ることを不得、人間に流落するは偏位なり、門前依舊草芊芊、これは正中偏を明して、久遠今時一枚に云、門前依舊までは正位、草芊芊は今時、無寒暑が、其寒暑と云ふ心で、裏に寒暑が、其儘無寒暑と云ふ心を持つて居る○いかならんかこれ偏中有……どこを見て偏中有正と云ふぞ。正法眼藏春秋卷開解終(編者云、以下の開解は王三昧篇中に混雜せり、今擧げて此篇に加ふ)

【私記】とは、偏中有正正中偏は、圓悟の偏中正、正中偏と同意なり、流落人間千百年は、寒時寒殺の面目、正當到時の消息なるがゆゑに、流落人間千百年の全機なり、ここにもて欲歸歸未得なり、人間の外、無寒暑處なる歸處なし、觸處生涯の渠無國土なり、このゆゑに沒蹤迹の門前依舊草芊芊なり、依舊は、もとよりあるものを、とりのぞけず用だてるなり、寒時寒殺開黎熱時熱殺開黎なり、あながちに偏正と道取すといへども、しかも拈來せりとは偏正不曾離本位なり、偏正といふといへども本位を拈來するがゆゑに二邊にはあらず、拈來せるは偏正なるがゆゑに、拈來はなきにあらずといへり、いかならんかこれ偏中有正は、這裡是什麼處在說偏說正なり、偏正の八面玲瓏なり、參本はいく、而今若何是偏中有者、一口吞盡二三四句、作麼生吞盡、と、影室、偏中有に作りて正字なし、有無ともに通ず、偏正を撈する語なり

【御抄】偏中有正、正中偏と云事は、所詮偏正取捨の心地をすて、偏正只一なる道理を被明也、又流落人間千百年、幾度欲歸歸未得とあれば、只我等が人間に千百年ありて流落したるやうに聞れども不爾、流落人間理り、欲歸々未得とあり、實何へか可歸歸へき道理のなき所が佛法の理にてあるなり、流落人間千百年なむと云も、かすにか、はりて心得又人間も流落の詞も、仰凡見不可心得也、盡十方界の道理を、流落人間とも、此上に又千百年と云道理をも可談なり●門前依舊草芊芊と云々、草芊芊とは只草の外に物なき道理なるべし、草芊芊と云へば、いづくまでも草なるべし、餘物交るべき物なき道理也、是解脱の詞也。

是は偏正とは道取すと云へども、淺深取捨の義にあざれども、しかも此詞を拈來せりと云心也、拈來はなきにあらず、いかならんかこれ、偏中有とは、例のいかならんかこれの詞、非不審、偏中有か非私道理、如此いはるゝなり。

【那一寶】偏中有正正中偏とは、本然不動無名可名、無有變易、強名曰中、雖正而偏雖偏而正、圓兩意之圓字只是這中之義也、偏中有正正中偏、此一句に五位一圓の道理洞然たり、流落人間

△辨、那、も、
下割云、只是
偏正ナ
△辨、那、リ、
下割云、偏正
ノ語句、
△辨、中ナ正
ニ作ル

千百年とは偏より正に去り、正より偏に來る、如是流_{スル}落_ル人間千々百々年、幾度歸家思_ハ作_ルといへども歸_レ未_レ得_ル、門前依_レ舊草_々、出_レ門便是_レ艸、直假_レ不出_レ門亦是_レ草、當_レ知歸_レ家不_レ坐_レ白雲床、出_レ戶豈_レ行_レ青艸地、南北東西本自由、渠無_レ向背_レ那_レ廻避、拈來不_レ無_レ、如何ならんか是偏中有と、正字を略去し玉ふ、審細に著眼看せよ、今此有は始有に非ず、本有に非ず、妙有妄有に非ず、又不_レ道_レ無_レ、是古佛の眼睛頂頓なり、雖_レ然_レ如是眼睛一度被_レ人換_レ却木_レ棧子_レ了_レ、獨體有時被_レ人_レ借_レ作_レ尿_レ杓_レ了_レ、名有_レ恁麼時節_レ方始_レ可_レ得_レ、諦觀諦觀。

潭州大滸佛性和尚_{嗣圖悟}云、無寒暑處爲君通、枯木生華又一重、堪笑刻舟_求劍者、至今猶在冷灰中、この道取いささか公案踏著戴著の力量あり

【聞解】大滸佛性和尚云、無寒暑處爲君通……君は此僧を指す、枯木の無寒暑に寒暑の花が生ず、寒暑無寒暑二つ無し、それを不知者は堪_レ笑_レ刻_レ舟_レ求_レ劍_者、至今猶在冷灰中、舟は疾_レ劍_レを落した處を過つるを不知、こゝから入らば劍を得べしと舟を刻む如く、洞山の本意は其時こそあれ、それを不知、言葉をとらへて寒暑といへば正偏のこと、舟を刻むのがをかしい、それ底はいつまでも二乗空無の冷灰中に在つて洞山高祖の般若の利劍を得ることはならね、寒暑の外に無寒暑を求むるは二乗冷灰の小兒なり。

【私記】とは 寒暑到來如何廻避と、とへば、何不向無寒暑處去と答へ、如何は無寒暑處には、寒時寒殺等、これ無寒暑處爲君通、枯木生花又一重なり、寒暑は枯木か、無寒暑は生花か、寒時寒闍黎、これ枯木生花なり、再問に再答なるがゆるるに又一重なり、しかあるに此僧のみにあらず天下の參學

△辨、那、重
下割云、前二
所_レ言頂頓上
眼睛裏_レ現成
是也
△辨、那、中
下割云、此二
句_レ指_レ無_レ生
花_レ暖_レ氣_レ有_レ氣
息_レ之_レ死_レ人_レ
△辨、那、取
下割云、雖_レ
無_レ過量機

が、寒暑にさざをつけて無寒暑をたづねるは、可笑ことかなと、なげきながらに無寒暑の宗をあらはすなり、冷灰中は、寒暑裡なり、これ雪竇の慧超問佛を頌して三級浪高魚化龍、癡人猶辱夜塘水と、意味同じ、公案踏著戴著の力量とは、この公案を自由にとりまはす力量あるをいふ、參本はいく、二句有_レ踏著_レ力_レ、三四戴著_レ、謂_レ刻舟_レ求_レ劍_、錯認無寒暑、進步_レ足_レ下_、終不_レ活_レ鱖_レ鱖_レ地_、と、このわりつけ局せり、美味通すべからず

【御抄】二乗をば、枯木死灰に喩る定事也、枯木はいたづら物と思に、花さくと云へば、あしかりつる徒物の又よくなりぬるやうに覺ゆ、劍ををとしたりし、水上にて、後に求めむするしに、舟のはたをさざみたりし事ありき、愚痴なる喩に被引事也、但今の二乗も、枯木死灰と被嫌とも、法華開會の時、皆當成佛とて、劫國名號を被授時は、更二乗とて別に非可弃置、其定に無寒暑の道理の方より見れば、枯木とて暫も可嫌所なし、刻舟求劍所もいたづらに非可捨、死灰も全いたづらなる義にあらず、皆是無寒暑の道理なるべし、洞山詞に、何不向無寒暑所と云へば、寒暑のあしき所をさりて、無寒暑のよき所へ向と被仰たるやうに心得て、今の枯木生花詞も刻舟求劍詞も、在冷灰中詞を、善惡取捨の心地に心得べきを、今の無寒暑の所がやがて、寒暑にてある道理を心得やうに枯木死灰の當體、刻舟求劍所もやがていたづらなる物にあらず、寒時寒殺闍黎の道理に可心得合也。公按踏著載著とはほめられたる詞なり、聊とあれば、拔群の義にはあらざる歟。

泐潭湛堂文準禪師曰、熱時熱殺寒時寒、寒暑由來總不干、行盡天涯諳世事、老君頭戴楮皮冠、しばらくとふべし、作麼生ならんかこれ不干底道理、

△辨、那、冠
下割云、是什

速道速道

△那人、道下割云、者裏大殺活ノ有ル處

【開解】 文準禪師云、熱時熱殺、寒時寒殺……熱する時は、普天普地熱して闇黎を熱殺して、あつと思ふものが無い、寒時も其通り、故に寒暑で寒暑を透脱して居るから、もとより總て寒暑に不關、取りあはぬ、寒は寒の幕に徹して寒と云ふ、沙汰が無い○故に寒暑由來總に不關なり、此道理は容易には知らぬから、行盡天涯語世事、雪辛霜苦して天涯を行盡、走して寒暑が其儘無寒なる世事を諳じ合點したい○行盡天涯は今時諳世事には、必ず世を透脱する道理ある故に久遠也○修證一枚の境界を得てから老君頭戴楮皮冠、本尊貴の老君なれども、しばらく第二義門に下つて不相應なる鄙き楮皮冠を戴いて、若い者のする狂言を賣弄するなり、無寒暑行李で寒暑の處に出るなり、此公案を上でいへば洞山大師……行李なり○しばらくいふべし、作麼生ならんかこれ不關底道理、速道々々、寒暑は先師の暖皮肉、生死は佛の御命なるを不關と云つて、どこへのがれるぞ。

【私記】 とは 寒闇黎熱闇黎のゆるに總不干なり「天涯は、無寒暑第一義天涯なり」行盡は、周徧なり、逼塞太虚空の宗旨なり、無寒暑の通天徹地をいふ「世の事は、寒暑裡なり」諳は、悉也、曉也、世事をさとし、つくし、わがものとするなり「寒時寒闇黎の義なり」老君は尊貴なり「楮皮冠は、賤者の服なり、寒暑裡の楮皮冠を無寒暑の老君の莊嚴とせるなり、寒暑づからの頂額眼睛なり、參本いはく、速道速道故、寒渾淪暑全機、由來不免總不干、箇裡無物、諳世事者、由行盡寒暑自天涯、是時面孔、之稱老君、塵中能作主故、又時中無事、化外自來賓、是以戴楮皮冠、隱寒暑裡」とよし

【御抄】 不干底とはをかさぬ詞也、寒時は寒時にて盡し、熱時は熱時にて盡上は、實何かをかすべきぞや、物ををかすと云は、相對の上には是が彼をかすと云事は有也、一法究盡の上は實不干底の道理なるべし、行盡天涯語世事とは、假令盡十方界なむと云心地也、天を行盡したらむ、實法界を盡したる道理なるべし、此姿諳世事心地なるべし、老君頭戴楮皮冠と云は、此老君には、孔子老子の老子歟又只老耆歟二義あるべし、追可決事也、是も先々此詞沙汰不委、然而三界の詞に一心をつけ、佛性の上に狗子をつけたる程の心地を如此可云歟。

作麼生の詞、如例即不中道理也、速道速道も非待詞、作麼生詞不干底の道理、速道速道といはるゝ也。

湖州、何山佛燈禪師 嗣大平佛鑑慧勲禪師 諱守珣和尚 云、無寒暑處洞山道、多少禪人迷處所、寒時向火熱乘冷、一生免得避寒暑、この珣師は、五祖法演禪師の法孫といへども、小兒子の言語のごとし、しかあれども一生免得避寒暑、のちに老大の成風ありぬべし、いはく一生とは、盡生なり、避寒暑は、脱落身心なり、おほよそ諸方の諸代、かくのごとく鼓兩片皮をこととして、頌古を供達すといへども、いまだ高祖洞山の邊事を覩見せず、いかんとならば、佛祖の家常には、寒暑いかなるべしともしらざるによりて、いたづらに乗冷向火といふ、ことにあはれむべし、なんち老尊宿のほとりにして、なにを寒暑といふとか聞取せし、かなしむべし祖師道廢せることを、この寒暑の形段をし

△辨、那、リ下割云、今日ノ一生ヲ盡スノ義ニアラズ生々無二第二生前來如明いふ、清本無二といふ、

り寒暑の時節を経歴し、寒暑を使得しきたりて、さらに高祖爲示の道を頌古すべし、拈古すべし、いまだしかあらざらんば知非にはしかじ、俗なほ日月をしり、萬物を保任するに、聖人賢者のしなじなあり、君子と愚夫とのしなじなあり、佛道の寒暑、なほ愚夫の寒暑と、ひとしかるべしと錯會することなかれ、直須勤學すべし

【聞解】 佛燈禪師云、無寒暑處、洞山道……寒暑の上で無寒暑の道理を洞山は道取し示さる、ければども、多少禪人迷處所、あまたの禪人が寒暑が無寒暑と知らぬから、人人をり處に迷つて尻がすはらぬ○手前どもは寒時向火熱乗冷、寒い時は火にあたり、あつければ納涼し 寒暑がすぎと世話にならぬ、一生免得避暑寒、寒暑に在りながら、寒暑を免れて居るから、寒暑を避けて別に無寒暑の處を尋ね廻りはせぬ○小兒子の言語のごとし、これは暑さ寒さのこと、計り見るのが永平初祖の心に契はぬなり○のちに老大の成風ありぬべし……後に思ひつけて法に老けたるひきも有るべし、成風はおとをなすと訓ず、莊子の文字○いはく一生とは盡生なり……其方は知るまいがそなたの云ふこと、一生とは盡生ことなり、生を究めて見れば生は生で盡きて居る、こゝを一つの生と云ふぞ、避暑暑は脱落身心なり……寒暑の無い處へ到れば身心脱落なり、其方は知るまいから云つてきける○託古人一學人に氣を付るなるべし○しかあらざらんば知非にはしかじ……走無くば、先づ前の非を知るがよい。

【私記】 とは、洞山の無寒暑處と道得せられしを、多少禪人この無寒暑の處所に迷却して、らちあかぬとなり、その無寒暑處は、寒時向火熱乗冷なり、しかあれば一生免得避暑寒なり、觸處の迴脱なるがゆるに、處として迴避にあらざることなければ、迴避すべき寒暑なし」成風は、郢石が手段をいふ供達は、のべたてると、いはんがごとし、供設也、設陳也」餘は文義しるべし」

【御抄】 是は寒時向火、熱乘涼と云詞を小兒子の言語の如しとはさげらる、也、一生免得避暑暑の詞を、後に老大の成風ありぬべしとはいけらる、也、實寒時向火、熱乘涼の詞非佛法也。

是は開山御釋なり、一生の詞、避暑暑の詞を如此可心得と被釋なり。

鼓兩片皮とは、つゝみをば兩方に皮をはりて打也、其定に偏正の得失を定め、寒暑を二に置いて心得を如此云也、此心地にて頌古を供達すと云へども、高祖の邊事をば覩見せずと被嫌也。

高祖洞山の邊事を覩見せず、佛祖の家常の寒暑をいかなるべしともしらすしては、頌古拈古せざらんにはしかじと云也、已下如文、能々實直須勤學すべき事也。

【辨註】 辨曰、此篇脱簡妄加あるに似たり、好本を求覓せよ。

【御聽書抄】 ▲この草子に春秋の名目あれども、春秋の詞なし、そのゆへに春秋なべての春秋にあらず、寒熱にてならふべし、寒暑がさむくあつき本意にてなし、世間にいふ寒暑にてなからむ上に名目の春秋とても四季とたてたる、春秋とのみ思べからず、此道理を思ふ時は、春秋と云名目が、詞に見ぬぞ、草子の義にかなはぬぞ、なむと云べからず、寒暑の道理にて、佛法をとくゆへに、季節に付て春秋とはいふなるべし、但又寒暑につかば、夏冬とも、冬夏とも云はむこそ、いますこしとりよたる風情なるべけれども、必しも寒暑、春秋が、大切ならぬ上は、たゞ風情詞の打聞たるか、春秋と云は、艶にきこゆるときに、名目は春秋とあるかと心得べし▲凡は寒暑到來せむに、如何迴避せむと僧問する答に、師云何不向無寒暑處去とあり寒暑なからむ處は、春秋こそ極熱極寒あるまじければ、

春秋ともなどか思よらざらむ、其上佛道には、都寒熱もあるまじ、又守珣和向詞、寒時向火、熱乘涼とあり、是小兒子の言語さらはる、誠有謂、但一生免得避寒暑と云所を、一生は盡生なりなむと、解脱せば其期なかるべきにあらずとも心得、叢林に一生を盡さむ、迷なるべからずと見たり、すべて段爾、或偏正をたて、或殺闍黎と談じて、令避寒暑、又刻船求劍は、至今猶在冷灰中ぞなむと云も、瑠璃古殿に照明月、忍俊韓獪空上階とあるも、羚羊掛角無蹤跡、獵狗遠林ぞ、或又林遠狗ぞなむと云、滄溟瀝得乾、巨鼈能俯拾、笑君沙際弄釣竿ぞ、兩家著碁ぞとあるも、所詮無能所無彼此いはれなれば、春秋をも世間に心得まじ、このいはれどもを以て可了見者歟、盤珠に走も、林遠狗と云も、皆同心也▲此春秋の名目を心得むと思はば、無寒暑を知るべし、無寒暑の處を知むと思はば、洞山の偏正のぎを心得べし、偏正のぎ知むと思はば、洞山の本意を知るべし、洞山の偏正のぎと、諸教に談する偏正とは多かはるべし、高祖の佛法は偏正の五位と心得るは、轅を北にして如向越なるべし、重顯和尚、垂手は正偏何必在安排とあり、かならず安排あらむは、偏正なるべきか、此草子の名春秋とあり、能々可了見也、寒熱につかば、冬夏と云か、不然者無寒暑と云か、將又正偏の義と云べきかとも、方々に可了見也▲西天東地佛祖多此因縁を現成の面目とせりと云ふ、此事前後相違ときこゆ、そのゆへは、悟本大師の見處は、悟本大師已後の面目とこそすべけれ、震旦の祖だにも、悟本大師已前は面目としがたし、いはむや西天をや、いはむや佛をや、但過去の諸佛は、釋迦牟尼佛の弟子也と云ふ、悟本大師の見は向上向下に可用と也、且は神通の時、大瀉の遠孫にあらざる、すなはち大瀉の遠孫也と云此心なるべし▲今の如何廻避の心は、寒暑に不可限、三界到來せむとき、如何廻避せむといはむが如し、又諸法到來せむときは、實相の所に向て、廻避せよとも云べし、廻避は殺の所にて廻す

る也、ゆへは寒暑の外に我なき所を、殺著闍黎とは云也、一切衆生は佛性の爲に殺とも、諸法は實相の爲に殺せらるゝとも云べし▲正當寒到來時正當熱到來時の參詳看と云ふ、たゞ寒也全機現熱也全機現と云心也、三界を火宅と云て、さらふ時あり、唯心と云ひてとる時あり、又三界の内有情非情を置て有情を正法ととり、非情を依法ととる、如此自他をつくるときは、吾我もあり、名利もあり、寒熱を境につくりて、廻避の所を求むるときこそあれ、無寒暑の所が、殺闍黎なれば、依正ををかす只熱時熱なり▲三界無安猶如火宅ときらふ、辛苦ひまなく、穢惡充滿す、三界唯一心と談するとき、三界の法皆唯心とす、又不如三界見於三界とも談じ、豈離伽耶、別求常寂光土、非寂光外別有娑婆とも談ず、善惡の心地を置て談するときこゆ、しかにはあらず、無寒暑の所は、頂額上眼睛裏也▲殺闍黎と云ふ闍黎は僧をさす殺と云は證すと云ふ心なるべし▲寒時たとひ道寒殺也とも、熱時かならず熱殺道なるべからずと云ふ、道の字前後に置替る事殺の字の中終に也、寒熱の字初中になる事、無別義前後中間にかゝはらざるゆへに、又寒熱を必二に、ときあらはさむと思はざるゆへに、熱時必しも熱殺道なるべからずと云ふ、寒熱不用也、所詮佛法の能所彼此の差別なき所を、寒暑の到來廻避なむと云也▲寒はこれ祖宗の活眼睛也、暑は是先師の煖皮肉也と云ふ、寒熱の大切に非すと云ふ、此心にあきつけし、所詮祖宗の眼睛也と也、先師とさすは、必其人をさだめたるには非ず、煖皮肉をとらむゆへ也▲淨因枯木禪師段 和尚と云は枯木禪師法成の事也▲偏正と云はたとへばもの、端と中とを云ふ、權實を竝ていたすが如し、いま洞山の五位とて、此偏正をいだしていふ、偏中正、正中偏、偏正▲この義きはめてうたがはし、又雲門の三句なむと云も、世間に談するが如くならば、佛法とも難取、雲門意旨難知也、三句とは隨波逐浪、國蓋乾、抑偏中正と云は正因了因縁因の三佛性と云事あり、是にあたるべ

き歎、教に偏正の義をたつ、こなたにも其理こそ、かはれども、云ふまじきにてはなし、然而五位をたつるを洞山の本意と云事あるまし、五位を立て云はむ不可用也▲洞山答歸正位と云ふ、是は何ぞ不向無寒暑處去と云詞をさす也、是も衆中の商量にてこそあれ、歸正位と云も、難用、落偏と云ことばに對して云ふときに、正位なるべからず▲其僧言中知音却入正來と云ふ、其僧と云も、洞山に問答の僧の事也、言中知音と云無別義、たゞことはと云也、入正といへど、正法にはあらず、衆中の商量なれば、偏正の正なるゆへに難取▲洞山却從偏去と云ふ從偏もてゆくと心得ば、傍人詞也非可用也▲不見道聞衆生解と云ふ、此云人は、枯木禪師也▲玉樓翡翠金殿鑲鴛鴦、此句は頂顛眼睛と云程の事也、枯木の見處をのぶるに、玉樓金殿と云也、以正偏義不可談、衆中の意巧也、以洞山五位偏正の義を云は、一向邪なるべし、今の洞山は更非洞山の本意也▲無寒暑處とて、いかなる所を出事なし、たとへば神通を云とき、手巾來、一椀水をも神通と云程に、玉樓金殿をも、今の五位をも無寒暑とさす也、無別義也、寒暑一方に不可取事、玉樓金殿とも、翡翠鴛鴦とも云なり▲宏智禪師段○笑君沙際弄釣竿、若論此事と云ふ、熱時閑黎の事也▲爾不應我著と云ふ如詞、なむぢわれなるべからずと也、我著瞞汝といふ、兩人の義必一家著基と心得べし我が瞞汝故に我一人也▲天童不免下箇註脚といふ、此天童はやがて、正覺和尚事なり、下註脚とは直下滄溟以下の詞をさすなり、仍不免、裏頭看勿寒暑といふ、滄溟溼得乾といふ、無寒暑の心也、海したりかはれば、かめもひろひとらる、水なければ、いさごばかりなるにつりごを、弄すれば、笑ふべしとなり、無別義▲八目なるべし、もし八目ならむ著基にあらずと也、八兩半斤なむと云程の詞也、兩家といへども、一家なる道理也、著基一家敵手相逢と云も、一人著基をうたむには、敵手なければ、一人が手は相逢なればなり、凡此著基を世間の如く著基と心得べからず、その上は又八目とさだめむは、今の

圍基にはあらずと也▲泥裏に有泥と云ふ、泥の中に泥のあらむ、能所各別しがたしこれ我即瞞汝と云心地也、我われなる程の詞也、正中偏、偏中正なるべし▲足をあらひ櫻をあらふと云ふ、これは泥に付たる詞也、しかれども、又思所なきにはあらし、賢人聖人にことよせて、世間の詞をひきよするなるべし、文選の第十七曰、漁父一首、屈原與漁父問答するに、漁父歌曰、滄浪之水清兮可以濯我纓、滄浪之水濁兮可以濯我足、と云事あり、此事を引寄て被書載歎▲珠裏有珠と云、光と珠とを各別にをかぬ詞也、彼をてらし自をてらすと云も、自他をてらすにてはなし、光と光と、珠と珠といはむが如し、かれといひ自と云は、爾不應我著我即瞞汝去也と云程の義也▲夾山圓悟禪師段 獵狗遶林空蹊、踏この義先世間の詞に、大に違す大方は蹤跡なきゆへをとく事なれば盤と珠との能所表裏はいかでもありぬべし、又蹤跡なき事をいはむには、珠も盤もなしと云べき也、珠にもあとなし、盤にもあとなきがゆへに又あともなどかはいはざらむ鳥道と云事もあり、わろき珠にこそあとはあれ、よき珠のいはれとして、あとなければ、あとなきこそ、やがてかれあとなし▲圓悟の盤走珠、珠走盤、偏中正、正中偏の詞は一向無蹤跡の詞也、是熱時熱殺閑黎の心地をのぶる也、今又此義を重て、我見處と云ふるには、羚羊掛角の詞也、是無蹤跡なり、かもし、は、角をいはにかけてぬる者なるゆゑに、足のあとのこさるることを、無蹤跡と云也、このし、のあとなければ、獵狗遶林に、空蹊踏すといふ、蹊踏はありきたづぬる也、寒暑蹤跡又以如此但羚羊掛角とてなかなからむ、必足のあと地につかずとも、角の跡石になからむや、ゆるに先師は羚羊いまは空に掛角也、林はいまは獵狗をめぐると被下語る、也、盤走珠の理符合すべし▲光前絶後と云は前後共に無跡也、盤走珠の詞の親切なるをめぐる詞也▲資聖寺明覺禪師段 忍俊韓獪空上階▲垂手とは、人に物をしめす心也、化道の心也、洞山の事

をさす也▲還同萬仞崖と云は、無邊際事也、化道際限なかるべし▲正偏何必在安排と云、なむぞかならずしもといへば、正偏をならべをくぎにてはなしと、きこゆれどもすべて偏正の詞を取よるをきらふなり、偏正の義をきらふと云は、偏正と云事のあるまじきにてなし、洞山に五位を立て、是を洞山の本意と稱する事を不用なり、この段にいふ、偏正は洞山の詞を取ていふ時に嫌なり、已前に克勤和尚の云所の偏中正、正中偏は盤走珠の意に引かけて、我いひいだす義なれば不嫌之、洞山に五位有と云心地の正偏を不用となり、たゞ一時の説法に偏正の詞の、いでこむはなかるべきにあらず、洞山の見處と、とりつむることをきらふ▲瑠璃古殿照明月、忍俊韓獹空上階と云ふ、瑠璃も明月も共にてらす、無蹤跡心地をのぶ、いぬがむなく階の上のぼると云も、林を獵狗のめぐると云詞あり、これ同程の詞なるべし、所詮いたづらと云も、空くと云も、無蹤跡心地也▲今の明覺禪師の詞熱時熱殺闍黎の義に心得合べき也、永平寺和尚、此段を別にほめらるゝ義のみえぬは、垂手偏正等の詞をかならずまほるべきことならずとなり▲長靈禪師段 門前依舊草芊芊、師々は多しと云へども、其義は一也、偏中有正正中有偏を、流落人間千百年とは仕ふ、欲歸未得と云は、かへるべき所がなければ、不歸也、三界唯心のとき、無歸所が如し、佛法詞如此可心得也▲門前依舊草芊芊たりと云ふ未得歸と云時、草芊芊とはいはるゝ也、かへるといはむ時は、門前に草なかるべき也、歸と云ことばに、つけて草の有無あるべしかへらばあとありて、草をふべからず、不歸は無蹤跡ゆへに草芊芊と云ふべき也▲洞山の見處を、偏正と拈來すべきにあらず、但し拈來なきにあらずとは、偏中有のぎをも、又今談する事を云也▲長靈の詞には、偏中有正とこそあるを、正の字を略して、偏中有と許、先師被仰るゝ事は此有の字有無の有にてなし、偏に可對正ならぬ心なり、凡偏正の義さまゝあるべし、故に談せむ

には、たとへば大乘を正に置いて、小乗を偏ととるべし、大乘をとかむとき、小乗のきくべき、機あらば、大乘の中に小乗をもならべるとき、小乗の法をとかむとき、大乘の菩薩も、其砌にのぞまば、又かれにきかしめむとき、偏中有正なるべし、今はそのぎならぬ、偏正をとくゆへに、只偏中有とばかりあり、大方は又偏も正もあるべからざることは、偏中に正あるならば、偏ととりがたし、正中有偏は又正ととりがたし、悉有佛性と談するるときと、如有差別▲大滂佛性和尚段 求劍者至今猶在、冷灰中爲君通と云は、熱時熱殺闍黎といふぞ、通する詞にはある▲枯木の生花とは、無寒暑の所を生花と仕ふ▲刻舟求劍と云ふいたづらなることを云ふ、たとへば○三界唯一心の時は、ふねのはたえりたらむ、えらざらむも同事歟、劍の落たる所もさだめがたし、一心なるゆへに▲冷灰中と云は、たとへばつめたきはいの中にて、火をもとめむ同事となり、但枯木に生花と云時は、劍をもたづね得、つめたきはいにも、火あるべし、枯木に花さくと云は、廢衆二乗成佛をゆるさるる事をたとへていふ、此義については、又枯木すべて花さかすとも云べきなり、其故は法華經のとき、廻身向大してこそ、成佛すれ、もとの二乗ながら不可成佛、さあらむときは枯木なるべからず、生木なるべし▲湛堂文準禪師段 老君頭戴楮皮冠此寒暑の由來とは、洞山の詞をいふ▲不干と云はをかさすと也、但今のをかさすは、物を置てをかさいるにてはなし、寒熱にも、をかさるゝにてはなし、たゞ寒時寒殺闍黎とくは同物の上にそのものをとく心地也、ゆへに行盡天涯諸世事といふ坐禪すれば殺人する程の詞也○不干底の道理は、戴楮皮冠にてあるなり、如此云心地は、一頭水牯牛出來道呼々也、又熱時熱殺と寒時寒殺との由來、作麼生ならむか、不干底の道理を、速道速道と云はるゝなり▲老君頭戴楮皮冠と云ふ、天涯と世事と、頭と戴とをじなき詞を云也▲佛燈禪師段 一生免得避寒暑、これ小兒子の言語の如しと

有偏正等五位接人，是胡說亂說也，不可見聞，唯當參究有上祖，正法眼藏，枯木禪師云，衆中商量道等者，蓋張氏編集，碧巖集中，有似之語，豈不斥之，不見道者，指夾山語耳，玉樓金殿句，焉偏頗見，行李是行李往來也，田庫田舍也，上祖七佛祖宗而已。

●慶元府天童山宏智禪師，嗣丹霞和尚，諱正覺，和尚云，若論此事，如兩家著碁相似，爾不應我著，我即瞞汝去也，若恁麼體得，始會洞山意，天童不免下箇注脚，裡頭看勿暑寒，直下滄溟瀝得乾，我道巨鼈能俯拾，笑君沙際弄釣竿，勿暑寒，應永寫本作勿暑寒，宏智住天童上堂錄本集中第四冊，初舉此話了，而提綱文裡頭看者，向寒暑自頂額眼睛上是也，故道勿暑寒，其宗旨現成，謂直下滄溟瀝得乾，豈非渾寒寒暑，渾迴避乎，以頭換尾，以尾換頭可知，我道句是即寒暑自渾迴避也，而不行李此是道闖者，立正偏等沙際弄釣竿，則洞山山下笑具，天童亦胡蘆笑。

●且著碁非無，作麼生是兩家，若道兩家著碁，應八目，若八目，非著碁，奈何，可謂可如是道，著碁一家敵手相逢也，雖然今宏智道，爾不應我著，須致心功夫，須轉身參究，爾不應我著者，道爾不可我也，我即瞞汝去也，勿放過焉，泥裡有泥也，蹈者洗足，亦洗纓珠裡有珠也，光明照彼照自矣，道爾不可我也者，寒時寒殺，是正當到時，消息則不必讓熱時，熱殺也，熱時亦反之知，即道我即瞞汝去也，勿放過焉也，不回互，自回互，故泥裡有泥及照自矣，洗足洗纓見詩經等，照彼照自，宗鏡錄云，如珠發光，光還自照，宏智和尚，一兩處道之，原出清涼，行願品疏，玄談，文須附錄。

殺闍黎道，如是自由，蓋致心轉身乎。

●夾山圓悟禪師，嗣五祖法演禪師，諱克勤，和尚云，盤走珠珠走盤，偏中正中偏，羚羊掛角，無蹤跡，獵狗遶林，空跟踏，今盤走珠道，是光前絕後，古今罕聞也，古來祇道，如走盤珠，無住著，羚羊今掛角于空，林今遶獵狗，跟踏恭謹行，不自安，則斂足而跟踏小步也，盤珠互走，其珠出閭風浦，正偏自沒蹤迹也，世上參學自爾不得，鯁色香者也。

●慶元府雪竇山資聖寺明覺禪師，嗣北塔祚和尚，諱重顯，和尚云，垂手還同萬仞崖，正偏何必在安排，瑠璃古殿照明月，忍俊韓獹空上階，此箇一頌，從來無咎，而今舉之，云云批評無它，宋禪及本邦參學，往往惑張本等，碧巖集評唱，而邪解紛紜，今爲之故，曰破斥恁麼。

●雪竇者雲門三世法孫也，可謂參飽皮袋，今道垂手還同萬仞崖，雖顯奇絕標格，不必可然，今僧問山示，因緣非強垂手不垂手，非出世不出世，況用偏正道耶，不用偏正眼，則如斯因緣無下手地，如無參請，巴鼻，則由不到高祖邊域，不覩見佛法，大家可更拈來草鞋參請，猥道高祖佛法，應正偏等五位止矣，明覺禪師，豈其爾乎，豈其爾乎，今是爲欲相見雪竇山，親言親口，謂出世不出世等言，則存評唱中，豈明覺圓悟本分乎嗚呼。

●東京天寧長靈禪師守卓和尚云，偏中有正，正中偏，流落人間千百年，幾度欲歸歸未得，門前依舊草芊芊，是也，雖強道取偏正而拈來也，拈來非無若，何是偏中有，克勤及

守卓二師偏正、不叱呵之、而破明覺、何其痛切、留心勤學、勿以文害意、而今若何是偏中有者、一口吞盡二三四句、作麼生吞盡、偏中有、通本作偏中有正、今本爲之是。

●潭州大滸佛性和尙、嗣圖悟、諱法泰、云、無寒暑處爲君通、枯木生華又一重、堪笑刻舟求劍者、至今猶在冷灰中、此之道取聊有公案、踏著戴著、力量一二句有踏著力、三四戴著、謂刻舟求劍、錯認無寒暑處、進步足下、終不活鱗鱗地。

●泐潭湛堂文準禪師云、熱時熱殺寒時寒、寒暑由來總不干、行盡天涯、諸世事、老君頭戴豬皮冠、且可問作麼生、是不干底、道理速道速道、速道速道、故、寒渾淪暑全機由來不免、總不干、箇裡無物、諸世事者、由行盡寒暑自天涯、是時、面孔之稱老君、塵中能作主、故、又時中無事、化外自來賓、是以戴豬皮冠、穩寒暑裡。

●湖州何山佛燈禪師、嗣太平佛鑑勸禪師、諱守珣和尙、云、無寒暑處洞山道、多少禪人迷處所、寒時向火熱乘涼、一生免得避寒暑、此珣師者、雖五祖法演禪師、法孫、如小兒子言語、然一生免得避寒暑、後應有老大成風、謂一生者盡生也、避寒暑脫落身心也、大凡諸方諸代如是事、鼓兩片皮、雖供達頌古未覩見高祖洞山邊事、奈者因佛祖家常不知寒暑應如何、而徒謂乘涼向火、特可憐愍老尊宿、邊聞取什麼、道寒暑可悲、祖師道廢、知此寒暑形段、經歷寒暑時節、使得寒暑來應更頌古高祖爲示道、應拈古焉、未不然不如知非、俗尙知日月、保任萬物、有聖人賢者、差品、有君子愚夫、差品、莫錯會佛道、寒暑猶可齊、愚夫寒暑、直須勤學、然一生下、且扶豎焉、成風者

起郢石手乎、謂下一爾、大凡以下、於文明矣、佛祖家常寒暑、宜拜卷首、

●正法眼藏春秋 爾時寬元二年甲辰、在越宇山奧再示衆、逢佛時而轉佛麟經、祖師道、衆角雖多一麟足矣、

明和七年庚寅六月朔、在東羽秋田仙北郡駒形莊版見內、釋堂山靈仙禪寺、十有寬仲長老移再會明憲下、命脈一尖參了矣、回向護法龍天善神冥助至恩者、

本光盟焚和南書

春秋參註附錄

命脈一尖 編參卷
殺闇 大凡讀殺以爲去聲、今謂、不爾音薩散也
光前絕後 已誌于三界唯心參尾
洗足洗纓
照彼照自
韓獪

涉典錄

拾第二十春秋卷 ▲無寒暑話 宏智錄卷四上堂出 ▲長靈大道南堂白雲湛堂 禪類
本則下共出 永平正法眼藏涉典錄卷八尾